
If You Over The World ?

蒼色ツバメ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

If You Over The World ?

【Nコード】

N2175N

【作者名】

蒼色ツバメ

【あらすじ】

17歳の高校生、俺、明守勇真の人生は唐突に終わった。死んだ後訪れた一面真っ白な空間にいた神様曰く「実は私の所為でした」だそうだ。殴っていいよね？お詫びとして、第二の人生とデイルメイクイの特殊能力をもらった俺は「剣と魔法のファンタジーが実在する世界」へ転生する。世界を超えた俺はその先で何をします？処女作です。プロットや設定などはほぼ後付けで、作者の好み99%で書いていきます。生暖かい目で作者の稚拙な文章に付き合ってくれると大変嬉しいです。主人公最強系が苦手な方は遠慮なく「戻

『をダブルクリックです。』

プロローグ バイバイ俺の世界&ようこそ別の世界（前書き）

あらずじでも書いたとおり、この小説は処女作で、作者の自己満足99%で書いております。設定やプロットはほぼ後付けで、誤字脱字も多いかもしれません。（極力そうならないように努力します・・・）

作者の稚拙な文章を読んで、一人でも楽しんでいただける方がいいれば本望です。

どうぞよろしくお願いします。

プロローグ バイバイ俺の世界&ようこそ別の世界

「……どうしてこうなった？」

俺の名前は明守勇真^{あきもりゆうま}。ついさっきまで人間^{人間}だった。

普通の都内の高校に通う二年生。友達は無^なからず少なからず。

親からももらった顔は、至って普通。自己評価すれば、中の下といったところ。眼も短い髪も、一般的な日本人と同じ黒色。

彼女はおらず、バレンタインには義理以外ももらった事が無い。成績は中の下程。

至って平凡で、楽しい毎日を送っていた。たまに、代わり映えしない日常に飽き、マンガやゲームのような冒険に憧れる時もあった。

だが、そんなものはあくまでゲームやマンガだから面白いんだと思っていた。

故に、実際にそんな出来事が起こって欲しいとは思わず、このまま平凡で平和な日々が続けば良いと思っていたのに。

そんなささやかな願いは、突然、実にあっけなく破壊された。文字通り粉々に。

その瞬間は俺の目には、ハイスピードカメラで撮った映像のよう

に全てがスローに見えた。

薄暗くなっただいつもの帰り道の交差点。

何人かの子供に突き飛ばされて、道路に飛び出した少年。赤信号なのにスピードを緩めないトラック。

気づけば、俺の体は勝手に動き出していた。常識的に考えて、一般的な運動能力しか持ち合わせていない俺が間に合うはずが無い距離だった。

しかし、届いた。今思えば火事場の馬鹿力と言うやつだろうか。

俺の手はその少年の体を掴み、歩道のほうへ放り投げていた。直後に体をぶち抜いた強烈な衝撃。

少年の体が地面についた時には、既に俺に意識は無かった。

そして、次に目が覚めたとき、俺は宙に浮かんでいた。

『すげえ俺空飛んでるよやっほい』などと驚いたが、下を見るとその興奮も冷めた。

俺は血溜りに沈む俺を見下ろしていた。ただし顔だけ。

俺が俺の首とコンニチハしたのは、俺が跳ねられた場所から五十メートル程離れた場所だった。

跳ねられた場所には赤い水溜りができており、トラックのブレーキ跡にポイントを打つように、腕や足が落ちていた。

文字通り粉々だった。

スプラッター映画も真っ青なグロシーンだった。俺がギャラリ―
だったら吐いていたな。

実際、地面にのたうつ野次馬も何人かいた。

そして今現在、俺も客観的に俺だったものごとく対面しているわけ
だが、どうにも現実感が無い。

というか、それが当たり前だ。いきなり、そうか俺死んだのかと
認められる人間などいるもんか。

ああ、まったく。

「・・・どうしてこうなった？」

「いや、スマン。それ原因は私」

突然聞こえた声と同時に、目の前の風景が、チャンネルを切り替
えたように変わった。

俺は凄惨な事故現場ではなく、一面真っ白な空間にいた。

何処までも白い。地平線と空の境目だけ薄っすら灰色に見える。

あとは白。ひたすら白！白！白白白白人白白白！

・・・人？

一面真っ白な世界に人が一人立っていた。

腰まである透き通った白髪はくまつに、男とも女ともとれる美しい顔。

首と袖の穴だけをあけたような、装飾の無い、風景と同じ白の服を着ていた。

目の前の男はしばし俺を見た後、困ったように言った。

「・・・ソーリアクション薄いと困るなあ。少しは『わぁ！』とか『キヤー！』とか『マンマミーア！』とか言ったらどうなのよ？」

「後ろ二つはおかしいだろ。特に最後」

「うん、そこで冷静に突っ込めるオマエもおかしいだろ」

「ごもつとも。でもこれは感覚麻痺してるだけなんだよなあ。あまりに自分の身に降りかかった出来事が実感できなくて。」

「まあ、オマエの異常性はひとまずおいといて」

「俺なのか？おかしいのは俺なのか？っていうかアンタ誰？」

「ん？私？私は神だ」

・・・あゝ、成るほど。OK、把握した。

すなわちこのヒトは頭がイッちゃってるかわいそうなヒトなんだな。

ひとまず119に電話だ。黄色い救急車カモン。あれ？携帯がないや。

「私は至って正常だと認知してるんだがな。あと、気持ちはわかるが、現実逃避の旅はその辺にしておけ」

おいおい、心を読めるのかよ。

「神様舐めんな」

「・・・分かった。とするとあれか俺は『オマエだったのか』と返せば良いのかそうなのか」

「某お笑い芸人の真似事でもないから。はい、現実を見ましょう。あなたは、死にました」

・・・ああ、分かってるさ。うんざりするほど分かってる。んんたって当事者なんだ。

まだ人生の四分の一しか生きてなかったのになあ。

まだまだやりたいことも、結構あった。せめて一度だけでいいから本命チヨコも欲しかったのに。

「ちっさい願いだな、それ」

言ってくれるなよ。

・・・ん？

「待てあんた」

「一応、神様なんだけど私。敬意を払うとかないの？」

「俺の質問の返答しだいでは払ってやる。アンタ、『原因は私』ってさっき言ったよな？」

「あ・・・、あゝ、うん、それはね、えっと」

目が泳ぎまくってるんですが。

と、突然自称神は土下座した。

「どうもごめんなさいでしたあ」

「悪いと思っただろ！誠意の欠片も感じられないんだけど!？」

「それはオマエの心が狭いからごめんなさい調子に乗りました」

睨んだら、再び土下座した。神を跪ひざまずかせた人間なんて俺が史上初じゃないか？

自称神は手をひらひらさせながら、まったく悪びれた様子を見せずと言う。

「いや実は君、本来あの少年を助けられなかったはずなんだよ。少なくともあの世界じゃ。だけど、たまたま私がクシャミしちゃって、君に追い風吹いちゃったんだよね。結果、お気の毒ですがあなたの命は消えてしまいました」

「人の人生をぼうけんのしょと同じにするなあああ！クシャミか！クシャミで死んだのか俺は！俺の17年は息ひとつで消し飛んだのか！」

ここキレて良い場面だよな？誰も咎めないよな？裁判になれば満場一致で無罪になる自信があるぞ。

「待つて待つて！落ち着いて！ちゃんと責任取るから！！」

「当然だ！アンタがまいた種なんだからな！」

「うん、なんか種とか言われると、この会話の流れができちゃった婚の言い争いみたいぶべらっ」

ああ、腕が勝手に。どうやらまだ殴りたい様だ。主にさらっと下ネタ吐きかけたこの口に。

「わかった。もう言わない。反省した」

だが後悔はしてなかったら、次は本気で殴ってやる。

「とりあえず、君は死ぬ予定じゃなかったたので、第二の人生取得のチャンスがありますです」

「生き返らせてくれんのか？」

「いや、それは無理」

「なんでだよ！」

「だって君の入れ物死体バラバラじゃん」

「……ああ、うん、確かにアレはひどかった。あ、やばい、思い出したら今更吐きそうになってきた。」

「……でも神様なら、事故前の状態に戻せるんじゃないのか？」

「咄嗟の思いつきだが、よく考えれば、神様ってなら何でもできるんじゃないか？」

「君の体だけってのは無理。君の体は世界の中の一つのもの。だから、そんなことをすると事故前の時間に戻ることになるんだ」

「……ってことは、俺が生き返るにはあの子を見殺しにしなきゃならんのか」

「事故現場に俺以外の死体は見当たらなかったから、恐らくあの子は助けられたのだろう。」

一度助けた命を、今度は自分のために殺すなんて事は、少なくとも俺はできないな。

何のために命捨ててまで助けたのか分からなくなる。

「それとも、体が原型をとどめた状態で死ぬまで死にまくってみる？」

自称神がおどけた様に言う。「冗談じゃない。」

「遠慮しとく」

誰が好き好んで何度も死にたがるか。

「で、どうする？生き返ることはできるけど、その場合、君のいた世界とは違う世界に行くことになる」

「何で世界まで移動せにやならんのだ？別人になるとかあるだろ」

「逆に君がそれでいいのって私は聞きたい。君は家族や友達の事を覚えてるけど、彼らからすれば君は他人ということになる。人間の心情とやらは完全には理解できないが、およそ良いものではないと思っぞ？」

「……まあ、確かに」

「んで、なんで他の世界じゃないとなのかって言うのは、この世界の作り方にある。君は今朝何を食べた？」

「は？・・・えつと。トーストだけど？」

なぜ突然世界の仕組みの話が朝食の話に変化したのだろう？俺の朝食は世界にとってそんなに重要なものだったのか？

俺は平々凡々な高校二年生。そんな俺の一挙一動が世界に影響を与えてるって、そんなバカな。気軽に飯も食べなくなるじゃないか。

「正解でハズレ。確かにそこまで重要じゃないけど、君の行動によって、『君が今朝トーストを食べた世界』ってのができたんだ」

「ちっさ！何そのちっさい世界！」

「だけど事実。ついでに、『君が今朝何も食べなかった世界』ってのもある」

「・・・世界が安っぽく感じるんだけど」

世界って結構安物だったのか。神様が苦労してあれしてこれしてできたもんじゃなかったのか。

「『もしも私が犬だったら』、『もしも私が女だったら』、『もしも私がケンカしたら』、『もしも私が今朝トーストを食べたら』」

「世界はそんな『もしも』の数だけ存在しているんだ。世界は、『もしも』の数だけ枝を増やし、伸びていく巨大な樹のようなものだ」

「君が死んだ今、君の世界にある君の魂は、『君が死んだ世界』の枝の中にある。枝は未来へしか伸びないから、君の死は既に否定できない」

「そして、その枝の分かれ目より前から、新たな枝を伸ばすことはできない。世界はそれを許さない。故に、君の魂は今いる枝に影響矛盾を生じさせない遠くの世界にしか移動できないってわけ。理解した？」

なるほど、全く分からん。ミスター平均、MVA【モストMost V
バリアブル アベレージAverage】舐めるなよ。

「・・・まあ、いいよ。無理だつて事さえ分かってくれば」

「納得はしてないが分かった。もういい、どんな世界にでも連れて
け」

もうヤケだ。どうとでもなれ。何処へなりとも連れて行け。煮る
なり焼くなり好きにしるい。

あ、でも幽霊妖怪魍魎ゆうれいようかいちみせつひりゅうがわんさかいるような世界は勘弁願
いたい。

へタレな俺は、生き返つて3日後にここに帰還することになるだ
ろう。

「行く世界は『剣と魔法のファンタジーが実在する世界』だ。君の
いた世界には、ヒトが空想する全てのことは起こりうる現実だつて
言つてたヒトが居ただけ、まったくその通りだよ。君らの空想の産
物であるゲームやマンガの世界も実在するんだ」

よかつた。とりあえずショック死することはなさそうだ。それに
そんな世界なら、俺の無いような知識でも、役に立つことがあるか

もしねない。っていうかあって欲しい。

「一応、転生における最終確認ね」

そう言っつて、一拍区切った後の自称神の顔は、真剣そのものだった。

「本当に生き返りたいか？」

と思っつたが気のせいだった様だ。何を言っつてるんだこの白ロソ毛は。当たり前だ。

「その世界じゃ君の常識は通用しないし、辛いことも、元の世界より多いかもしれない。いや、多いだろう。必ず辛いだろう。苦しいだろう。それでもいいのかい？」

だが自称神の目に、今までのようなふざけた雰囲気は無かった。

それは、決して俺を論そうとしている訳ではなく。

俺を哀れんでいる訳ではなく。

俺を試している訳ではなく。

あくまで冷酷に、無情に、そして公平に俺に問うものだった。

確かに生きることは辛い。腹が減るのは辛いし、眠れないのも辛い。人間関係で悩み、苦しむ事もある。死は生に対する休日とはよく言ったもんだ。

だが、それでも俺は生きたい。生き続けたい。死ぬのが怖いってのもある。既に一回死んでるけど。

だがそれ以上に。

「もう少し、楽しいことも苦しいことも辛いことも楽しいことも味わいたいんだよ。味わい足りないんだ、まだな」

ちとキザったらしい台詞だが、これは俺の本心だ。

俺の回答を聞いた自称神は、柔らかな微笑を浮かべた。まさに、神様のような、慈愛に満ちた笑顔だった。

「それが君の意思ならば、そうしよう。大丈夫。君ならやっていける。私が保証する」

「会ったばかりの奴が何言ってるんだよ」

「おいおい、私は神だぞ。まったく、神様のお墨付きなんてそうそう貰えるもんじゃないんだ。ありがたく受け取っておけ」

「へいへい、分かったよ。神様」

後ろを見ると、風景と同じ、真っ白で簡素なドアがあった。なんとなくわかる。

これが世界を繋げる扉だ。

家族や友達に言いたいことはたくさんあったが、それはもう叶わない。

苦しい。辛い。だが、全て背負っていこう。同じことを繰り返さないように。

生きて、何かを変えてやろう。

扉を開けると、眩い光が溢れ出てきた。

「んじやな。行ってくる」

「ああ、二度と帰ってくるなよ。人間」

そして俺は、世界と世界を超えた。

「っで、ストオオオオッッップ！……！！！」
「グエッ……！！！」

と、思ったら首を思い切り引つ張られ、扉の前に倒れこんだ。

一瞬お花畑ときれいな川が見えたが気のせいだろう。

「何しやがるんだゴリアー!!」

だが痛みはリアル。痛いモンは痛いので、当然怒りますよ俺は。

「すまん！忘れてた！君に能力与えるの忘れてたんだ!!」

「能力？」

「『剣と魔法の世界』って言っただろう？そんな世界にはモンスターなんかがお約束。生身で戦う気？ひのきの棒で魔王倒しに行くよ
うなもんだぞ」

「いや、そんな大事なこと忘れんなあ!!もう一度ここにとんぼ返りなんて死んでも嫌だからな!!」

「いや、そもそもここ死なないと来れないし」

「慣用句!!揚げ足を取るな!!」

「というか、なんかいつまでもここで神かみと漫才まんざいするような気がしてきた。

「いいねえ。コンビ名は『神とピト』『でびびっ?』」

「何その絶望的なネーミングセンス!?!っていうかチャッチャと能

「力とやらをくれ！」

分かった分かった、といいながら手を俺の胸の前にかざす。

手のひらには光の玉が浮いていた。まじまじと見つめると、それはゆるゆると七色に色を変えていた。

「どんな能力が欲しい？」

「俺が決めていいのか？」

だとすると、どうしようか？

悩むこと30秒、ひとつ思いついた。

「アレだ、剣技」

「どんな？」

「デル・メイ・クラ ってゲームのキャラクターの剣技。あれなら、異世界でも通用するだろう」

ちなみに俺はこのゲームかなりはまり込んで、シリーズ全て攻略し、テクニクも磨きまくった。

それに反比例して、成績は空中でエンジンと翼がもげた飛行機のように如く墜落していったが。

「ん、チヨイ待ち」

そういつて、自称神は目をつぶった。

そしてすぐに目を開ける。

同時に、手のひらの玉が完全に虹色になった。そいつを俺の胸に押し付ける。体の中へ何かが入ってくる感覚がこそばゆい。

光の玉は吸い込まれるように消えた。

「三人いたようだから、三人分の能力いれといた」

「マジで!?!」

一人でも十分強いのに、三人分とか最強じゃないか。

あ、でも一人はまずい。やたら目立つ右腕があったっけ。

あまり目立つことは避けたい。平穩無事に暮らせればそれでいいのだ、俺は。平和バンザイ。

「それは大丈夫。普通の腕と変わりないようにしといた。あと、トレスした結果、剣技だけじゃなく、身体能力やスキルも使えるから」

「・・・反則じゃねえか」

身体能力だけで半端じゃないんですが。

「魔法は、・・・まあ、何とかなるだろ。与えた能力だけで十分だと思うし。んじゃガンバってこいや」

言われなくても行ってもやるよ!と、次こそ本当に、俺は世界と世界を超えた。

プロローグ バイバイ俺の世界&ようこそ別の世界（後書き）

ちなみに主人公の能力をなぜ『デビルメイクライ』のモノにしたか
と言うと、作者が大好きなゲームということもありますが、一番の
理由は戦闘描写の補助になると思ったからです。

要は作者の文章力不足を補うためです。ゴメンナサイ……。努力
します……。

8月22日 脱字修正

第1話 人類初の異世界人との交流

重力とは、ある物体がその重さに比例して受ける力のことだ。すなわち物体に重さを与える力である。

ニュートンさんがリンゴが落ちこちるのを見て、手のひらポンと考え付いた『万有引力』と混同されがちであるが実は間違いで正解。万有引力というのは、重さを持つ物質やエネルギーがお互いに引っ張り合う力のことだ。

宇宙空間に浮かぶどデカイ岩の塊である地球と、たんぱく質とその他もろもろの物質から成る我ら人間は、この力によってお互いに引き合っている、というより磁石にくっつく砂鉄よろしく地球の表面にくっついているのだ。

故にある意味重力。実は遠心力や慣性力も重力の一種だ。これテストに出るよ。きつと。

現在地球の支配者、食物連鎖の頂点に君臨する我ら人間も、この力からは逃れられない。

ましてや、一般高校生である俺がどうしてそんな巨大な力に抗えようか。

俺は現在身をもってその事実を絶賛体験中だ。

世界を超える扉を開けた瞬間、俺の体は宙に投げ出され、重力様に捕まえられたのだった。

眼下には一面に深緑の森。

こつも視界いっぱいが森まみれってことは、森が壮絶にでかいか地面に近いかのどちらかだろう。せひとも後者であって欲しい。

これ以上この頬をぶん殴ってくれる偉大な大気様とはお別れ願いたい。

望みどおり後者だったようで、細かい木の枝や葉が確認できてきた。

だが、どちらにしろ相当高いところから落っこちてきたはずだ。大怪我は必須。

いや、死んだな俺。

おお、おれよ！にどもしんでしまつとはなさけない！

でもお城で復活は無い。死んだ後にふっかつのじゅもんを入力する画面など出てこない。

万が一出てきても、あの長いパスワードは覚えきれない。アレに何度泣かされたことか。

俺の体が木に突っ込む。枝や葉が容赦なく俺の皮膚を切り裂いて

いく。だが痛みはあまり無い。

神様パワー万歳。そうさ、生き返って即死亡とかありえない！何も恐れることはなああい！！

グシャ。

地面に落ちた痛みに、神様パワーの効果は発揮されなかったようだ。全身を衝撃が貫いた。

よくよく考えてみれば、最初は下の細かい様子が見えないところから落ちてきたのだ。本来なら、全身の骨の数が増えていたはずだ。

ついでに俺が生まれてから不眠不休で働き続けた心臓さんも、永遠の休暇を御取りになっていただろう。

以前は即死だったようで痛みは無かったが、これはきつい。

いかん、眼が霞む。本格的にヤバイ。あの真っ白空間と白髪ロン毛にタダイマはしたくない。

そう思ったとき、目の前に天使が現れた。

金色こんじきの髪をポニーテールにし、皮の鎧らしきものに身を包んだ美しい顔の天使。

ああ、畜生。お迎えがきやがった。でもこんな美人な天使なら良いかもしれない。自然と頬が緩む。

もうつかれたよパ ラッシュ。それにすごく眠いんだ……。

半ばヤケになりながら、俺は風船のように飛んでいこうとする意識を手放した。

「……なんだ？」

金髪の髪を一つに束ねた女性が、腰に差してある剣の柄に手をかけた。

年の頃は15、6。美しく、精悍な顔つきをしていた。深い蒼の瞳が、突然不審な音のしたほうを睨む。

何か木々の間を無理やり通り抜けたような音。この辺りにそのような大型の化け物モンスターはいないはずだ。彼女の記憶がそう教える。

警戒しながら、森の奥へと足を進めた。ひよっとしたら、自らが探していたモンスターかもしれないと思いながら。

草を踏みしめる音がなるべく出ない様に慎重に進む。

そして、

「……っ!」

汚れたボロボロの黒い服を着た黒髪の青年が、地面に横たわっているのを発見した。

破けた布の下の皮膚は裂け、血が布を伝い地面を濡らしていた。

手足は所々ひどいアザになっている。一目見ただけでも危険だとわかる状態だった。

だが、彼女はすぐには近寄らなかった。人の姿に擬態するモンスターの聞いた事は無いが、用心するのに越したことは無い。

しかし、本当にただの人だったら？

彼女が人道と理性の狭間で迷っていたとき、その青年が震えながら顔を上げた。

そして彼女の顔を見て、笑みを浮かべた。

まるで助かったと安堵したかのように。直後に青年は再び頭を地面に落とした。

間違いない。彼はただの人間だ。そう判断した彼女は、すぐさま彼の元へ駆け寄った。

「おい！しっかりしろ！！」

だが、青年は死んだかのように動かない。不規則だが、胸は上下している、辛うじて生きているようだ。

「死ぬんじゃないぞ」

彼女は持っていたポーチから、緑色の液体が入ったビンを取り出し、それを傷口に塗りつけていった。

さらに青年の口を開かせ、残りの液体を飲ませる。傷口は既に薄っすらと膜を張り、呼吸も落ち着いてきたようだ。

この青年は何者なのだろうか？なぜこんなにボロボロなのだろうか？さらには服も髪も瞳も珍しい漆黒の色。

疑問は尽きなかったが、とにかく一刻も早く助けなければと、思考を中断させる。

彼女は青年を担ぐと、すぐに森の出口を目指した。

「・・・知らない天井だ」

俺の家の天井に木目模様なんてなかった。と、すれば夢オチって訳ではないのか。

だがあの真っ白空間にいらなくてよかったと心の底から安堵する。

ゆっくりと体を起こすと全身にズキズキとした痛みが走った。だが我慢できない程ではないので、無視してまず自分を観察する。

腕。在る。足。在る。頭。在る。幽体離脱。していない。痛み。感じる。結論。俺生きてる。やつほい。

いつの間にか着ていた簡素な服は白色。病院で着るような雰囲気
の服だった。

って服装が変わってるって事は脱がされたのか？慌てて下着を確
認。良かった履いてた。何が良いのかいまいち分からんが。

所持品は無し。当たり前か。でも、せめて神様サービスで、ダ
テのあの二丁拳銃は欲しかったな。二丁拳銃カコイイ。こちらの世
界に銃が無かったらどうしようか。まあいい、おいおい考えよう。

次に周囲を観察する。

六畳ほどの小さな部屋。自分が寝ていた少し硬い木製のベッドの
右横には、ランタンのあった小さな棚があった。左側は窓になっ
ており、青空と雲がよく見えた。ああ、いい天気だ。

ぼんやりと空を眺めながら、あの雲某マッチョなランプの精みた
いな形だなぁとか考えていると、ギィイという木製の扉独特の音と
ともに部屋のドアが開いた。

「起きたか。痛むところは無いか？」

入ってきたのは、気絶する前に見た天使だった。今更だが、羽は
生えてない。

「……？どうした？私の顔に何か付いているのか？」

「あ、いえ。大丈夫です。何でもありません。はい」

天使と見間違えてましたなんて言えない。そんな齒の浮くような口説き文句言ったら、俺は昇天する。死因は羞恥による発狂死だな。

改めて見てみると、しかし天使という言葉が間違いで無かったように美人だ。美少女万歳。人類の宝を捧めるとは有難や。

状況と記憶から省みるに、神様により殺されかけた俺を助けてくれたのがこの人だろう。お礼を言わねば。

「あなたが助けてくれたんですね？ありがとうございます」

しかし、彼女は何故か申し訳なさそうな顔をした。

「礼には及ばない。むしろ私は君に謝らなければいけない」

「なぜですか？」

「……私は最初に森の中で君を見たとき、助けるのを戸惑ったんだ。瀕死の重傷だった君を、モンスターかもしれないと疑ってたな。本当にすまない」

そういつて深々と頭を下げる美少女。いやいや、そんなことされると困るんだが。

確かにその所為で復活直後に死亡というアホらしい展開になっていたかもしれないが、結果的には助かっているんだ。終わりよければ

ば全てよし。

実際に掛けたのは神様の所為だし。あのバカ

「いえ、助けてもらっただけでも有難いです。あのままだったら確実に死んでましたから。」

そういうと、彼女は少し安心したようだ。そうか。とつぶやくと、肩にかけていたポーチから、果物らしきものを取り出す。

「腹が減っているだろう。こんなものしかないが」

そういつて彼女が差し出してきたのは、リンゴ程の大きさの赤い実だった。

というかどうか見てもリンゴだ。そう言えば、死ぬ前にまだ夕飯食べてなかったっけ。

「ありがとうございます。頂きます」

とりあえず一齧り。甘酸っぱい味と、シャリシャリとした歯ごたえが、これはリンゴだと脳に認識させる。

食べ物と同じなのはよかったと、一安心。

結局丸々一個ペロリと平らげてしまった。

食べ終わるタイミングを見計らって、彼女が口を開いた。

「さて、君にいくつか質問したいんだが、よいか？ いや、先に自

「己紹介をしておこうか。私の名前はエリシア＝アシルだ」

「俺の名前は明守勇真です。あ、ちなみに名前が勇真です」

「姓と名の順序が逆とは珍しいな。それと、敬語はいいぞ。堅苦し
いのは好かん」

なんつーか、漢まことだな、エリシアさん。でもこれ初対面の人には必
ず敬語を使うと言う日本人の悲しい習性なのよね。

「えっと、ではエリシアさん」

「さんも付けなくていい」

「・・・分かった。じゃあ、エリシア」

「ん。それでいい」

「それで、質問って?」

「まず、一つ目に、ユウマはなぜあんな所に居たんだけ?それもあんなボロボロの状態で」

・・・まずい。本当の事をそのまま言うのはリスクが高い。

異世界からやってきました

なんてのたまった日には、下手するとここから運び出されて、窓に格子の入った病院に入れられかねない。

どうやって誤魔化そう？嘘や冗談は通じそうに無い。

とりあえず、転生の事や、前の世界の事はある程度誤魔化しながら、本当のことを言っておこう。

「……少し色々あってね。故郷を追われたんだ。ああ、でもやましい事はしてないから、それだけは信じて欲しいな」

ある意味迫害に近い形で此処に来たから、あながち間違っていない。

エリシアに笑みを向けるが、強張っていなかっただろうか？やっぱり嘘を言わなくて良かった。言ったら丸分かりだっただろう。

ってチヨイ待て。なんで反応なし？もしかしてバレた？

「……そうか。いや、すまない事を聞いたな。大丈夫だ。私は信じる」

あまり大丈夫な雰囲気しないんですけど！？

いや、信じてくれるのは有難いけど、その哀れみに満ちた眼で見るのは止めてえ！。

俺の心のHPがガシガシと削られていくから！あれ？目から汗が出てきそうだよお母様。

エリシアは何か考えているようだ。

俺の処置を考えているのか？まさか本当に格子付きの病室に？嫌

あああ！！

「・・・ユウマはこれからどうするつもりなんだ？」

とりあえずその類たぐいの所へ連れて行かれない様に逃げたいです。

しかし、よくよく考えてみると、俺にはこの世界で生きていく方法が無い。

第一にお金が無い。そして、お金を稼ぐ手段も無い。お金がないとご飯は食べられません。世の中ギブアンドテイク。

俺は何か特別な技術を持っているわけでも無い。畑を作って農業くらいならできるかもしれないが、それには土地が必要だ。

商売でもするか？だがそんな知識は無い。そもそもこの世界貨幣価値すら分からない。いかん。八方塞だ。

「まだ考えてないや」

というかできる事がありません。思わず苦笑い。不景気の煽りを受けた社会人の気持ちが良いわかる。ぜひ俺に職を。

「だったら、まずはギルドへ行ってみたらどうだろうか？」

「ギルド？」

あれか？ゲームとかによくある、ハンターとか冒険者のハローワークのことか？

「ギルドを知らないのか？」

「俺の故郷ではそんなモノは無かったから」

エリシアは少し驚きつつも、ギルドについて説明してくれた。

それは、やはり前の世界のゲームやマンガにあるシステムと同じだった。

何か自分ではどうしようもない問題が発生したとき、その人および団体は、ギルドにその問題を解決してくれるように依頼する。

ギルドに登録された人々『冒険者』達は、それらの依頼をこなし、報酬をもらう。

要するに、依頼者と冒険者を仲介する会社のようなものだ。

さらに冒険者にとっては、情報収集の要となる場所でもある。

依頼は、草むしり程度のものから、災害レベルのモンスターの退治まであるらしい。っていうかやっぱりモンスターって居るんだ。恐ろしい顔をした奴等ばかりだと嫌になるな。

脱線したが、そのように、依頼の難易度が幅広いため、個人の持つランクによって受けられる依頼のレベルが変わってくる。

ランクはGからSの八段階に分かれている。自分より高いランクの依頼も受けることはできるが、危険が大きすぎるので、まず誰もやらない。

高ランクの依頼ほど難しいが、その分報酬も大きくなっていくぞうだ。

「これが大まかなギルドの仕組みだ。細かいところははまだ色々あるが、それらはギルドの受付にでも聞けば教えてくれるだろう」

「なるほど。ありがとう」

「別に強制はしていないぞ。他にやりたいことがあるならそちらをやった方がいいだろうし。やはり危険も付きまとう」

「と言っても、今は冒険者になるしかお金を稼ぐ方法はなさそうだし、やりたいことも特に無いから頑張ってみるよ。低ランクの依頼なら、危険も少ないだろうし」

「わかった。それではギルドに登録の手続きをしに行かなければならないと言っても、今すぐには無理だろうから、明日にしようか」

「大丈夫。もう怪我は治ったみたいだし」

そう言って、体を大きく動かしてみせる。切り傷はとっくに塞がっているし、骨折や脱臼もしてないようだ。

「……うん、やっぱりチートだわ。」

ああ、やっぱりエリシアさん驚いてらっしゃる。

「すごい回復力だな。回復魔法を使えるのか？」

さすが異世界^{ファンタジー}。だが俺は魔法なんて知らないぞ。

そう告げた事により、俺は本日三度目のエリシアの驚いた顔を見ることになった。

「起きたか。痛むところはあるか？」

先刻助けた窓の外を眺めている青年にエリシアは問いかけた。

彼はエリシアの方へ振り向き、しばし彼女を凝視した。

「……？どうした？私の顔に何か付いているのか？」

「あ、いえ。大丈夫です。何でもありません。はい」

青年は慌てたように言った。なんだろうとエリシアは思ったが、あまり気には留めなかった。

彼は改めてエリシアに向き直ると、頭を下げた。

「あなたが助けてくれたんですね？ありがとうございます」

エリシアは彼の礼を受け、複雑な顔をした。

後もう少し治療が遅れていたら、恐らく彼は死んでいたのだ。それも自分の身勝手のせいだ。

「礼には及ばない。むしろ私は君に謝らなければいけない」

「なぜですか？」

「・・・私は最初に森の中で君を見たとき、助けるのを戸惑ったんだ。瀕死の重傷だった君を、モンスターかもしれないと疑ってな。本当にすまない」

今度はエリシアが青年に向かって頭を下げた。

青年は困ったように言う。

「いえ、助けてもらっただけでも有難いです。あのままだったら確実に死んでましたから。」

その言葉で、エリシアは彼がとても優しい人間なのだと感じた。まだ彼女自身は納得してはいないが、彼のためにも謝るのは止めることにした。

彼女は、腰に下げたポーチから、買ってきたリンゴを取り出し彼に差し出す。

青年はリンゴを受け取り一口齧ると、安心したような顔つきになり、あっという間に平らげてしまった。

彼がリンゴを食べきったタイミングで彼女は口を開いた。

「さて、君にいくつか質問したいんだが、よいかないや、先に自己紹介をしておこうか。私の名前はエリシア「アイルだ」」

「俺の名前はアキモリユウマです。あ、ちなみに名前がユウマです」
「姓と名の順序が逆とは珍しいな」

「こちらの世界では一般的に、名の後に姓が続く。以前はそういう名前の付け方をする地域もあつたらしいが、今は無くなったと言っている。エリシアは更に青年に興味を疑問を抱いた。

「それと、敬語はいいぞ。堅苦しいのは好かん」

「えっと、ではエリシアさん」

「さんも付けなくていい」

「・・・分かった。じゃあ、エリシア」

「ん。それでいい」

「それで、質問って？」

「まず、ユウマはなぜあんな所に居たんだけ？それもあんなボロボロの状態で」

するとユウマは何やら考え込みはじめた。

傷だらけの体に、剣も鎧もつけていない姿。

モンスターに襲われて逃げてきたのか。或いは、人間からか。

そうすると彼は何者か。ただの遭難者か、下手をすると犯罪者か。だが先ほど感じた印象は。

様々な考えが彼女の頭を巡っていると、ユウマがようやく口を開いた。

「・・・少し色々あってね。故郷を追われたんだ。ああ、でもやましい事はしてないから、それだけは信じて欲しいかな」

そういつて、ユウマは笑った。

その乾いた笑顔から垣間見えた深い悲しみに、エリシアは絶句した。

まるで全てを達観したかのような雰囲気は、嘘を言っているようにも感じなかった。

だが彼女は、決してその驚きを表に出さないように勤めた。

他人の心の傷に土足で踏み込んでしまった自分を叱責し、彼女は再び頭を下げる。

「・・・そうか。いや、すまない事を聞いたな。大丈夫だ。私は信じる」

彼が優しい人間であることは間違いない。仮に彼が咎人とがびとだったとしても、何か深いわけがある筈だと、エリシアは考えた。

彼はまだ笑顔を浮かべていた。だが、何か困っているように見える。

そして彼女は気づいた。

故郷を追われた今の彼には生きていく術すべがないのではないだろうか。

彼は着の身着のままの状態で、金品のたぐいは持っておらず、指輪等の装飾品も見当たらない。彼はこれからどうするつもりだろうか。

「……ユウマはこれからどうするつもりなんだ？」

疑問は知らず知らずの内に、言の葉となって彼女の口から飛び出していた。

「まだ考えてないや」

おどけたように彼は再び笑うが、その中にある寂しさは隠し切れずにいた。

そこで、エリシアはユウマに一つの提案をした。

「だったら、まずはギルドへ行ってみたらどうだろうか？」

腕に自信があれば冒険者として十分活動でき、自信が無くとも、少なくとも金を稼ぐ事はできる。そう思ってたの提案だった。

自分の懐から多少のお金を出してもよいとエリシアは考えていたが、彼女の財政事情も余裕のあるものではなかった。

「ギルド？」

ユウマは首をかしげた。ギルドはこの国の主要な施設の一つである。それを知らない人は居ない程、有名なものであった。

「ギルドを知らないのか？」

「俺の故郷ではそんなもの無かったから」

と、ユウマは困ったように言った。だとすれば、本当に彼はどこから来たのだろうか、再び疑問が頭をもたげたが、深く詮索するのは止めた。

彼女はユウマにギルドについて大まかな説明をする。

彼はすぐに仕組みを理解し、傷も直っているから早く行くことと言った。

彼の治癒能力の高さに驚きつつ、エリシアは用意していた彼の服に似た、黒の服を渡す。

二人は準備を済ませ、ギルドへと向かった。

第1話 人類初の異世界人との交流（後書き）

勘違い系目指したいけど、めっちゃくちゃ難しい……。

8月24日 若干修正

第2話 武器とお金はよく考えて使いましょう

俺は石畳でできた道を歩きながら、初めての異世界の空気を味わっていた。正直前の世界と変わりません。

雲がぼつぼつと漂う青空に浮かぶお天道様は地上を程よく暖め、時折吹く風が気持ちいい。まさに小春日和。こちらにも四季とあるんだらうか？

立ち並ぶ建物は石や木をベースにできており、まさにファンタジーらしい、中世ヨーロッパのような町並みだった。

大通りと思しき道の両脇にはいろんな店が並び、おばちゃんの威勢のよい声や、値段交渉に熱くなっているおっさん達の声が聞こえてくる。

「あまりキョロキョロしてると迷子になるぞ」

どんなものが売っているのか気になったが、エリシアと離れると俺は間違いなく迷子になるので、離れない程度に商品を見ていく。

おお、武器屋もあるのか。あ、置いてかないで。

周りの建物より一際大きな建物へとエリシアは歩みを進めていく。

石の精巧な組み合わせによって作られたその建物は随分古い感じがしたが、綺麗なものだった。

入り口の両開きの扉は開け放たれ、その上には何やら記号の書か

れた板、看板らしきものがある。見た事も無い、まるで象形文字のようなそれを俺はしかし、なぜか読むことができた。ご都合主義万歳。

ギルドの中は喧騒に包まれていた。

学校の体育館程の広さに、長机や丸テーブルや椅子が置いてある。入り口から入って両サイドにカウンターが見えた。左側はどうやら飲食物を注文できるようだ。胃袋を刺激するいい匂いがする。

大勢でテーブルを囲み、宴会をしている人たちもいれば、武器を背負い何やら話し合っている人たちもいた。全員恐らく冒険者だろう。

しかし奥には、豪華な服をきたメタボなおっさんたちも話し合いをしている。あれは冒険者か？火を吹くモンスターに出会えば、油がのりまくったステーキになりそうだ。

「こっちだ」

右側のカウンターに歩いていくエリシアをあわてて追いかける。

「ようこそいらっしゃいませ。本日はどういったご用件で？」

受付の栗色ショートヘアのお姉さんが、営業スマイル全開で話しかけてきた。

来ている服のデザインは、何だかあちらの某所の電気街にてお目にかかれる、お帰りなさいませご主人様的人々の服に近かった。服

の色が茶色なので、雰囲気が大分違うが。

人間外見でイメージはがらりと変わるものだ。故にイケメンは世間からちやほや。死ねばいいのに。

「ああ、登録を申し込みたいんだが。」

「そちらの黒髪のお方ですね？」

「そうです。」

「ではこちらの羊皮紙に必要な事項をお書きください。」

差し出された布っぱいものと、インクに浸した羽ペンを受け取り、俺は固まった。

「エリシア先生……。文字が……。書けません……。ッ！」

「む、そうか。私が代わりに書こう。分かったから血の涙を出しそうな目で羊皮紙を睨むんじゃない」

文字が読めるのに、書けないってのはなんか悔しい。

だがエリシア曰く、こちらの世界では、読めても書けない人は結構居るらしい。書く必要があるのは商人や貴族、王族くらいで、一般人は読めればいいという感覚なのだそうだ。

だが、将来必要な場合もあるかもしれないから、少しずつ勉強しておこうか。面倒くさいが。

「了解いたしました。ユウマ＝アキモリ様で登録させていただきました。ギルドカードの発行までしばらくお待ちください。その間に、ギルドについて説明を致します」

「ん、道中に説明してもらったから大丈夫」

「わかりました。依頼はあちらの掲示板に貼ってありますので、依頼を受ける場合、受けたい依頼用紙を持ってカウンターにお越しください」

お姉さんが指した方向には、何人かの人が掲示板を覗んでいた。

ああ、そうだ。とエリシアがお姉さんに話しかける。

「ここには貸し出し武器があったらどう？彼に武器を持たせたいのだが」

「待つてエリシア。俺、モンスターを倒す依頼なんか受ける気無いけど？」

「それでも護身用に持っておけ。薬草採取のような依頼を受けるにしても、町の外に出ればモンスターに会う可能性も、無くは無いからな」

「そうか。それじゃ、お願いします」

「ではこちらへどうぞ。ご案内致します」

カウンターの横にある通路に行くお姉さんについていく。

案内された部屋には、いくつもの武器が刺さった樽が置いてあった。

壁にも斧やハンマー、巨大な剣、ナイフなどが掛けてある。あの鎖のついた鉄球はモーニングスターかな？ 実際見てみると実用性ない気がするんだが。

「こちらの武器の中から一つお選びください。注意事項として、貸し出し武器を使っている間はFランク以上にはなる事ができませんのでお気をつけください」

「わかりました」

別にランクを上げるつもりは無いけどね。

とりあえず、斧やハンマーは使う気が無いので、樽の中の剣をみていく。

幅広の剣から、細身の剣、俺の身長ほどもある大剣まである。本当にこれ使えるのか？

壁に掛けてある大剣を手に取り、鞘から引き抜く。思ったほど重くは無かった。が、自在に振り回すのは無理そうだ。元の場所へ返しておこう。

・・・なぜかエリシアとお姉さんが俺を珍獣を見るような目で見つめてくるんですが。

「なに？」

「いえ、両手大剣を片手で持った方なんて初めて見ましたので……」

「本当に冒険者で食べていけるぞお前」

ジーザス。俺の立ち居地が平穩から一歩遠いところへ移動した。厄介ごとフラグの火種を作ったような気がする。

気を取り直してさらに剣漁りを続行。このグニャグニャした刀身の剣は、フランベルジェってやつか。刀はないのか？

幅広の剣や細身の突剣、切れ味の鋭いナイフなど、色々あるがどれも今ひとつしっくり来ない。

しばらくかかって、ツヴァイハンダーと呼ばれる両刃の大剣に決めた。長さは約1,8mといったところ。切れ味は悪い。

だが、もともと西洋剣は『叩き斬る』事を目的として作られており、実際鈍器に近いところがある。切れ味より、重さが攻撃力を決める。そう考えての選択だ。

肉厚な剣で、鏢は刃に向かって傾いている。重量も両手剣だけあってそこそこある様だが、俺には大して重くは感じない。

柄頭には番号が書かれてあった。番号は4477。幸と不幸が仲良くチークダンスを踊っている。

剣を皮製の鞘に戻し、剣に下げるベルトを肩に架け帯刀する。ちよつと違和感があるが、じきに慣れるだろう。

*

「これがユウマ様のギルドカードになります。無くしました場合は再発行致しますが、その際には銀貨1枚を支払うか、ランクを一つ下げることになりますのでご注意ください」

「ギルドカードに埋め込まれているこの宝石は？」

「それはカードの所持者のランクを表すものです。Gから順に灰、空、桃、黄、緑、赤、青となっております、ランクが上がると宝石の色が変化します。」

「なるほど」

「他に何か質問があればいつでもどうぞ。ちなみに貸し出し武器は、自身で購入なされた武器が入った時に、返却してくださいれば結構です。また、ランクF以下の間は、ギルドの宿舎がご利用できませんので、よろしければどうぞ。」

「分かりました。ありがとうございます」

直ぐに俺は依頼が張ってある掲示板に向かう。だがエリシアに首を引っ張って止められた。何このデジャブ。

げげげほとむせる俺に謝りつつ、エリシアは言う。

「いきなり依頼を受けるのか！？いくら治ったからといって無茶を
しては駄目だ！」

「それを数秒前に俺の首を引っ張った人物に言ってあげてください」

「いや、それは悪かったが・・・」

「大丈夫だって。それに街から出るつもりはないし」

そういつて俺が指差した先には、雑事系と書かれた掲示板だった。

雑事系とは文字通り、街中の小さな依頼、たとえば犬の散歩や草むしり畑仕事の手伝いなどの依頼のことだ。

ランクが高くて、それはただ時間がかかるとか、一人二人では無理なものなどが殆どだ。

先程武器庫でお姉さんとエリシアに驚かれたことから、こちらの世界で俺はかなりの力持ちであることがわかったので、力仕事関連の高ランクの依頼を請け負おうと思ったのだ。

雑事系の依頼はあまりやる人がいないようで、掲示板には所狭しと依頼用紙が貼ってあった。

「確かに雑務系なら危険は無いが・・・」

「でしょ？それで、エリシアにはどの依頼が報酬がいいか聞きたいんだ」

「・・・ではこれはどうだ？荷物運びの依頼で、報酬が銅貨2枚だ」

「銅貨？そういえばこの国の貨幣ってどうなってるの？」

「この国の貨幣は半銅貨、銅貨、銀貨、金貨、そして白金貨の5種類がある。半銅貨が100枚で銅貨に、銅貨が50枚で銀貨。銀貨

は50枚で金貨に替えられる。そして、白金貨は金貨100枚分だ。金貨や白金貨は国家予算レベルで、まず見ることが無いだろうから気にしなくていい」

エリシアのポーチから、赤茶の円盤が2枚、銀色の円盤が1枚、計3枚の円盤が出てくる。赤茶の円盤の一つには真ん中に丸い穴が開いている。そちらが半銅貨のようだ。

「この宿舎を利用している間は、贅沢をしなければ一ヶ月大体銀貨一枚で足りる。食事が一回半銅貨3、40枚だからな」

「ふむふむ」

ここは食堂みたいなもんだから、一回の食事が大体3、400円程度と考えていいだろう。

そうすると、半銅貨一枚が約10円、銅貨が1000円、銀貨が5万円と言った感じが。

金貨と白金貨については考えない。性根から小市民である俺には国家予算級の金額など知ったところで、規模がデカすぎて分からないだろう。

300円のラーメンを毎日三色食べても2000年かかるとか例えられればわかるかも知れない。それでもポカンだが。

「それじゃあ早速この依頼を受けてくるよ」

「分かった。私はしばらくこの町にいるから、何か困ったことがあればできる限り力になろう」

優しい命の恩人に感謝しながら、俺は掲示板から引っぺがした依頼用紙を受付に持っていった。

依頼を受けに行ったユウマを見送ったエリシアは、周りの視線を無視しつつカウンターへ向かった。

本当はユウマと共に簡単な依頼を受けても良かったのだが、彼女自身、自分の依頼の期限が迫っている。

ましてや、自分は聖人君子ではないのだ。

出会ったばかりの人にいつまでも気にかかる程お人好しではない。

エリシアは自分にそう言い聞かせた。

「しかし両手大剣を片手で振り回したのには本当に驚いた。彼ならいくらでも上は目指せるだろうに・・・」

口惜しそうにぶつぶつと呟くが、本人がそれを望んでいないならば仕方が無い。すっぱりと切り捨てることにし、自分がこれからやるべきことに意識を向ける。

ポーチからギルドカードを取り出し、カウンターに置きながら受付嬢に話しかける。

「今私が受けている依頼の延長を頼みたい」

「依頼内容を確認しま…ッ！……わかりました。何日程延長致しますか？」

「二週間だ。二週間でカタをつける」

「かしこまりました。…どうぞ御武運を」

心配するなど言って、エリシアはギルドを後にした。

彼女がギルドカードをポーチに仕舞う寸前に、赤い光が煌いた。

赤色の宝石を埋め込んだ、最高位ランク、Bランクのギルドカードの持ち主である彼女は、自分の武器を取りに宿のほうへと足を向けた。

第2話 武器とお金はよく考えて使いましょう(後書き)

感想、意見お待ちしております。

《10月22日》一部修正しました。

第3話 何事もほどほどが一番（前書き）

知らぬ間にPV2000オーバー、ユニークアクセス800越えているのを見たときには、「あれ？まちがって他の人のページに偶然ログインしたのか？」と、本気で考えました。

三度見直して信じられました。感謝感激雨あられです。

そして、その分更新が遅れたことを深く反省しております。

学校です。行事が悪いんです。2週間で文化祭と運動会をやるとかありえませんが。準備時間が足りませんよ先生様。

しかし何だかんだ言っても結局言い訳です。ごめんなさい……。

第3話 何事もほどほどが一番

「あんちゃんが依頼受けてくれた人かい？ま、よろしく頼むぜ」

「はい、よろしく願います」

目の前の自己主張の激しい筋肉をお持ちのおっさんは、若干残念そうな顔をしながら俺に言った。日に焼けた小麦色の肌とスキンヘッドが筋肉とベストマッチ。大変暑苦しい。

まあ、おっさんが落胆するのも無理は無いだろう。能力があるとはいえ、見た目はヒョロい子供だ。

目の前に佇む倉庫の中には、結構な大きさの資材や家具らしきものが見える。きっと自分に似た体型の冒険者が来ることを期待していたんだろう。

大の大人が3、4人は必要だろうと推測できるようなものがないくつもある。それを俺のような奴が持ち上げられるとは思えないだろう。

逆の立場なら帰れの一言で終了。だが全てを見た目で判断するのは良くない。人間中身が大事なのだ。

そうでないと一般人の7割が死ぬ。まず間違いなく心の病、^{やまい}特にうつ病で。

極稀な場合を除いて、残り3割は当然イケメン。嗚呼、忌々しい。

「とりあえず、中のモンを資材と商品とに分けて、それぞれの台車に乗つけてくれ。商品は傷つけるなよ。ところでアンちゃん、他に仲間は？」

「いえ、一人ですよ」

「おいおい、一人で大丈夫かよ？」

「こつ見えても力には自信があるんです。というかでなきゃ来ませんよ」

そりゃそうかと、おっさんはつるつる頭をぺしんと叩く。良い人ではあるようだ。

この依頼は自分の筋力がどの程度あるか確かめるための実験にもなる。

自分の力がある程度コントロールできるようになっておかないと、色々不便になる。

自分の感覚で若干重いと感じたくらいの大剣を片手で持ち上げただけで、お姉さんとエリシアに目を丸くされたんだ。

しっかり加減しないと、尊敬を三段ジャンプで飛び越えて畏怖までたどり着くだろう。化け物扱いされるのは勘弁だ。

とりあえず倉庫の中にある、一際大きな金庫らしきものを運んでみることにしよう。一辺が1メートルほどの立方体の金庫だ。

いかにも、俺は重いぜといった風格をかもし出している。

「おいおいおいおい、いくら自信があるっていったってそいつは無理だ」

おっさん連中が呆れたように忠告するが無視だ。金庫を抱え込むように手を回し、一呼吸。そして息を止め、思い切り引き上げる。

普通に持ち上げられました。それどころか、勢い余って上に投げるところだった。

重いことには重いが大したことは無い。以前に20?のバーベルを引っ張り上げた時とあまり変わらない。

おっさん連中は、鳩が豆鉄砲を食ったような顔をしている。ちなみに実際に鳩が豆鉄砲食った顔を見たことがある人は、ぜひ写真に撮って見せていただきたい。

酸素不足の魚のように口をパクパクさせていたおっさん達の一人がようやく声を出す。

「おめえさん……。モンスターじゃねえよな……。?」

「超がつく一般人です」

「俺達が5人でやっとこさ持ち上げられるモンを一人で上げる奴は一般人とは言わねえよ……。」

俺の筋力はマッチョなおっさん5人以上だということが分かった。

*

「アリガトなあ、ユウマア！またなんかあつたら手伝ってくれ！」

「依頼としてなら受けますよ！」

ガロン達　最初に声を掛けてくれたスキンヘッドのおっさんで、皆のリーダー。その後お互いに自己紹介をした。　に手を振り、俺は依頼を受注した際にもらった依頼達成用紙を持って再びギルドへ向かった。

その後、俺が重いものを重点的に運んだので、予定より早く依頼は終わり、サービスとして銅貨4枚も頂いた。

ガロン達も大喜びしていたし、俺のことを気に入ってくれたみたいなので、大いによかった。心も財布もぽっかぽか。やっほう。

また彼らの依頼があれば受けてみるのもいいだろう。気分がいいと、人は優しくなれるものだ。

太陽はまだまだ高い。もう一つくらいこなせそうだと思い、ギルドに帰ってきた俺は雑務系の掲示板とにらめっこする。

エリシアは銅貨2枚でちょうどいいと言っていたので、それを基準に依頼を探していくと、

「お、これいいじゃん。」

銅貨3枚の依頼を発見した。依頼内容は運河工事の手伝い、主に掘った石を外に捨てる仕事だ。つるはし持ってエンヤコロもしてみたかったのだが、楽なほうが良い。

人間は元来怠ける生き物なので、決して悪いことじゃない筈。俺はただご先祖様から代々受け継いできたDNAの情報に従っているだけだ。

依頼用紙を引っぺがし、カウンターへ持っていく。対応は最初のお姉さんがしてくれた。早く帰ってきた事にひどく驚いてらっしゃった。

依頼達成確認用紙を受け取り、俺は現場へと向かった。

去り際に、ギルドにいた冒険者たちの視線をビシビシと感じた。

オレナニカシマシタデシヨウカ？内心恐怖を感じつつ首を傾げた。

運河工事でも最初はバカにされたが、石の生産量を凌ぐ排出をしてやると、現場の一同は大変驚いてらっしゃった。

更に、掘削作業を妨害する巨大な岩をツルハシを使って破壊して差し上げると、バカにした連中は揃って顔色を青や白に変化させていた。ざまあ。

運河工事はまだ終わりそうに無いので、依頼は継続されるそうだが稼ぎ場ゲット。

依頼達成用紙にハンコを押ししてもらい、ついでにサンドイッチの弁当も頂いた。岩を壊してくれた分の報酬だそうだ。

もさもさと食いながらギルドへ戻る。ちなみによい子は食べながら歩き回っちゃいけませんよ。

*

「お疲れ様です。やっぱり戻ってくるの早いですね」

「力と体力くらいしか取柄が無いんです」

頭を掻きながら言うが、これ全て神様のくれた能力のおかげなのだ。

以前の俺なら最初の依頼でとくにノックアウトだ。果たしてあの中の一つでも運び出せたかどうか。

午後からも更に依頼を受ける。今度は木材伐採の依頼だ。

場所が一般家庭の家なので、場所を地図で調べる。

今更だが、この町は全体的に縦長の丸の形をしている。厳密に言うならジャガイモのような形だ。

町の北部4分の1ほどが上流階級の住まいや店が多く、南部は主に一般の町人の生活区域となっている。

ギルドはこの二つの大体境目にある。町民も貴族もすべからず依頼を申し込むことができるようになってきているそうだ。

地図を頼りに依頼を申し込んだ人の家に到着した。

木と石でできたこの辺でよく見かける家だった。周りのも実は量産型なんじゃ？

巨大な工場で生産される大量の家々。うーん、シユールだ。

インターホンは無いので扉を2、3度ノックする。

扉を開けたのは白髪白ひげを携えた老年の男だった。世の頭髪に悩むお父様方から逆恨みを買ってそんなほど、その髪はふさふさだった。

「君が依頼を受けてくれた冒険者か。おや？一人かな？」

「ええ、そうですが」

「一人で大丈夫かのう。切って欲しい木は結構大きい上、何本もあるんじゃが」

「大丈夫ですよ。もしもの時は仲間を呼びますし」

「ふむ、それでは案内しよう」

そういつて歩き出したおじいさんについていく。

案内されたのは、郊外の畑だった。まるで赤や黄色や紫色の水玉模様をあしらった緑の絨毯のような眺めだった。

恐らく、害獣から畑を護るためにあると思われる柵があったが、長い年月を経てボロボロになっていた。

「この古くなつた柵を作り変えるための木が欲しいんじや。この近くにある森から何本か樹を切ってきてくれ。できるだけ真っ直ぐした木をな」

おじいさんが指差す方向には林と言つたほうがいいんじゃないかと思うような小さな森があつた。

了解し、おじいさんからゲームで言うバトルアックスのような斧を受け取って一緒に森へ。でかくて持ち運びづらいんですが。

目の前に立つ木を見てみると、なるほどなかなかデカイ。高さはそれほどでもないが、太さは両腕で抱えるほどだ。

木を切つた経験など無いので、テレビでやっていた特集映像やドラマのシーンを思い出しながら斧を構える。

確か片側に切り目を入れて、後は自重で折れるようにするんだつたよな。そうすることで、倒れる方向も調整できるはずだ。

障害物の無い方向を選び、おじいさんに離れるように言う。

そして斧を振りかぶり、

「ふっ！」

野球のスイングのように斧を振るつた。

一瞬の抵抗の後、斧は振り切られた。

「は？」

おじいさんの呆けた声が聞こえる。幹を一撃で切られたもとい、削り取られた木は、ダルマ落としの様に切り株の上に落ち、バランスを崩して倒れた。

幸いに、当初の予定通りの方向へ倒れたからよしとしよう。いや、労働で流す汗は気持ちいいなあ。なぜか目から重点的に溢れ出るけど。

「うむ。お前さん、すごい力を持つとるのう！これなら早く終わりそうじゃ」

あ、気にする所そこですか。

おじいさんの言葉どおり、太陽が殆ど動かない程の時間で、7本の木を切り倒した。

それらを3本、3本、1本に分けて、3回畑と森を往復した。切り口から出る液が青臭かった。

畑の近くに木を下ろし、口を開く。

「しかし、これ木材として使うには時間がかかりますよ？」

本来木材は、伐採した樹をしばらく置いて、中の水分を抜かなければ役に立たないものだ。

子供の頃、秘密基地を作ろうとしてその辺から適当に切った樹を使って、ひどい目にあっただから知っている。

そりゃ生木でツリーハウスもどき作ろうとすれば壊れるだろうよと、親父にバカにされたのはいまだに根に持っている。

「問題ないわい。魔法があるじゃろうが」

そのセリフを聞いてばかんとまっている俺を尻目に、おじいさんは切った木の切り口に手を添える。

「『水よ、わしの思う場所へ、集まれ』」

言葉と同時に切り口から螺旋状の水流が出てきた。水流は重力に逆らってうねりながら空中へと伸びる。

俺とおじいさんの頭上にその水が集まり、大きな水泡を形成していた。なんで浮いてるんですか？

「なんじゃ、おまえさん。始めて魔法を見たかのような顔しよって」

実際初めてなんです。なにこれ？ Magic？ 手品とマジックは英語に直すと同義だそうか手品なんだなそうかそうか

「これこれ、わしより先に逝きそうな顔しとるぞ。もどってこんかい」

おじいさんにより、大きな川を渡る船の船長にお金を渡さずにすんだ。危ない危ない。銅貨1枚という安さにだまされるところだった。

おじいさんが手を添えていた木は、既に立派な木材と化していた。

同じように残りの6本の生木を木材へと変えていく。

頭上に浮かぶ直径3m程の大きさになった水の玉は、ふわふわと畑の上に移動し、

「『割れる』」

おじいさんの言葉と同時にパチュンと弾け、畑に雨となって降り注いだ。あ、虹が出た。

俺はその光景に見とれていた。元の世界には無かった技術が、魔法が、目の前で現実に存在しているのだ。

しいて言うなら、某赤服白髭おじいさんを信じなくなった子供が、窓を通り抜けて不法進入してくるそれを見たときの喜びと言ったところだろうか。いや、実際見たら悲鳴を上げるが。

とにかく興奮していた俺は知らず知らずのうちに叫んでいた。

「今のが魔法なんですか!？」

「あ、ああ。そうじゃ。ホントに初めて見たのか」

「どうやって使っんですか!？原理は!？条件は!？」

「待て待て落ち着け。教える、ゆっくりしっかり教えるからそんな緑鬼も裸足で逃げ出しそうな顔で迫るな!」

ちなみに緑鬼とは身長が1m弱ほどの大きさの亜人型モンスターだ。般若の様な顔が特徴。って俺今それ以上の顔をしてるのか。

だが子供の頃憧れていたものが目の前にあって果たして冷静でいられようか？いや、いられない。（反語）

おじいさんの体を揺すりまくった挙句、おじいさんの家で魔法を教えてもらうことになった。えらくぐったりしてたけど気にしない。

「はい、おじいさん。冒険者さんもありがとうね。」

「あ、どうも」

「ありがとう、ばあさん。ふむ。ではまず魔法とは何か、と云うところから教えようか」

リビングのテーブルに置かれた紅茶を一口飲み、目の前で子供のような目で話を聞く冒険者の青年を、嬉しく思いながら語り始める。

「魔法とはすなわち願いの具現化じゃ。言霊という言葉を知っておるかな？」

冒険者は顔を横に振る。

「わしらが放つ言葉には魂が宿ると云う考えの事じゃ。『プネウマ』とも呼ぶのう。要するに、言葉が現実の事象に成ると云うことじゃ」

青年 勇真 は知らなかったが、元の世界にも言霊思想

はある。

古来より、良い言葉を発すれば良いことが起こり、不吉な言葉を発すれば凶事が起こると考えられていた。

これらは「言」と「事」が同じものとして考えられていたからである。

そのため、祝詞を読む際は絶対に誤読が無いように注意された。

また、結婚に対する「切れる」「別れる」や、受験に対する「落ちる」「滑る」「転ぶ」等の忌み言葉も言霊思想に基づいたものだ。

「わしらが願いを言葉にすれば、そこに魂が宿り、世界へと聞き届けられる。そしてわしらはその願いに見合った対価として、魔力を支払うのじゃ」

聞き届けられた願いは等価の魔力によって世界に現象として具現化する。逆に、願いに対して献上する魔力が少なければ、望んだ現象は発生しないと言うことだ。

その魔力は世界という巨大な器に蓄えられる。余剰分もまた然り。

そして、その願いが明確であればあるほどその事情は起こりやすい。

「実際のところ、必ずしも言葉を発しなければ魔法は使えないと言うことは無い。明確なイメージさえあればの。それがあやふやな場合、魔法は現出しないのじゃ。言葉はイメージの固定化の補助の為

にあると聞いていいじゃろう。イメージは言葉にすると、驚くほど明確になるからの」

一般人が家事などで使うのならばまだしも、モンスターや人と戦うことを生業としている者達に、強力とはいえ長い呪文を唱えるのは酷というものだ。

だが、無詠唱での魔法の発動は長く修行を積まなければできないのも事実なのだ。

魔法の根底の部分を教えた後は、外で実際に魔法を使わせてみた。結果として、青年は魔法を使うことができなかった。

理由は簡単。魔力を支払えなかったのだ。

だがそれは、彼の中に蓄えられている魔力が少ないわけではない。むしろ逆で、とんでもない量の魔力が彼の体の中にはあった。

一般的な、魔法のスペシャリストである魔術師が持っている魔力のおよそ1000倍程だった。

その事を教えると青年はひどく落胆していた。

「まあ、ひよっとしたら何かの拍子で使えるかも知れん。あきらめずに練習してみることじゃ」

「はい、ありがとうございました。すいません、長居して」

「気にするな。わしも久しぶりに若者と話ができて楽しかったわい」

「では、また何か依頼があれば頼んでくださいね」

そう言って青年が帰る頃には、辺りは茜色に染まっていた。

満足そうな笑みを浮かべて椅子に腰掛ける老人に、彼の妻が話しかける。

「めずらしいですね。あなたが人に魔法を教えるなんて」

「教えなければ取って食うと言わんばかりの顔で迫られればなあ」

「それにしても随分楽しそうだったではないですか」

「ふふつ、確かに。あのような清らかな若者になら、魔法を悪用することも無いだろうしの」

彼のこれからが楽しみじゃと、つぶやきながら、かつて大魔術師と呼ばれていた老人は、長い時間が経っているにも関わらず湯気を上げている紅茶を飲み干し、目を細めた。

おじいさんの元で時間がたつのも忘れて魔法のことを学んでいたら、日は翳り始めていた。

魔法が使えなかったことは結構ショックだったが、まだ使える可能性もあるようなので、あきらめずに頑張ってみようと思う。これ今年の目標にしよう。

辺りの家々の窓からは明かりが灯り始め、良いにおいも香ってきた。下腹部から「グウ」と音が鳴る。体は正直です。

夕食を摂る為にギルドに戻る頃には、すっかりあたりは暗くなっていた。とりあえず依頼達成用紙をカウンターに置き、報酬を受取る。

ギルドの食堂では冒険者たちが食事、もとい宴会をしていた。笑い声や怒鳴り声が広いギルドの中に響く。

できるだけ隅っこのテーブルに座る。だってほとんどの方々が酔ってらっしゃるんだもん。酒臭いのに絡まれるのはゴメンだ。

テーブルに備え付けてあるメニューらしきものを手に取り、見てみる。

一つとして知った名前の料理が表記されていなかった。ってチョット待て。

こちらの世界に来て最初に食べた赤い実は見た目も味もリンゴだった。昼に食べたサンドイッチも普通のハムやレタス（らしき）モ

ノも元の世界それと同じ味がした。

17年共に過ごしてきた俺の舌はそう言っていた。

という事は。

「食べ物と名前が一致してないのかよ……。」

これはまずい。メニューには、アサクシシヤの揚げ物だとかシシユシのサラダミドリープ和えだとかコロクガシのアクシナなど、文字通り何それおいしいの的名前がマーケティングパレードを行っている。

恐らく全て、もとの世界の何らかの料理であろう。文字が読めても意味が無かった。なんとというギャンブル。

だが分からない以上、腹を括って注文するしかない。近くにいた給仕のお姉さんに声を掛ける。

「あの、このミドスのパテリエをください」

恐る恐るといった調子で俺が注文したそれは、メニューの中で無料である水より二つ高いものだった。

こんなハイリスクなギャンブルにいきなり高額なものは選ばない。否、選べない。怖いから。アイアムキチン。

「え？あ、はい分かりました」

注文を聞いた給仕のお姉さんは何故か目を丸くしてらっしゃった。

・・・あれ、これって死亡フラグ？

*

体感時間で10分後、注文された品が来た。

俺の意思を離れ、ギルドを飛び出そうとする足を、前の世界の何らかの料理だという希望^{命綱}で繋ぎ止める事、数回。戦々恐々としていた俺にとってそれは希望と絶望のハイブリッドデザイナーだ。できれば全力で拒否したいのだが。

できるだけ料理を見ないように目を逸らす。物によっては、今度は^{正当防衛}反射行動が行われる。

具体的に言うと、「この料理を作ったのは誰だあ！」と言いながら厨房に飛び込む。願わくば、俺にとってもあちらにとっても、良い意味で飛び込みたい。

「はい。ミドスのパテリエになります」

コトリと言う音と共に、その料理の全貌が視覚情報として脳に飛び込んできた。

それは前の世界でいえばゲテモノと称されるべきものだった。

皿に敷かれたレタすらしき葉の上には、こんがりと狐色になった鶏らしきものの姿焼きが乗っている。上手に焼けました。

そう、鳥なのだ。頭だけ。首から下は蛙のような形をしていた。何この奇天烈生物。進化論に真つ向からケンカを売ったような姿だ。何を血迷えばこの姿に利便性があつたと考えられたのだろうか

皿を抱えて厨房に飛び込みたいという思いを無理やり押さえつけ、とりあえずナイフとフォークを握る。

が、まず何処から食べればいいのか検討が付かない。頭をパスすると残るのは蛙の四肢。いや、無理。生理的に無理。

だが食わねばならない。覚悟を決めてナイフで解体を始める。感覚的には普通の豚肉のステーキのようだった。

そして、フォークに突き刺した肉片をままよとばかりにバクリ。

普通の鶏肉つぼかったです。味も普通。無駄に心拍数と血圧が増えるのが欠点だと、脳内メモに記録した。

カウンターにて会計を済ませた後、宿舎の場所を聞いた。その間、給仕のお姉さんはずっと偉大なチャレンジャーを見るような目で俺

を見ていた。

精神HPが一気にレッドゲージだ。早く回復せねば。そうだ、風呂に入ろう。

「すみません、お風呂は何処ですか？」

「オフロ？」

お姉さんがキョトンとした顔で問い返す。おいおい、待ってくれ。嫌な予感がビシバシとするぜ。

「・・・では、シャワーは？」

「シャワー？」

「・・・いえ、いいです・・・」

確定。この世界に風呂は存在しない。ガツデム。

由々しき事態だ。だが良く考えればそれもそのはず。

以前学校の歴史の授業で学んだが、中世ヨーロッパの時代は水不足と水道施設の不備から水洗トイレなどは無く、糞尿は外にポイしていたらしい。

技術レベルがその時とほぼ一緒のこちらの世界に、水洗トイレやシャワーなどがあるはずが無い。元の世界と違って、道がきれいなだけ僥倖だ。

ちなみにこちらのトイレは汲み取り式のポットン便所だった。たまった汚物は肥料として利用するそう。なんというリサイクル。

仕方なく風呂はあきらめて、濡らした布で体を拭くだけにしておく。どこかの町に間欠泉でもなかるうか？あれば頑張つて温泉を作るのに。そういう努力は惜しまない。

宿舎は、ランプとベッドしかない殺風景な部屋だった。ここまで何もないと逆に清々しく感じる。間違いなくエコの極地だ。

ベッドはただ木の台に布を引いただけのようなもので、枕は無かった。間違つてもダイブしてはいけない。横になってみると背中が痛かった。

こんなベッドで寝れるのかと考えている間に、いつの間にか俺は眠りに落ちていた。

後日、朝食の時間に前の世界の料理がメニューに載っているのを発見して俺は泣いた。

どつやらメニューを後ろから読んでいたらしい。お姉さんの「「い愁傷様」という台詞がひどく心に刺さった。

俺が注文した欄は、全てモンスターを使った料理だったそう。

とりあえず「はい」は何処でしょう？

第3話 何事もほどほどが一番（後書き）

話詰め込みすぎた・・・orz

文字数が一万弱ほどになるのはこれが最初で最期のはずです。・・・
多分（汗）

また、今回は三人称視点で一部書きましたが・・・。

アップアップ感全開ですね、これ・・・。もっと頑張ります・・・。

第4話 薬草採取も楽じゃない

皆さんおはようございます。異世界に渡って2回目の朝です。窓から差し込む朝焼けが眩しい。

っていつか早く起きすぎた。前の世界でも朝焼けが見れるほど早起したのは、夏休みの宿題を最後の一日で完成させた時ぐらいだ。寝てないから早起きとはいえないけど。

昨日は午前中にガロンたちの依頼と、運河工事の依頼をうけ、午後から代えの服を買ったり武器屋を見たりした。服は黒っぽい物を4着購入。銅貨4枚と半銅貨15枚、約4150円也。とってもお買い得。

武器は最も安いもので銅貨10枚。高いものでは銀貨5枚だった。まあ、貸し出し武器があるしまだいいかと何も買わずに店を出た。決して高く買って買うのを躊躇った訳では断じてない。

昨日も一昨日も結構動き回ったのに、疲れはほとんど無かった。これも能力のおかげだろうか。一応神様あのバカに感謝しておいた。

さて、二度寝にしゃれ込もうにも目はぱっちりだ。仕方が無いので、寝る前に壁に立てかけておいた剣を装備し宿舎を出た。

早朝の町には小鳥の鳴く声がかすかに聞こえ、すこし肌寒い。いつもは賑やかな大通りも静かで、開店準備をしている人がちらほらいるだけだった。

この分だとギルドが開いているか怪しいものだが、他にする事も

ないのでダメもとで行ってみる事にした。

予想に反してギルドの大扉は開いていた。早起きな受付嬢たちに感心する。

中には受付嬢が一人。ギルドカードを発行した時対応してくれたお姉さんがカウンターに突っ伏して寝ていただけだった。

起こさないように足音を殺して近づく。すうすうと眠るお姉さんの顔はなかなか美人さんだった。

俺が受ける依頼の性質上、会うのはガタイのいいおっさん連中ばかりなので、女成分（特に美女）は貴重なものだ。

お姉さんの寝顔を十分に堪能した後、依頼掲示板から一枚依頼用紙を持つてくる。

気持ちよさそうに眠っているところを起こすのはとても心苦しいが、仕方が無い。

何度かお姉さんを揺ると、ゆっくりと顔を上げた。

「……………トイレはあちらでふ」

朝から爽やかなボケをありがとう。まだ大分寝ぼけていらっしやるようだ。

だが徐々に頭が回転しだしたのか、だんだん目を見開いていく。

「……………へ？……………あ！あわわ！す、すみません！こ、これはです

ね！あの、何と言うか、こんな時間に誰も来ないだろうと思って寝入ったとかじゃなくてですね！」

「自分で白状しちゃってるんですが。それに気にしてませんよ。自分でも早すぎると思いますし」

「なんだか、最初は事務的な対応をしていた彼女が、素を出しているところと言うのはかなりイイ。ギャップ萌え恐るべし。」

とりあえず依頼を受ける旨を伝え、依頼達成用紙を受けとる

その際に、ふと質問してみた。

「ところで、お姉さん名前何て言うんですか？」

「へ？え、えと、ミア＝マハティナです。あの、何故名前を？」

「ん？どうして？」

「いえ、私たちの事を気にかける冒険者なんて、酔っ払いくらいしかいないし、ましてや名前なんて…」

なんと嘆かわしい。美人さんの名前をきく男がいないとは。ましてや酔った時だけ絡むとは万死に値する。こちらの野郎共の目は曇りガラス製に違いない。

あれ？俺こんなに女性に気軽に話しかけてたっけ？こちらに来てからキャラ変わりつつあるような。

まさか、ダ　テの性格までトレースしたって事はないよな…？

「なんとなくです」

自分の変化もろとも笑って誤魔化しておく。

「ところで薬草採取に行くんですが、植物図鑑とがあります？それと、モンスターの図鑑も」

「あ、はい。すぐにお持ちします」

今回街の外に赴く依頼を受けたのは、早起きしてしまった事もあるが、もう一つ大きな理由があった。

それはモンスターとの戦闘。エリシアの言う通り、ここは化け物モンスターが闊歩する世界だ。

こちらの世界で生きる以上、モンスターとの戦闘は避けられないだろう。イザというときに体が動かなくては困る。

ただし、俺の能力の特性上、誰かに見られるとまずい。

もしゲームの能力そのまんまだったら、瞬間移動や二段ジャンプ、壁のぼり、果ては悪魔の腕と極悪卑劣な反則のオンパレードだ。

故に人目の少ない早朝の時間帯に行ってしまうおと考えた。そして、モンスター討伐は二の次のつもりであるから、薬草採取の依頼を受けたのだった。

持ってきてもらった図鑑は図説付きで、大変分かりやすかった。

ミリアが採取の対象である薬草のページを引き、指差しながら説明する。

「この薬草がパントと言って、日当たりの良いところで見られます。こちらがハシムで、湿った日陰に生えています。ハシムは森の少し奥で見つかると思います」

図解のパントはタンポポの葉のような形をした草だった。ハシムは少し紫がかった二枚葉の草で、独特の匂いがするらしい。

植生場所から、ドクダミみたいなものだろうと推測した。

タンポポにドクダミ。依頼主はお茶でも作る気だろうか。

何はともあれ、依頼達成の為に俺は町の門へと足を向けた。

*

町の外に広がった広い世界に俺は感動した。広がる草原に頂^{いた}に雪を残した巨大な山。

本当に、ゲームやマンガの世界だ。現実世界だったら、アイルランド辺りでしかこんな風景は見られないだろう。思う存分に壮大な風景を満喫した。

そして今俺は森の中に佇んでいる。

生い茂る木々の間から光が差し込み、辺りには深い草木の匂いが立ちこめている。きっとマイナスイオンも出まくりだろう。森林浴

にはづつてつけの森だ。

だが、今の俺にマイナスイオンなどという実際効果が有るか無いか怪しい癒やしパワーなど吹き飛ばす程焦っていた。ぶっちゃけて言おう。

ものの見事に遭難しました

パントの葉は森の入り口で容易く見つかったが、ハシムを見つけるのがなかなか大変だった。

湿った日陰に生えているという情報を基にそれっぽい所を探したのだが、似た草が多くて、一つ一つ匂いをかいで確かめて見なければならなかった。

ちなみに匂いはドクダミそのものだった。

5本集めた時、俺は既に周りをぐるりと木々に囲まれていた。ナシテコツタイ。

現在森に立ち尽くしている俺の所持品は、切れ味の悪い大剣と、10本の草のみ。どうしろと。

「ゲルル…」

おや、随分変わった鳥の声が聞こえる。まあ異世界だし、おかしな鳥もいるんだろう。今日の晩御飯は何を食べようかな。

・・・いや、現実逃避は止めよう。

どうやら、不運と言うものは、連なって起こるのが世の理ことわりのようだ。

茂みが揺れる音と、突き刺さる無数の目線。

頬に冷たい汗が流れる。目線の主はすぐに姿を表した。

黒に銀の斑模様の毛並み。力強い四肢。鋭い牙に、およそ「お友達になりましょう」とは取れない鋭い目。

出発前に読んだ、ギルドのモンスター図鑑に載っていた、この辺りで最も厄介なモンスター。

銀黒狼《ウォーウルフ》に俺は取り囲まれていた。

出発前に聞いたミアさんの台詞が蘇る。

「このモンスターは一体一体でも危険なのですが、最も厄介なのは彼らの統率力です。群れのリーダーが群れを統制しており、連携して獲物を弱らせ仕留めます」

「出会ってしまった場合、可能ならば逃げてください。無理ならば、群れのリーダーを見切って仕留めて下さい」

「それも無理なら死あるのみです」

ならばとる行動は一つのみ。

ゆづまはにげだした！

しかしまわりをかこまれてしまった！

「ですよー」

結局、こういう状況では『たたかう』以外の選択肢はないようだ。

神様から与えられた能力を考えれば、俺が負けることはまず無い。

しかし、勝てるという確証も無い。

現実とゲームは違う。動かすのは指ではなく体全部だ。

目の前のでっかいお犬様の団体からは強烈な敵意、もとい殺意をビシビシと感じる。

『ドクン』

現代社会においてこれ程の殺意を浴びたことの無い俺は、既に膝が崩れそうになっていた。

『ドクン』

頭から血がなくなっていくのを感じる。痛い。吐きそうだ。

『ドクン』

寒い。なのに汗が止まらない。『ドクン』背中に背負った大剣を引き抜くが『ドクン』、手が震えて今にも離してしまいそうだ。

『ドクン』

視界が『ドクン』狭い。暗い。『ドクン』

嗚呼、『ドクン』さっきから『ドクン』煩い『ドクン』。

なんだ『ドクン』これは『ドクン』。

そうか、『ドクン』わかった。こ『ドクン』れは俺『ドクン』の

心臓のお『ドクン』とか。

息『ドクン』が上手『ドクン』く出来『ドクン』ない。『ドクン』

獣の『ドクン』う『ドクン』なり声『ドクン』が耳『ドクン』に
届『ドクン』く。『ドクン』

ナイフ『ドクン』の様『ドクン』牙『ドクン』眼前に『ドクン』
迫『ドクン』。

『ドクン』死『ドクン』『ドクン』『ドクン』『ドクン』『ドクン』
『ドクン』『ドクン』

死『ドクン』『ドクン』嫌『ドクン』『ドクン』『ドクン』『ドクン』
『ドクン』『ドクン』

『ドクン』『ドクン』『ドクン』『ドクン』『ドクン』『ドクン』
『ドクン』『ドクン』『ドクン』『ドクン』『ドクン』

死にたくない。

全てが、元に戻った。

世界がゆっくりと動く。

迫る狼たちの牙の本数も、口から溢れる涎の飛沫も認識出来るほどだ。

体が反射的に動いた。前に一步足を踏み出し、前方から突っ込んでくる一匹との距離を詰める。

下段に構えていた剣を跳躍しながら振り上げる。

狼の体は切れ味の悪い大剣の刃を通させることなく、俺と共に空中へ。

振り抜いた剣を返す刀で狼の上に振り下ろす。

重力と剣と俺の体重が乗った一撃は、俺の手にまるで自動車のタイヤを叩き潰したような感覚を残した。

狼は剣と大地のサンドイッチの具と成っていた。周りの狼も着地の衝撃波で吹き飛ばされる。

先程まで体を蝕んでいた震えも頭痛も吐き気も、まるで拭い去ったようになくなってしまった。

代わりに体を支配しているのは、とうに忘れかけて意識の奥底に眠っていた生存本能のみ。

大丈夫だ。俺は、戦える。負ける気は、しない。

再び宙へ跳ぶ。一瞬前まで俺がいた場所に狼の顎あごが通過した。

手の中にあつた大剣は既に鞘の中だ。

代わりに手の中にあつたのは、直線的なデザインの黒と白、2丁の銃。それらはまるでずっと昔から使っていたように手に馴染んだ。

空中で体を捻りながら銃口を狼の群れに向け、引き鉄を一瞬で計15回引く。

放たれた15の弾丸は3匹の狼の体を喰らい穿った。

着地と同時に、狼たちが四方八方から覆いかぶさるように襲い掛かってくる。そのうちの1匹に右腕を伸ばす。

伸ばした腕からは、青白く輝く悪魔の右手が現出し、その1匹の喉を握りつぶした。

さらにそれを振り回し、飛び掛ってきた狼たちを木に、地面に叩きつける。骨が折れる嫌な音が複数響いた。

狼たちは俺に敵わないと悟ったのか、茂みの奥へと逃げ出した。後を追おうとする足に脳が止まれと命令する。

俺の目的は銀黒狼ウオーウルフの殲滅ではなく、薬草採取だ。深追いする必要はない。

狼達の姿が完全に見えなくなると、膝が崩れ、俺は地面に座り込んだ。握っていた銃は霧散して光の粒になり、溶けるように消えた。

誰に言うでもなく、ボソリとつぶやいた。

「なんつーか・・・、怖かった」

純粹な恐怖。経験したことのない絶命への恐怖。本当にただそれだけが頭の中を埋めていた。

生き物を殺した罪悪感などは無かった。考える暇も無かった。そして、以後罪悪感を感じることも無いだろう。直感的にそう思う自分が少し嫌になった。

克服しなければならぬが、慣れてはいけない。

辺りには銀黒狼の呻き声が聞こえる。骨は砕けたが、まだ死んで

いないものが何匹かいるようだ。

まだ震える足を立たせ、そいつらの喉に剣を突き刺し、楽にしてやる。

銀黒狼の死体は、恐らく他の生き物の糧になると思いそのままにしておいた。

最後の一匹を殺し黙祷しようとして、止めた。生き延びる為という自分勝手な理由で殺した相手に、許しを請うのは傲慢と言っものだ。

これもまた自然の摂理だ。弱肉強食。真にもっともな真理だ。

大剣に付いた血をその辺りの草でふき取った後、俺は森の出口を指して歩き出した。

戦闘中に、集めた薬草を全部落としてきたことに気づいたのは、何とか森を抜け、町の門が見え始めた頃だった。

*

「はい、依頼達成です。お疲れ様でした。・・・大丈夫ですか？」

「いえ、軽く遭難していただけです・・・」

声に元気が無いのが自分でもわかる。初めて命を奪った体験により鬱になっていたのに、集めた薬草を全部無くしてもう一回集めなおした所為で、俺の心と体はボロボロだ。回復薬ふりーず。

時間は思った以上に経っていて、日はちょうど真上に来ており、ギルド内は昼食を摂る冒険者達であふれている。

開いたテーブルを一つ確保し、お茶を注文した。ひとまず休憩だ。

適当に周りの冒険者達の話に耳を傾ける。これは俺が元の世界にいた頃身につけた情報収集術だ。

あちらにいた頃あまりドラマなどを見ようとしなかった俺は、それでも周りと話を合わせるため、こつこつと情報を集めていた。

雑音の中から一つの会話を聞き取る。

「いやー、ラッキーだったなあ！」

「まったく、嬉しい誤算だったぜ。あの銀黒狼ウォーウルフがほぼ壊滅状態だったんだからな」

「おまけに死体もそのままだったからボロ儲けだったしなあ！」

「でも、あたしは死体の傷跡が気になったわ。あんな風に体を貫く傷をつける武器なんて見たこと無いわ。いったい誰がやったのかし

第4話 薬草採取も楽じゃない（後書き）

心情描写や戦闘描写はホントに難しいです。

第5話 田舎には何故足がたくさんある虫が多いのか(前書き)

一週間程前。

蒼色ツバメ(以下蒼)さて、今日も続きを書くか。」

ポチツ。ウィーン。

ピーピー。

蒼「あれ?なにこの白文字だらけの画面?」

Error 6042 Error 6589 Error 49
81 Error...

蒼「え、ちょ、おま」

ヴォン

(ブルースクリーンオブデス光臨)

蒼「.....」

.....というわけで、

パソコン＼(^o^)/オワタ

Orz

突然の戦友の死亡報告です。原因は不明。

なんとか携帯から続きを書き上げました。

遅れてすみません。

また、このせいで更新速度が足を折った亀より遅くなりそうです。

出来るだけ頑張りますのでよろしくお願いしますm(_____)m

第5話 田舎には何故足がたくさんある虫が多いのか

鳥や虫、その他なんらかの生き物の鳴き声のBGMを聞きながら、使っていた鍬を立て、額に浮かんだ汗をぬぐう。

春のような気温でも、1時間程日の光を浴びながら動いていれば汗も掻こうというものだ。

「よし、ちよつと休憩にしようかあ」

「はい」

白いTシャツのような服を着た、麦わら帽子をかぶったおじさんが俺に声を掛ける。俺と同じように畑を耕していたおじさんたちも、木陰に引っ込み動物の皮でできた水筒の中の水を煽る。

その後、ナイフを購入した俺はその足でギルドへと赴き、畑仕事の依頼を受けてここに居るのだ。

なんでも仲間の何人かが病気で倒れて人手が足りないので、ダメもとで依頼を出したらしい。

故に来た時はえらく驚き、喜ばれた。

「ほら、ユウマ、水飲みな」

お礼を言い、差し出された水を飲む。うむ、美味い。

元いんの世界のカルキの入った水道水などと違い、水筒の水はとても

冷たくておいしかった。

ちなみに、このように水をにこやかにくれたり、色々と話しかけてきてくれるように、おじさんたちがひどく友好的なのは、もともとの性格もあるだろうが、ガロン達の影響が大きいと思われる。

来て俺の顔を見るなり、名前を呼ばれたので驚いて尋ねると、ガロン達から話を聞いていたらしい。もちろん良い意味で。

ギルドでは来るものは拒まずといったきらいがあるので、元犯罪者、元山賊など、荒れくれ者が多い。

それ以外の人も、冒険やロマンを求めて冒険者になったような奴らばかりで、あまり町人は気にかげられることがない。街中ですれ違っても挨拶すらされないらしい。

精々武器屋や雑貨屋、宿屋の人々くらいしか、冒険者とまともな交流がないそうだ。

なので、俺のような冒険者は非常に好青年と受け止められているらしい。

元の世界では当たり前のことだったのであまりピンと来ないが、嫌われるより遥かにマシである。

さて、そろそろ作業に戻るかと、重くなった腰を上げる。

鋤を使って畑を耕した後は、収穫済みの野菜を倉庫へと運ぶ。お

じさん達の奥様方と一緒にだ。恰幅の良いおばちゃんや綺麗な女性はみんなおじさん達の妻だそうで。

そして、あそここの店は食べ物が安いとか、どこそこの飯屋のなにがしはとてもウマイなどと言った、主に食物に関する有益な情報を聞きながら、8箱目の野菜の入った木箱を倉庫の中へ入れ、ふつと一休みしたときだった。

なにやら違和感を感じた。

妙な感じだ。モヤモヤする。何か足りない。まるで、パズルの端っこの1ピースがなくなっている様な……。

そつだ。今までBGMになっていた鳴き声が聞こえないんだ。辺り一帯から居なくなつたように。

待てよ。アニメや映画でも似たようなシーンを見たことがある。こつという状況では確か……。

直後に思い出す必要がなくなつた。

地面が揺れだす。地震？

少なくともよくあるような事ではないことが、おじさんたちの表情から読み取れる。

そして揺れが一際大きくなつたとき、

ちなみに若奥様、美人で作業中も俺に親切だったよい人だ。

若奥様は間一髪で避けたものの、砂蟲サンドワームが地面にぶつかった衝撃で吹き飛ばされる。

おじさん達の一人が血相を変えて叫ぶ。

さて、どうする？考えるまでもない。とにかく助けることにしよう。まずは彼女の安全を確保して……。

しかし、頭が考えをまとめるより体、主に口が動くほうが速かった。

「おい。蟲野朗！お前の相手は俺だ！」

ああ、俺のバカ。作戦を立てるヒマもなくなった。おまけに選択肢も『撃退』の一手に絞られた。最善策『逃走』は文字通りどこかへ逃げてしまった。

ヤケクソ気味に背中のツヴァイハンダーを抜き、砂蟲サンドワームに急接近。その刃を奴の体へとぶつける。

だが、剣は鉄と鉄がぶつかった音をたてて弾かれた。

「堅っ！なんちゅう甲殻してんだ!？」

砂蟲サンドワームにダメージが通った様子はなく、いまだに若奥様にロツクオ
ンだ。

注意をこちらに向ける為に、刃が弾かれるのにも構わず何度も奴の体を打ち付ける。

さすがに気づいたのか、サンドワーム砂蟲の大きな鋏がこちらを向く。でっかいなあ

「シャアアアアアアアア！！！！」

「うおおっ！！」

その巨体に見合わない、反則だろと言いたくなる様なスピードで突っ込んできた鋏をジャンプしてかわす。サンドワーム砂蟲は土煙を上げながら地面に衝突した。

ゲームだったら、これで鋏が地面に刺さって抜けなくなり、攻撃チャンスキター！となるのだろうが、現実は甘くなかった。

あっさりと地面に刺さった鋏を引っこ抜き、再び俺のほうへ標準を定める。

って待て待て待て！空中にいる状態じゃ回避できん！

すぐさまギロチンの様な鋏が迫る。ウォーウルフ銀黒狼と戦ったときのようになんてがスローになるが、某赤い彗星様！避けられなければどうしようもありません！

俺が上半身と下半身の涙の決別シーンを想像した刹那、

俺は砂蟲サンドワームの背後にいた。

なんで？と頭にクエスチョンマークが浮かんだ直後に、強烈な吐き気が来た。昼飯が出せ出せと食堂付近でデモ活動中。機動隊、何をしているんだ。

だが、頭は正常に働き、何故自分が奴の真後ろにいるか理解できた。

おそらく、デルメイクイの主人公、ダテスタイルの能力の一つ。『エアトリック』が発動したのだ。

どうやって発動したかは知らないが、とにかく助かった。

これは敵の頭上、或いは前方に移動する技だ。しかし、敵の背後に移動したと言うことは、ある程度自分の思った場所に移動できるのだろうか？

だとしたら便利で多用したい技だが、この吐き気はひどい。恐らくまだ、使い慣れておらず体がついていけないのだろうと推測する。

これから練習して慣れなきゃなあ、と考えつつ吐き気を飲み込み剣を構える。砂蟲サンドワームは突然消えた俺を探してきよるきよるしている。

攻撃チャンスだが、無視して先ほど吹き飛ばされた若奥様の下へ駆ける。

彼女は衝撃で吹き飛んだ土をかぶって汚れていたが、大きな怪我はない様子だった。

「早く逃げて！」

とりあえずあいつを倒すとなると、彼女を護りながら戦うのは無理だ。

「あ、足を挫いて・・・立てない・・・！」

なんてこった。思わず頭を抱えそうになったが、遙か後方へ逃げたおじさん達の一人がこちらに駆け寄ってきたのが見え、彼女を任せる事にした。

若奥様に駆け寄り、涙を流しながら抱き締める彼女の夫。見せ付けていないで早く逃げてくれって。ほんの僅かな嫉妬も含ませて二人に怒鳴るように言う。

「早く彼女と一緒に逃げろ！」

「後ろ！危ない！」

若奥様が叫ぶ。弾ける様に振り向くと、サンドフォーム砂蟲はその鎌首をもたげ、マジで俺に襲い掛かる5秒前だった。

「アンナア！！！」

砂蟲に襲われた妻を見て、絶叫しながら飛び出そうとした農夫の青年を、他の仲間が押さえ込む。

サンドフォーム
砂蟲はあまり姿を見せないが、その凶暴性から誰もに知られているモンスターだった。

ギルドで付けられたランクはB。ただの農夫である彼らが敵うはずがない。

「離せっ！アンナが、アンナが！！」

「落ち着けっ！おまえが出て行って何になるんだ！」

暴れる農夫を周りが必死に押し留めるも、彼らはわかっていた。

もう彼女は助からないと。

初撃は何とか回避した様だが、サンドフォーム砂蟲の攻撃範囲から逃げ遅れた時点で、半ば死は確定したようなものだ。できることは何も無い。

だが、本当は全員が彼女を助け出したかった。

彼女は美人で面倒見がよく、仲間たちの人気者だった。

彼女と結ばれた彼もまた好青年で、結婚した時は仲間からからかわれたりしたものの、心から祝福された。

そんな人間がなぜ今死にゆくこうとしているのか。そんな人間がなぜ絶望しなければいけないのか。彼らは薄情な神様を呪った。

その時。

「おい蟲野郎！お前の相手は俺だ！」

彼らの依頼を受けた冒険者の青年、ユウマが叫び、サンドワーム砂蟲に大剣を打ち据えた。

硬い甲殻により剣は弾かれているが、それでも何度も剣を振るう。

最低ランクのGランクである彼が、Bランクのモンスターに攻撃を加える。それは自殺行為以外の何者でもなかった。

それでも彼は注意を自分に向け、彼女を助けようとしている。

自分の命を危険に晒してまで、赤の他人を助けようとする彼に、皆が心を打たれた。

そして、仲間の拘束が緩んだ隙に、全速力で妻の元へと向かう農夫の青年。

仲間達が戻れと叫ぶが、青年の耳には届かない。これが彼女を助ける最初で最後のチャンスだと思って全力で走る。

ユウマも、サンドワーム砂蟲の攻撃を振り切り、彼女の元へと駆け寄っていた。

「よかつたっ……！よかつた……っ！」

彼は彼女に涙を流しながら抱きつき、小さく何度もそうつつぶやく。

「早く彼女と一緒に逃げる！」

青年の怒鳴り声で、ハッと我に返った。

そうだ、まだ砂蟲サンドワームの攻撃範囲内に自分たちはいるのだ。早く逃げなければ。

だが、彼の目に今にも襲い掛からんとする巨大な隕が映った。

逃げられない。

青年の妻がユウマに警告を発するが、既に砂蟲サンドワームは動き出していた。

迫りくる巨大な隕が、死神が振るう大鎌に見えた。

ああ、自分はここで死ぬのだ。妻と、彼と一緒に。

死を覚悟した青年は、妻をさらに強く抱き締め、目をつぶった。

だが、いつまで経っても、衝撃は襲ってこなかった。

実は死んだことに気づかなかつたのかと、硬く閉じていた瞼をゆっくり持ち上げる。

そこには、

「ぬうあああああ！！！！」

サンドフォーム
砂蟲の攻撃を腕で真正面から受け止め、踏ん張っているユウマがいた。

青年とその妻は自らの目を疑った。

ユウマの手の平には鉄が食い込み、血が流れ出している。

それでも、彼はBランクのモンスターの一撃を受け止めていた。

だが、じりじりとユウマが押され始めた。踏ん張っている足が地面を抉りながら、ゆっくり後退していく。

食いしぼる歯はギリギリと鳴り、額には無数の汗の玉が浮かんでいた。

今のうちに逃げなければと思うのだが、体は言うことを聞かずにただただ震えるだけだった。

「グウウ！」

苦しそうに呻くユウマ。この状態も、あと少しで崩れるだろうと、青年は思った。

だが、そうはならなかった。

「うおおおおおおおー！」

「踏ん張れええー！」

逃げていた仲間がユウマと同じように、砂蟲サンドワームを押していた。

一致団結した力が均衡状態を生み出す。

しづワームといユウマ達に対して歯がゆそくに顎をガチガチと鳴らす砂蟲サンド。

農夫の青年と妻は、ほかの仲間引つ張られ、砂蟲サンドワームの攻撃範囲内から出ていた。

二人は助かったことを認識すると、涙を流しながら再び抱き合っ
た。

彼らを助けた仲間たちはユウマ達の加勢へ向かう。

「みんな！俺の合図と同時にこいつを横に押ししてくれ！！」

「「「「「おっっ！！」「」「」「」

ユウマの叫びに農夫たちは頷く。

そして、砂蟲サンドワームがさらに力を加えた瞬間。

「今だあああああ！！！！」

全員が一斉に力のベクトルを横へ向ける。砂蟲サンドワームは、受け流された自身の力により、土煙を上げ、体を横転させながらその体を地上へとさらけ出した。

巨大な体躯にうごめく無数の甲殻類のような足が不気味だった。

第5話 田舎には何故足がたくさんある虫が多いのか（後書き）

遅ればせながら、p.v.9000代、ユニーク2000代突破有難う
ございます。

感無量であると同時に、下手なものは書けないというプレッシャー
も感じております。

どうかこれからも私の文章にお付き合いお願いします。

第6話 捏造された真実Ⅱ 事実。これ絶対の公式（前書き）

PV14000 越え、ユニーク3000 越えありがとう御座います。

m | | m

本当はこの話で主人公が使える能力の説明的な話を書きたかったのですが、現在携帯による執筆を余儀なくされている為、これ以上書こうとすると更新が大分遅れてしまいそうだったので、この段階で投稿する事に致しました。

これからは、二週間に一度くらいの更新ペースになりそうです（
- : -
- : -
- : -

それでも、この小説に付き合って頂けると有り難いです。

また、作者がハッスルするような褒め言葉も、槍のように鋭く痛い意見も沢山募集中です。

第6話 捏造された真実Ⅱ 事実。これ絶対の公式

あたりに響くおじさん達の歓声の中、俺は乗っかっていた、絶えず内臓感を足の裏全体に感じさせる砂蟲サンドワームの腹から飛び降りた。

俺の服や剣は奴の体液でべとべとになってしまっていた。うつつ、気持ち悪い。

だが、助けようとした若奥様とその旦那、他のおじさん達に死者が出なくてよかった。

それに比べたら、俺の服も、手の平の傷も安い代償だと感じる。ちなみにその傷は痛みはまだ多少残るもの、既にはぼ治っていた。さすが悪魔の力、恐るべし。

そんな感慨にふけっていると、おじさん達が自分の服が汚れるのにもかまわず俺に抱きついてきた。

さて、現在俺は砂蟲サンドワームの白い体液が体についている。さらに、おじさん達もそれを多少なりとも浴びており、白く汚れている。あなたがそんな現場を見たらどう思いますでしょうか？

何が言いたいのかというと、この状況はビジュアル的に非常に危険だということだ。他人がみたら全力で関わりを避けること受けあいの光景。

もしも俺がそんな光景を見たら全力疾走で家に飛び込み、「さっ

き見たのは夢だ幻想だ幻だ」と自分に言い聞かせることだろう。

まあ、中には「やらないか」といいながら輪の中に入ってくるイ男がいるかもしれないが。ちなみに今そんな男が来やがったら問答無用で殴り倒す。

「ユウマのおかげだ！ユウマのおかげで奴を倒せたんだ！！」

「よかった・・・っ！よくやってくれた！」

「ありがとう！本当にありがとう！」

四方八方から飛んでくるお礼の言葉に戸惑う。

「いや、俺はただあいつを止めただけで・・・」

先ほどまで彼らに叫んだせいで、砕けた話し方になっていたが、彼らは気にしていないようだった。

だが、実際ただそれだけだ。止めを刺したのは確かに俺。結果として自分は白い噴水を真っ向から浴びる羽目になったのだが。

「いや、君があいつの攻撃を避けずに、受け止めてくれたから僕らは今こうして生きているんだ」

「ええ。あなたは私たちの命の恩人よ。本当にありがとう」

俺が助けた旦那と若奥様が、目に涙を浮かべながら微笑み、俺に頭を下げる。

いえ、そんなと日本人らしい恐縮をする俺にさらなる追い討ち。

「すまない。畑仕事が本来の依頼だったから、たいしたお礼はできないんだけど……」

そういつて旦那が取り出したのは銀に輝く2枚の円盤。ちよつとクラツとした。

何事もお金での解決は良くないと思います。いや、この場合はいいんだけど。

「いやいやいや、いいつて!」

「だが、私たちは君にお礼がしたいんだ」

「そつだそつだ、受け取つてくれ」

「いやいや、大丈夫だつて。お金には困つてないし」

その後10分ほど、周りのおじさん達も一緒になつて「いい!」「受け取つてくれ!」の応酬が続いた。

結局俺の妥協案で納得してもらつことにした。

「……それじゃあ、受け取らない代わりに二つ、お願いしていい?」

ひとつは、サンダーワーム砂蟲の換金対象部位を俺が受け取ること。こちらは、
純粹にお金のためだ。

もうひとつが、こいつは全員で討伐したことにする事。これは、ここにいる全員がほぼ俺の活躍で倒したという風に脳内で変換されているからだ。

実際は集団でのフルボッコなのだ。歴史とは都合のいいように伝えられるモノだとおっしゃった歴史の先生、あんた正解です。

このまま、彼らが誰かに話して伝言リレーを続けていけば、事實は尾とひれ胸びれ背びれまで付いて、とりあえず三千里ほど一人歩きするだろう。

ここまでやっておいて今更だが、厄介ごとに巻き込まれるのは面倒なのだ。

俺の提案に全員が一応納得してくれた。

早速、サンドフォーム砂蟲の換金対象部位である、鋏と甲殻を剥ぎ取りにかかる。

おじさん達とも協力してもらい、鋏を逆側に折るように引っ張る。

まるでカニの爪を割ったような音がして、鋏が顎から離れる。一緒にくつついてきた筋繊維的な筋を解体用のナイフで切り取って、ようやく鋏を取った。

それ単体で見ると、もはや鋏というより死神なんかが持つ大鎌の刃のようだった。

さらに甲殻も、海老の殻を向くように剥ぐ。ミチミチミチミチと、生理的に受け付けがたい音と共に剥げる。

甲殻の下は、・・・語らないでおこう。世の中には知らないほうが幸せなこともあるのだ。

大地に横たえる巨大な蟲の死骸をみんなで掘った穴に埋め、全員で体に飛び散った体液を洗い流し、帰り支度をするころには、日はとっぷりと暮れていた。

「本当にありがとう！また何かあったらよろしくね！」

「今度酒おごるから、一緒に飲もうな！」

「いつでも遊びにおいでよお！」

おじさん達の感謝の言葉を背に、砂蟲サンドワームの鋏と甲殻を抱えた俺は、ギルドへと戻っていった。

*

「こ、これ砂蟲の大鋏と甲殻じゃないですか!!！」

ミリアさんの絶叫に騒がしかったギルド内が一瞬静かになり、俺は目線という名のレーザーに四方八方から貫かれることになった。

ギルド内にいた結構な数の冒険者が駆け寄り、俺越しにカウンターにおいた鋏と甲殻を覗き込み、驚きの声を上げる。

「すげえ！本物かよ！俺、始めてみたぜ！」

「え？ほんと？二セモノじゃないの？」

「あのバケモンを、お前さんみたいなのが倒したってのかい？」

おつと興味の矛先が素材から俺へとチェンジ。しなくていいのに。

「でも、サンドフォーム砂蟲はBランクのモンスターだろ？この辺で奴を倒せそうなのって、『こんじきのほむら金色の焰』くらいじゃないか？」

「奴は滅多に姿見せないんだぜ？依頼掲示板には討伐依頼はなかったぞ」

「て事は自主討伐？あんたランクなんだい？」

俺が口を開く前に呆然としていたミアさんが俺に叫ぶ。

「一体どうやってサンドフォーム砂蟲を！？ユウマさん、まだGランクなのに！」

空気が死んだ。

バーイ、死んだも同然の平穩。ウエルカム、厄介ごとの時。

直後俺は人カミキサーによって、滅茶苦茶もみくちゃのしっちゃかめっちゃかにされた。

某ゾンビ映画のワンシーンを彷彿とさせる状況を打開する為に、俺が詳しい説明をすることができたのは、つまり床に伏した俺をぐしゃぐしゃと踏んづけ、おかしな感触に眉をひそめた幾人かの冒険者が気づいた後のことだった。

とりあえず、突如現れた砂蟲サンドワームがなぜか転んで仰向けになり、「そこはらめえっ！」的感じを醸し出していた奴の腹を全員で攻めまくって討伐したとお伝えした。後半表現がオカシイのは気のせいだ。

結果、若干の残念感と俺の幸運に対する呆れや嫉妬を引きずりながら、そろそろと各々の席に帰っていった。なぜ負けた気がするんだろうか。

だが、事実がどうあれ持ってきた鍔と甲殻は本物のBランクのモンスターのものである。故にお値段も結構なものだった。

銀貨3枚。おじさん達のお礼を受け取らなくて本当に良かったです。

その後、振って沸いた臨時収入により普段より贅沢をして心とお腹を満足させた俺は、最期に体を満足させる為にベッドへと沈み込んだのだった。

第6話 捏造された真実＝事実。これ絶対の公式（後書き）

なにやら下ネタ的表現が多いことに猛省しております。

どうしてこうなったorz

第7話 予習と復習は結構重要(上)

さて、昨晚の疲れを比較的短時間の睡眠で癒し、朝食を申し訳程度に胃に収めた後、俺は昨日銀黒狼ワウルフと命のやり取りをした森へ向かっていた。

時間帯は前回と同じく早朝。装備も一緒。いや、砂蟲サンドワームの体液で駄目になった服だけは変えた。

剣はともかく、服に染み込んだ匂いは消すことはできなかった。それまで着ていた服は泣く泣く廃棄し、現在はあらかじめ買っていたこれと言った派手さは無い藍色のTシャツと、ポケットが腰と尻に二つずつついた黒色のゆったりとしたズボンを履いている。動きやすく着心地もなかなか。お気に入りの一品である。

服を除くと、前回と違うのは目的だけだ。メインはモンスターの討伐。

そう、今回の目的は俺の能力の分析だ。

前日の砂蟲サンドワームとの戦いは、下手をすれば上半身と下半身が死に別れるところだった。

また、ある程度能力が使えていれば、あそこまで苦戦することもなく、手のひらに刃が食い込むような痛い思いをせずにすんだはずだ。まったく、吐きそうなのと痛いので脂汗だらだらだったぜ。

この能力は自分の為に振るうつもりは毛頭もない。が、自分の身や、護るべきモノを護れないようでは困る。

そのためには今どんな事ができるのか、何ができないのかをしっかりと確認する必要がある。

そんなこんなで森に到着。相変わらず生き生きとした草木がお出迎えしてくれた。

来る前に受けた依頼は鎌鼬シッケルグアイゼルの殲滅だが、今は無理して探す必要はない。なのでゆっくりと能力の検証を始めた。

まずは銃だ。現代において資格のない者には持っているだけで御用となる、ある意味もつとも多くの命を奪ってきた武器。文明レベルが中世ヨーロッパ程度のこの世界では、おそらく最高のアドバンテージとなりうる武器だ。

魔法という不確定要素はあるものの、まず負ける心配はない。人前で迂闊に使うことはできないが、万が一の時の切り札となるだろう。

以前は人間の深層に埋め込まれた自己防衛プログラムというべき生存本能に従って出していた故に、どうやって使えたのかが良く分からない。

とりあえずやれる所からはじめてみようと思を閉じ、あの子の銃を想像イマジンしてみる。

デザインは直線的。色は対なる黒と白の二つ。弾数は無限。その銃を手のひらに。

ずしりと手のひらに重力がかかったのを感じた。目を開けてみると、そこにはあの時見た二丁の銃が手の中に納まっていた。改めてみると、煌びやかな宝石や流麗な装飾などはないが、その無骨な感じがいかにも武器と言った感じでとてもカッコいい。

だが、これを召還　　感じ的にそう呼ぶことに　　するまで
のタイムラグが大きい。もっとパツと出せないものか。

そこで、以前畑仕事の依頼をしたおじいさんの言葉思い出した。

「イメージは言葉にすると考えた以上に明確になる」

例えば、日本国内で「ファイア」と言えば、結構な人　　特に
RPGなどのゲームをやったことのある人など　　が、蝋燭にチ
ロチロと浮かぶ火よりも、空中を飛んでいく大きな炎の塊を想像す
るだろう。砲撃の合図だと言う人は軍事関係者だけだ、きつと。

名称を付ければ、「直線的なデザインの白と黒の銃」というイメ
ージが、その名前に付加されるはず。名は体を現すという至言は真
にもっともなものだったようだ。

となれば、この銃に与えるべき名前はひとつしかない。

「エボニーと、アイボリーだな」

つぶやいた途端、銃が薄っすら発光したように感じた。一旦銃を
消し、今度は『エボニー』『アイボリー』という名前を思い浮かべ
る。

期待通り、先ほどと寸分たがわぬ銃が手にあった。博士！実験は成功です！

続いては威力。ゲームの設定上、一撃の重さより手数に頼る武器なのだが、それはダンテが悪魔超人的パワーを用いて、フルオートマティック全自動式（引き金を引いている間ずっと弾が発射される銃）を凌ぐ速さで引き金を引いていたに過ぎない。

要するに、この銃は一度引き金を引くにつき、一発ずつしか撃てないのである。普通の人間はマシンガン並みの速度で引き金を引くのは無理です。指が手の平からサヨナラします。

かなめ要である連射性能が打ち消されてしまっていては、使える武器とは言い難いものになってしまう。

はてさてどうなるものかと、若干の緊張と期待混じりに近くの樹に照準を合わせる。

「んじゃ、大木様、真に勝手ながらあなた様を的にさせていただきますよ」

心にもないことを言いながら躊躇なく引き金を引く。

ドンツ！という衝撃音と共に銃口から元気いっぱい飛び出した弾丸は、大木に直径1cmほどの穴を空けて貫通した。

なるほど、威力は申し分ない。これなら連射できなくとも問題なさそうだったか、やはりゲームのように連射してみたい。

というわけで、ハニカムファイア両腕を交差させた状態で、再び的に銃口を合わせ、連続で引き金を引いてみた。

本当に俺がやったのかと思うほどのスピードで風穴が大木の幹に生成され、ついには自分の重さを支えきれなくなった大木が倒れた。

どう考えてもチート武器です。本当にありがとうございました。

シッケルグーゼル命中精度に関しては、動局的を撃つてみないと分からない。まあ、鎌鼬が出たら試してみようかね。

だんだん人外である自分を自覚して落ち込んだところで、お次はダントエの能力、スタイルの確認だ。

ゲームでは、ソードマスター、ガンスリンガー、トリックスター、ロイヤルガード、そして特殊なものにクイックシルバー、ドッペルゲンガーというスタイルがある。

ソード、ガン、ガードは文字通りの分類の技を極めたもので、トリックスターは主に回避行動や特殊なアクション ウォールハイク壁のぼり、スカイスター空中ダッシュ、エアトリック瞬間移動などが扱えるスタイルだ。

クイックシルバーは短い間だけ時間の流れを遅くすることができ、

ドッペルゲンガーは自分の影を媒介にし、分身を生み出す事ができる。

最新作では後ろの二つのスタイルは消えたものの、残りの四つのスタイルを任意のタイミングで変更が可能に。これにより、以前はできなかったスタイリッシュなアクションも可能となった。詳しく説明しているのはあくまで皆様に理解していただくためであり、宣伝的な考えはまったく含まれていないことを言っておこう。

まずは回避行動が主であるトリックスターを使ってみることにした。

かなり使い勝手の良いスタイルのだが、使用時の強烈な吐き気は大きな問題となっている。相手のバックを取れても、直後に戻してしまっているのは、敵にわざわざ己の首を差し出すようなものだ。まだ仲睦まじい体と頭を離婚させる気はない。

まずは壁ウォールハイクのほり。これはその辺に立っていた木に向かって走ってみると簡単にすることができた。

続いて空中スカイスターダッシュ。しばらく練習すると、空中に現れた紅く光る魔方陣を蹴る事と、魔方陣そのものに作用する不思議パワーによって、少しの距離だけ空中を移動することができるようになった。

続いては二段エアハイクジャンプ。これはスタイルの技ではないのだが、スカイスターが使えたので、「魔方陣下に設置すればできるんじゃないか？」という非常に安直な発想のもと行ったところ、見事にその通りできてしまったのである。何事も為せば成るものだ。

最後に難関、瞬間移動エアトリックの練習だ。移動そのものは、自分が移動し

たい地点に自分の姿を思い浮かべると、そこに移動するようになった。

説明し辛いですが、自分の前方に移動するなら、現在の地点から移動先の自分の後姿を想像し、後ろに移動するなら、現在地点にいる自分を後ろから見る。そんなイメージだ。

このように、移動は比較的簡単にできたのだが……。

「おえええ」

吐き気は相変わらずだった。それでも最初に比べると軽いものだが。感覚的に乗り物酔いに近い。

吐き気が収まった後は、ソードマスターの確認を行った。といってもぶっちゃけ技の模倣だ。

さて、ダンテは武器を手に入れた後、その性能の確認の為に必ず盛大に暴れる。ただ武器を振り回すだけのときもあれば、何百メートルも先にある巨大な石版を刀で一閃したり、ボス級の敵の大群を一掃したりした。もはや天災レベルだ。

と言うわけで暴れてみることにしました。大丈夫大丈夫。何かあっても全てモンスターのせいになればオールオッケー。

先ほど銃で倒した木の隣にあった、不幸な樹を的にさせていただけ。

体を半身に構え、背中に挿してある大剣の柄に手をかけた。

そして剣を抜いた刹那、4つの光の筋が樹を通る。袈裟斬り、逆袈裟斬り上げ、回転斬り下ろし。幹の上の部分がズルリとずれて傾く。

間髪入れずに剣を高速回転させ、倒れかけた樹を上空へ弾き飛ばす。

遅れて落ちる丸太を下段に構えた刃で、風すら置き去りにして切り上げながら空中へと飛ぶ。遅れてやってきた風により、半円型になった丸太も上空へ。

そのまま重力に引つ張られ落ちる前に、空中で樹を4回切り裂く。さらに追撃で兜割り。剣の遠心力と重力により、高速で地面へと帰還。

ばらばらと落下してくる木片を、連続突きで一つ一つ吹き飛ばす。あまりの速さに剣がいくつもあるように見えるほどだ。

さらには地面に剣を突き刺し、それを軸にして回転蹴りを繰り返す。四方八方に飛んでいく樹の残骸。そして、

「Break Down!!」

最後に落ちてきた木片に強烈な突きを放つ。もはや吹き飛ばすこと

すら許されなかったそれは、セリフどおり粉々に砕け散ってしまった。

感想。最っ高に爽快です。興奮のあまり手が震えてやがる。体がこつこつと思った通りに動かせると言うのはなんと心地よいものか。

だが、これを生き物相手に使つと、モザイクが必要なほどのグロイ光景が広がることだろう。

そうでなくとも、剣の余波で関係ない木々まで傷ついており、周りの自然環境は著しく破壊されている。レッツ地球温暖化促進。ガッデム。

そんな俺の行動に異議を申し立てる自然保護団体様（非公式）が、ガサガサと葉と葉が擦れる音を立てながら現れた。依頼の殲滅対象である鎌鼬だ。シッケルヴィーゼル

当然、銃の練習代になつてもらいました。

シッケルヴィーゼル 鎌鼬はランクFのモンスターだ。姿は、両前足が農作業に用いる鎌になつた鼬を想像していただけると分かりやすいと思う。

小さな体と俊敏性を活かし、手の鎌で切りつけてくる攻撃を得意とするが、その唯一の攻撃手段ともいえる鎌の切れ味が悪いため、皮鎧すら切ることができない。だからランクどまりなのだそうだ。まあ、防具のついていない部分に攻撃を受けると普通に痛い訳だが。

「エボニー、アイボリー」

銃が現出し、手に重力を与える。ちなみにわざわざ声を出したのは、この方が出やすい事が分かったからだ。何も言わないと、若干遅くなってしまふ。なに、消費するのは自分の羞恥心だけさ。ちなみに人前でやると消費量アップだ。

エボニーとアイボリーをシッケルウイゼルに構える。すると、右手に握ったエボニーに引つ張られるように腕が動き、襲い掛かってくる中の一匹に狙いを定めて引き金を引いた。打たれたそいつがどうなったかを見る前に、別の方向から襲ってきたシッケルウイゼル鎌鼬を左手のアイボリーで撃つ。

仲間がやられているのも恐れず次々と襲い掛かってくる奴らを、俺はその場からほとんど動かさずに対処していた。

暫くすると、銃に引つ張られているような感覚は消え、自分の感覚で銃を扱っていた。

一度自転車の乗り方を覚えたら、何年たっても忘れないのと同じで、ダンテの肉体に染み付いた銃の技量は、俺にもすっかり受け継がれていたようである。神様め、いい仕事するじゃないか。

あたりを静寂が支配した時、その場に俺以外に動くものは無かった。

第7話 予習と復習は結構重要(上) (後書き)

ダンテのスタイリッシュな動きが表現できたか心配です。

一つ一つの行動を筆記していくとスピード感が失われるし、逆だと何をやっているかいまひとつわからず、軽いものになってしまいます。

これから勉強して、うまく使い分けて行きたいです。

第8話 予習と復習は結構重要(下) (前書き)

パ・ソ・コ・ン・復・活！よく戻ってきた我が戦友！

が、現在テスト期間中orz

更新速度は相変わらずになりそうです；

第8話 予習と復習は結構重要(下)

シッケルヴァーゼル
鎌鼬の換金対象部位である鎌を、一体づつ両前足から二本ずつ剥ぎ取り、買っておいだ丈夫な布袋に詰めて行く。討伐依頼の場合、換金対象部位が依頼達成の証拠となるので、絶対に忘れてはいけな
いのだ。当然鎌に付着した血はふき取ってある。

血の匂いを嗅ぎ付けける生き物が来るかもしれないと、漫画か何かで聞きかじったうる覚えの情報を思い出し、鉄分の匂いがし始めたその場を後にする。

死体はこの後狼の皆さんスタッフでおいしく頂いてもらえるだろう。

場所を変えても能力検証は続く。

次はネ口の悪魔の腕だ。デヒルプリンガーダンテと違い、武器が大剣と銃しか使えないネ口の力を補って余りある能力だ。

敵をつかんで引き寄せる『スナッチ』や、つかんだ状態から投げたり、振り回したり、ボコボコと殴ったりできる『バスター』。さらに敵以外の遠くの物をつかみ、高速で移動する『ヘルバウンド』など、使いこなせれば百人力な能力のオンパレードだ。

あの青白く光る腕をイメージすると、思ったよりすんなりと自分のものにできた。

さらに、作中の悪魔の腕デヒルプリンガーと異なり、自由性が極めて高いことが分かった。まあ、俺自身が現実に掲っているのだから当たり前ではあるが。

さらにさらに、なんとこの腕、両腕から出て来るんです！こんなお得な青白く光る腕にお値段は無いが、質量はあるようで、適当に岩などをぶん殴ってみると、見事に粉碎できた。おまけに本体の腕には何のダメージもない。この力、プライスレス。

ふと辺りを見てみると、なにやらいくつかの方向から視線を感じた。

まずい人いたのかどうしよう、口封じしてしまおうかと物騒な考えが頭をよぎったが、それは杞憂だった。視線の主がモンスター達だったからだ。

ものつすごく敵対心むき出しの空気を漂わせていたが、俺があまにもとんでもな力で暴れまわっていたため、遠くから様子見していたようだ。

というか怯えられてる。子供を抱きかかえた猿みたいな姿のモンスターからは、『ママなにあれ怖い』『シッ！見ちゃいけません！』とかいう会話まで聞こえてきそうだ。なんでだろう、悲しくないのに涙が出るよ。

いたたまれなくなったので、さっさと終わらせて帰ろうと思い、あと何があったかなと考える。

途端、周りのモンスター達が鳴き声を上げ、ガサガサと茂みを揺らしながら遠ざかっていったのが分かった。

Why?と思ったが、その理由は直ぐに判明した。

俺の姿は体の周りをぐるぐると回転しているいくつもの浅葱色あさぎいろに光る剣によって、人間チェンソーになっていたからだ。いや、草刈につかう電動カッターに近いかな？

結構驚いたが直ぐに、これが確認し忘れていた能力だとわかった。バージルが使う幻影剣だ。

自分の美德に反すると銃の使用を嫌う彼の、唯一の遠距離攻撃だ。敵の近くで繰り出せば、敵の周りに剣を固定し、合図ひとつで標本を完成させることもできるし、今のように体の周りに高速回転させ、敵をミンチにする事もできる。

とりあえずこの状態で動き回ると、もう完全な全自動自然破壊兵器となってしまうため、それらを一旦消す。

改めて浅葱色の剣を一本だけ出す。形は俺が今背負っている大剣ソウファイハンダーに似ていた。それを適当な樹にむけて射出する。

僅かに木屑を飛び散らせ、樹に深々と刺さった剣は次の瞬間ガラスが割れるような音と共に碎けて消えた。

刃物などが深々と人体に刺さったときは、それを抜いてはいけな
いと言われている。引っこ抜くと、刃物が抑えていた血が噴出して
しまうからだ。

だがこの剣は刺さった後勝手に消えるので、生き物に言えば間違
いなく大量出血で殺すことができるだろう。なんつーエグイ武器だ。

冷や汗がタラリと頬を伝う。

「……まあ、でもアレだ、モンスターに常識は通用しないだろうし」

全長何10メートルもあるようなドラゴンとか出てきたら、寧ろ攻撃力不足かもしれない。その前に尻尾巻いて逃げ出すだろうけど。

そんな良く分からない理屈でとりあえず納得し、今度は10本の剣を自身の周りに設置する。

そのうちの5本を発射。ガスガスガスッ！と剣は幹に刺さっては消えていく。

残った5本を今度は樹の周りに設置する。空間に固定された剣は、標的を貫くのを今か今かと待っているかのようだった。

俺が意識すると、それらはほぼ同時に幹に突き刺さって消えた。既に、的となった樹は猫の瞳みたいな穴がたくさんできていた。

最後に、自分の周りに数本剣を設置し、高速で回転させる。ヒュンヒュンと音をたてる剣は空気すら切り裂いている。

そのまま状態で樹に近づく。剣の刃が触れた途端、ズパンと小気味の良い音をたて、樹がぶった切れた。

ここに検証結果を報告させてもらう。絶対に全ての能力フルスロ

ツトルで使うのは止めるべきだ。

肉体より精神的な疲れにぐったりしながら、俺は町へと戻っていた。

*

ギルドに戻り、皮袋に詰め込んでいた鎌をカウンターにおく。

「・・・・・・28、29、30。合計で15匹分の換金対象部位を確認しましたので、依頼達成です。お疲れ様でした」

鎌の数を数え終えたミリアさんが、依頼達成用紙にハンコを押して、それを奥にある棚へしまった。

「依頼より5匹分多いですが、そちらはどうしますか？特に何もなければそのまま換金いたしますが」

「それじゃあ、それでお願い」

「はい、分かりました」

そう言ってカウンターの下から取り出した小袋を俺にわたすミリアさん。中には銅貨が3枚入っており、これで今日の食事には困らないゼヒャツホウと小躍りしそうになったが、当面の生活を考えるともう少し稼がなければいけないわけで。

次の依頼を受けるにしてもとにかく現在進行中で胃液ドバドバなお腹を何とかしてからだなと考えていると、ミリアさんから少し心配しているような声色で話しかけられた。

「ユウマさん、これからはあまり雑務系の依頼を受けないんですか？」

「ん？いや今日はたまたま」

お仕事モードではないようなので、俺も砕けた喋り方になってしまっ。

なんだかんだで、この人が俺の担当の受付みたいなもんじゃないかと思うほどギルドでのエンカウント率が高いので大丈夫だろう。

彼女は俺の返事を聞くと安心したように、

「そうなんですか。よかったです。雑務系の依頼はあまり受けてくださる方がいらっしやらないので」

と言った。要するに都合のいい雑用解決係がいなくなるのは困ると言ったところか。

それをオブラートに2重くらいにくるんで言うと、ミリアさんは少し慌てたように言った。

「いえいえ、そうじゃありませんよ。もともと、ここに依頼されるものは、規模はどうであれ冒険者じゃないとできないと判断された

ものなんです。だから、雑務系と討伐系の違いと言うのはあまりないんですよ。それが分からない人が多いから、どんどん雑務系の依頼は溜まっていくんですけどね……」

最後の方はため息交じりだった。

「それに、ユウマさんは力を使う依頼ばかりを受けていますでしょう？それらの依頼は名実ともに討伐依頼となんら変わりはありません。それを何日も休み無く行えるのはすごいことですよ」

「うーん、あんまり実感はないんだけど」

そもそもこの力そのものがイレギュラーなもので、正直ズルしている感が否めない。

でも、人助けになっていけると言うのならそれでいいや。

ミリアさんが少し申し訳なさそうに言う。

「それでお願いがあるんですが……」

「何？」

「私の依頼をひとつ受けてくれませんか？他の人は受けてくれなさそうなので……」

俺が承諾すると、ミリアさんは喜びながら依頼内容を話す。

なんでもとある孤児院の家具運びと、できるなら屋根の修理をして欲しいのだという。屋根の修理に関しては、素人修理でよいそう

で。

「野暮かとは思ったが、一応その孤児院と彼女との関係を聞くと、彼女は元々孤児でそのその孤児院は彼女が昔居た場所なのだそうだ。

正直孤児院と聞くと、あまり良いイメージを持っていなかったため、つい辛くは無かったのかと聞くと彼女は笑顔で、

「院長も良い人でしたし、周りのみんなも優しい人ばかりでしたから、辛くはありませんでしたよ。あそこに預けてくれた私の親には感謝しているんです」

それにそうじゃなきゃわざわざ依頼なんてしませんよ、と笑いながら言った。

しかし、実際に預かった子供を過剰に働かせたり、貴族に売ったりする孤児院もあるらしい。当然売られた子供達は貴族の玩具にされるのだろう。まったく反吐が出る。

「じゃあ、いつ行けばいい？今日の午後はまだ依頼受けてないから大丈夫だけど」

「それでは、午後からお願いします。上司に上がらせてもらうように頼みますので」

「じゃあ、昼食の後に

」

「おおい、オマエエ」

非っ常にイラツとくる粘ついた声に反応して後ろを見る。そこには

目に優しい筈なのに生理的に嫌悪感を感じる緑色の髪をした男が立っていた。体は細め。皮でできた鎧を着ており、腰のベルトには数本の短剣ダガーナイフが差してある。

その男の後ろには俺のそれより大きな大剣を背負った脳みそまで筋肉でできていそうな大柄な男と、ダブダブしたローブのような服を着た小柄な男が嫌らしい眼つきでニヤニヤ笑っていた。

どう見てもベッタベタなヤンキーとその取り巻きの図です。本当にありがとうございます。

「ちょこーつと俺達に金分けてくんねえかなあ？今金欠気味ですよ」

先頭に居た緑髪の男が俺を舐めるように睨みつけながら言う。つか顔が近いんだよ気色悪い。ほら見るミアさんがビクリしているじゃないか、お前の面白フェイスに。おまけに恐ろしくムカツク物言いに殺意が沸いてきた。現代っ子のキレやすさ舐めんな。

「オメエ、雑務系の依頼で貯めた金がアンだろ？それを分けてくれるだけでいいんだよお。大体9割くらいさあ」

フードの男が緑髪に同調して俺に言う。殺意、更に上乘せ50%オソ。100%でもれなく天国への日帰り旅行をプレゼントだ。きつといい所過ぎて帰ってきたくなくなるだろう。

そんなイライラを隠し、表面上勤めて冷静に俺は言い返す。

「お金が欲しかったら俺じゃなく依頼掲示板へどうぞ。雑務系の依頼ならわんさかあるぜ?」

「ああ?ふざけてんのかテメエ?」

どっちがだよと俺は声を大にして問いただしたい。

「やめなさい!ギルド内での恐喝行為が禁止されているのは知っているでしょう!」

カウンター越しにミリアさんが怒鳴る。場所問わず基本的に恐喝はいけないことではないでしょうかという突っ込みは敢えてしない。

「おいおい、俺達は金を寄越せとは言ってねえぜ?貸してくれつつ
てるだけだ。と言うわけでちょっと黙ってるよ、なあ?」

そう言つて腰の短剣ダガーナイフの柄に手を添える男を見て、ミリアさんがしゃつくりの様な悲鳴を上げる。状況が状況じゃなきゃ可愛いワンシーンだったんだけどな。とにかくミリアさんを巻き込むのは止めないこと。

「おい、彼女は関係ないだろ」

すると男はニヤリと口を歪めて、

「だったら早いトコ金貸してくれや。そろそろ腹の虫の我慢の限界がきそうだよお」

と言いながら、抜き身の短剣を俺の腹に軽く当てる。全員が多少なりとも威圧感を俺に与えようとしているようだが、徒党を組んで弱者を脅すことしかできないような連中の威圧感など、銀黒狼フイウルフのそれと比べるのもおこがましいほど弱い。

さてもういつそギルドの床に埋めてしまおうかでもそれやると後片付けが大変にいやいやここで埋めておいた方がこれ以上被害者が出ずにすむかと考えていると、男達の背後に歩調に合わせて揺れる金色のポニーテールが見えた。

「何をしているんだお前達は」

エリシアから強いプレッシャーが放たれ、男達がたじろぐ。が、それでも人数の差による余裕が、緑髪が彼女に言い返す。

「な、なんだよ、テメエには関係ねえだろうが」

「恐喝現場を見て見ぬ振りはできないのでな。それに受付嬢や周りの冒険者にも迷惑をかけているとあれば尚更だ」

「おいおい、誤解しねえでくれよな『金色の焰』。俺たちやただこいつからちよっと金を借りようとしただけだぜ」

「それは世間一般から見ると恐喝と呼称される行為ではないかな？これ以上グダグダと喋る気はサラサラないのでそろそろ実力行使に移らせてもらおうかと思うのだが、貴様らはどうする？」

エリシアの目が鋭くなる。俺でもちよっと怖いと思うほどなので、それを向けられている彼らは相当ビビッているだろう。

「……ツチ！おい、お前ら行くぞ！」

仲間を連れて立ち去ろうとした緑髪がふと立ち止まり、俺に振り返ってとんでもなくバカにした顔で言った。

「運がよかったなあ、『コーデイス』」

「なっ
」

直ぐに踵を返して男は去っていく。

エリシアはまるで禁句^{タブー}を聞いたような声を出し、ミリアさんは手で口を押さえた。

俺に向けて放たれた、非常に差別的な言葉だと言うことはなんとなく感じたが、意味が分からないので俺はキョトンとする。

「ひ、ひどいです……」

「ユウマ、気にするなよ」

「俺は大丈夫だけど……。っっていうか『コーデイス』ってどんな意味の言葉？俺のせ……。故郷では聞いた事がない言葉でさ」

「……最低の侮辱の言葉だ。下種や臆病者、さらに相手への死を込めた言葉だ」

そう、と言いながら心の中で次あいつ等に会ったら必ず埋めてやる^{ワウルフ}と誓う。或いは銀黒狼の住処にでも縛って投げ込むか。

「ユウマさん、何故彼らの脅しに黙ってるだけだったんですか？両手大剣を片手で振り回せるほどの力があればわけないでしょうに」
ミリアさんが少し怒ったように俺に言う。正直短剣を腹にあてがわれた時点で埋めようと思ったが、エリシアが来てしまったのでその機会を失っただけだ。じゃなきゃ決行していた。

だが冷静に考えてみると、まだ人間相手への力加減を知らないのだからやらなくて良かったと思う。異世界入り4日目で犯罪者ルート突入はゴメンである。

「・・・うん、まあ、いいじゃないか。結果何も無かったわけだし。というかそんな事ミリアさんが言ったら上司に怒られるんじゃない？」

「うっ、そ、そうでした」

苦笑いするミリアさん。ようやく空気が穏やかなものになったのを感じてホッとする。

改めて、昼食後に依頼を受けることを伝え、ギルドの食堂側のテーブルにつく。エリシアも一緒だ。

メニューから最近ハマっている、アジャンというチャーハンらしき食べ物を注文。もうモンスターの肉を食らうような事はしない。総じて安いのは少し気を惹かれるが。

「最近依頼の方はうまくいっているのか？」

「好調好調。さっきもひとつ依頼をこなしてきたとこ。エリシアは

「？」

「私はまだ達成はしていない。討伐系の依頼なのだが、その対象のモンスターが見つからずに依頼を延長させてもらったくらいだ」

「そっかー大変なんだ」

「ところで、サンドワーム砂蟲を討伐したと言う噂を聞いたんだが、それは本当か？」

「うわちゃ、エリシアの耳にまで届いてたのか。おまけにどうやって討伐したかは聞いていないようだ。人の噂って案外頼りにならないね。」

「ん〜。確かに倒したんだけど、それは運が良かったからなんだ。奴が勝手にひっくり返ったところを、依頼主の人たちと一緒に腹を攻撃して倒せたんだから。多分そうじゃなかったら死んでたかもな」

「そうだったのか。でも冒険者にとって運もひとつの武器だぞ。どんな状況もひっくり返せるほどの幸運を持っていれば、怖いものなしだからな」

「そういえば、俺のじいちゃんがそんなことを言ってたっけ。運がいい奴は砂漠で遭難しても勝手にオアシスがある場所へ歩いていくし、戦場でも必ず生き残るそうさ。というか、じいちゃん昔何やってたんだよ。」

「コトリとテーブルに置かれた湯立つアジャンを、俺はエリシアに先に食べると一言断ってからスプーンですくい、口へと運ぶ。日本の米より細長いそれはほど良い噛み応えがあった。これが癖になるん

だよな。

アジャンが来た直ぐ後にエリシアの前にも料理が置かれる。パンに肉と野菜を挟んだホットドッグのような食べ物だ。と言うか名前もそのまんまホットドッグなのだが、どうも挟まっているものがソーセージではないので違和感がある。

ほお張ったアジャンを飲み込み、エリシアに話しかける。

「エリシアは今何の討伐以来を受けてんの？」

「ああ、クレイジーウルフ 狂黒狼だ。ワーウルフ 銀黒狼のボスだな」

「うわ、結構な強敵だな」

たしかクレイジーウルフ狂黒狼はランクBだったはずだ。サンドワーム砂蟲と同格だが、奴はその希少性のため高ランク指定されているので、実質的には奴より手ごわいのだろう。

あれ？ってことは。

「エリシアってBランクなの？」

「そうだ。さっきのチンピラどもも言っていたが、『金色の焔』という私には似つかわしくない名でも呼ばれてもいる」

ギルドでのランクアップの基準は、自分と同じランクの依頼をいくつもこなすか、自分より高ランクの依頼を片手の指ほどの数だけこなすことで上がる。

前者の方法では、ランクによって次のランクに必要な依頼達成数が異なるので覚えてはいたが、Bランクまであげるには相当な数の依頼をこなさなきゃならなかったはずだ。

さらに、二つ名というのは人々が呼ぶ通称のことで、大体Cランク以上の者が持っている。稀に嘲りを含んだものもあるが・・・。

それを持っているということは、彼女は相当な実力者なのだとわかる。

しかし、『金色の焔』か。なるほど、確かに彼女の髪は綺麗な金色だし、優しさと強さをあわせ持つその性格は炎に似ているかもしれない。

「いや、よく似合った二つ名だと思うよ」

自然と口から言葉がこぼれだしていた。するとエリシアは一瞬ひどく驚いたように目を見開き、

「・・・・・・・・・・そうか」

そう言って、少し俯いてぱくりとホットドッグにかじりつくいた。う、本当に嫌だったのかな？

場の雰囲気を和ませるため、すこしおどけたようにエリシアに話しかける。

「よかったら手伝おうか？今日は無理だろうけど」

「フフッ、気持ちだけ受け取っておく」

軽く笑ってあしらわれてしまった。まあ、俺も半分冗談だったから別にいいけど。第一、そんなバケモノと戦うなら本気を出さなきゃならないかもしれないし、下手なりスクを負う必要はないだろう。

その後いくつかとりとめもない話をしている間に、目の前の皿は綺麗に空になっていた。

ミアアさんの約束があるので、そろそろ行かなきゃと席を立つ。

「それじゃ、俺そろそろ行くよ」

「分かった。何かあったら、いつでも来るといい」

ん？あれはなんだろう？

ふと気になったが、まあいいかと気を取り直し、俺は入り口で待っていたカウンターで着ているものとは違う、黄緑色のワンピースを着たミアアさんと共にギルドを後にした。

第8話 予習と復習は結構重要(下) (後書き)

ちなみに緑髪がいった差別言葉の『コーデイス』は実在する言葉ではありません。

弱虫という意味の『cowardice』の発音をチヨコット変えてカナ表記にただけです。

第9話 純粋な子供の発言は時折大ダメージになる。(前書き)

知らぬ間にお気に入り件数100件突破！

感謝感激雨あられです。

しかし更新速度が不定期かつ亀な作者をお許しくださ・・・・・・・・
おっと誰か来たようです。

第9話 純粋な子供の発言は時折大ダメージになる。

*

ミリアさんに案内された孤児院はなかなかひどい状態だった。

三角注を横に寝かせて乗つけたような屋根の、4階建てのその建物はすっかりとした造りをしており、昔はさぞかし立派なものだったのだろうと推測できる。

が、現在は壁の塗料が剥げおちたり、壁そのものが棒か何かで傷付けられたままほったらかしになっていたり、ガラスが割れたままの窓もある。夏はいいだろうが、冬は辛そうだ。

木々はほったらかしにされた蔓に絡まれ、庭の草は伸び放題。しかし中心のほうは子供達によって踏み均されたのか、茶色い地面がむき出しになっていた。

「せんせーい！来ましたよー！」

ギルドでの落ち着いた雰囲気が変わり、明るい声で孤児院の方へ手を振るミリアさん。こちらが彼女の素なのだろう。ギャップいいよギャップ。

彼女の呼びかけに答え少し傾いたドアが開き、中から白髪のおじいさんが出てきた。目じりに幾つもの皺が刻まれた細い目がクシャリとゆがみ人懐こそうな笑みを浮かべる。やさしい雰囲気を纏った好々爺だ。余談だが、おでこがちょっと危険な感じ。森林伐採進行中。

「おお、ミリア。久しぶりだね。ギルドでの仕事は大丈夫かい？」

「はい。同僚も先輩方もいい人ばかりです」

「そうかそうか、よかった。ところで隣の方はどなたかな？」

「ミリアさんの依頼を受けた冒険者のアキ・・・ユウマ＝アキモリです。どうぞよろしく」

「そうでしたか。私はこの孤児院の院長などをやっております、ベック＝オーケルマンです」

俺の差し出した手を笑顔で握るベックさん。握手は人と人をつなく最初の橋であり、それは異世界でも同じだ。

「珍しい方ですな。名前もそうだが、あなたのような礼儀正しい冒険者というのは、あまり聞いたことがありませんよ」

「どうもです。これは俺の性格ですね」

「良いことだと、思いますよ。ところで、彼女から何を？」

「この孤児院の様様替えの手伝いと屋根の修理を頼んだんですよ。もうすぐここを出て行く子供達がいるから、色々大変だと思って」

「おやおや、気にしなくとも良かったのに」

のほほんとした会話を聞きながら孤児院の方に目をやると、一階にある広めの部屋で何人かの子供達が遊んでいるのが見えた。子供

は元気が一番だが、いくらなんでも屋内でチャンバラはいかがと。隙間風の通り道がまたひとつ増えるぞ。

「ちょ、ちょミリアさん、あれ止めたほうがいいんじゃない？窓ガラス割れるよ？」

「あ！またあの子達は！」

「こらっ！と言いながら中に入っていったミリアさんをベックさんが微笑みながら見ていた。いや、ホントにギルドでの彼女と違うのでびっくりだ。」

「私達も中に入りましょうか。風が強くなってきましたし」

そう言われて俺とベックさんも孤児院の中に入っていった。

「もう！あなた達は、中で暴れちゃダメって言ったでしょ！」

「え、ミリアお姉ちゃんのケチ」

「ほら、外で好きなだけ遊んでらっしゃい」

「はい。あれ？」

ミリアさんに諭されて外に行こうとした子供の一人が俺に気づいた。

「おじさん誰？」

言葉のキャッチボール第一球目は見事なデッドボールだった。齡

17にして既におじさんと呼ばれるほど老けているのか俺は誰か鏡持ってきてくれ。

ここで子供相手に怒るのも大人気ないので余裕を持った態度で先ほどの言葉を訂正する。

「おじさんじゃなくて、お兄さんな。まだ俺17だから」

「えっ!？」

あの、ミリアさん？何故あなたが驚かれるのでしょうか？

「いえ、てつきり私20代前半かと思っていました・・・」

なあ、ジョニー。この世界に若返りの秘薬つてあるのかな？たった今脳内に現れた金髪の外国人が、俺の肩にポンと手を置く。

気にするなと、そう言った。ちっとも根本的な解決になっていないのだが。

「おじさん、ミリアお姉ちゃんの恋人さん？」

「ちょ、何言ってるのあなたは!」

ミリアさんが顔を真っ赤にしながら全力で否定する。なあ、ジョニー、俺空飛べるかな？今なら飛べそうな気がする。

お前は飛べなくても大丈夫さと慰める脳内ジョニー。やっぱり何の解決策にもなっていないけどありがとう。

その後も、「わー、ミアお姉ちゃんまっかつかー！」とからかう子供達と、「もっつ！あなた達ねえ！」とその子らを追い掛け回すミアさんを見て、何度か神様に挨拶しに行こうかなと思っていた中、ベックさんはずっと微笑んでいた。うん、止めてよあれ。同じ男ならダメージわかるでしょうが。

俺を慰めてくれた脳内ジョニーにご退場頂き、仕事の話を持ち出す。なんていうか、このままだと俺の心が致命傷を負いそうだった。メンタルが弱い？自覚している。

仕事内容その一である模様替えは、4階の部屋にあるタンスやベッドを1階の空き部屋まで運ぶと言うものだった。ドアがあまり大きくなく、それらを運ぼうとすると人一人分くらいのスペースしか開かない。故に今までは大人数で外側と内側から持って運んでいたそう。

と言っても、マッチョなおっさん五人分以上の筋力がある俺には負担にはならない。持ちにくいのが難点だが、大した時間をかけずに4つの部屋から大小の家具を運び出し終える事ができた。

子供達やベックさんは目を見開いて驚き、ミアさんに至ってはもはや呆れたような表情をしていた。俺のココロに5ダメージ。

変わりに子供達は、俺への認識を『おじさん』から『力持ちのお兄さん』と改めてくれた。結構嬉しかったりする。

おまけに、冒険者だと言うことも子供達の興味を引いたようだ。彼らに言わせれば、冒険者は自分達の為にモンスターと戦ってくれる正義のヒーロー的ものなのだそう。

ついさつき、そんなイメージから大分かけ離れたバカ共を見た俺は、思わず苦笑いを浮かべていた。

休憩なしで、続く屋根の修理を行う。裏手の倉庫にある工具用具を探すのに大分時間を食ってしまったが。

長いこと使われていなかった倉庫の中は大分埃が溜まっており、開けた瞬間なだれのように押し寄せたそれは俺の喉を愉快なことにしてくれた。あらかじめ予想できていたのか、ベックさんとミリアさんは距離を置いていたため、被害を受けたのは俺一人だった。ていうか分かってたんなら教えてくれよ。

物を動かすたびに舞い上がる埃に苦戦しつつ、倉庫からトンカチと釘、塗料の入った缶、刷毛を発掘することに成功した。

地面から直接はしごを伸ばしても届かないので、裏手から見えた、三階の大きなバルコニーから屋根に上ることにした。

育成放棄された木製のプランターから我が物顔で生えて、落下防止用の柵に絡み付いている蔓をブチブチと千切ってプランターを退かし、はしごを架ける足場を確保する。

尻のポケットにトンカチと釘が入った箱を押し込む。100cm x 70cm程の大きさの木の板を剣の鞘を背負うベルトに挟むように固定し、えっちらおっちらはしごを上る。その際子供達もついてきてミリアさんに叱られていたが、それはおいておこう。

時折吹く強い風を木の板が受け止めバランスが崩れそうになり、思わず下を見てしまった。改めて結構な高いところにいることを認

識し、背筋を蟲が這う様な感覚を味わう。

下を見ないように細心の注意を払いながら、急いで屋根にたどり着いた。所々にボロボロの部分が見える。

俺が乗って突然崩れたりしないよなと死にくい体と分かってもビクビクしながら、屋根の上を移動する。

専門的な修理法など知らないの、とりあえずボロボロの部分を覆い隠すように木の板を合わせて、釘を打ち込んでいく。

トントンカンカントンカンと小気味良いリズムを奏でながら一つ一つ、ボロボロな場所に板を打ち付けていく。臭いものに蓋？ 気にははいけない。

運良く釘も板も足り、全ての箇所を修理し終えたところで、腰に巻いていたロープを下に投げる。

ベックさんをお願いし、ロープの先端に塗料の缶と刷毛を結び付けてもらい、それを引っ張り上げた。

何度かゴガンゴガンと壁に新たな傷を作り、最後にねずみ返し状になった屋根の棧の下に引っかかった時はマジかよと焦ったが、無事屋根の上まで持ってこれた。

板をただ貼り付けたままだと、雨に濡れて腐ってしまうので、水はけ用の塗料をベタベタと縫っていく。ニスに似たつんとした臭いがした。

全ての仕事を終え、後は乾くのを待つだけとなった。屋根の上で

ちよいと休憩。傾いた屋根にごろりと寝そべり、手を枕代わりに頭にしく。くあつ、とあくびが漏れた

少し動きを速くした雲は太陽光を遮り、地上に影を落としている。風もあるせいで少し肌寒さを感じる。

ふと、思う。

「まだ異世界イセカイに来てから一週間も経ってないんだよなあ・・・」

感覚的には既に一ヶ月もここにいるような気がする。日々の出来事の何もかもが新鮮で、毎日が濃いものなのだから当たり前かとも思う。仕事に魔法にモンスターに剣に銃にと、上げればキリがない。

お母様、あなたの息子は異世界で元気にやっていますよ。毎日が驚きの連続です。

いやこんな手紙があちらに届いたら困るが。死者からの手紙って何のホラーだよ。

今は雑務系の依頼をこなしていく事で生計を立てていけるし、その生活にも満足しているが、できればこの世界を見て回りもしたい。

もっと広いこの世界には、どんなものがあるのだろうかと考えるだけで面白い。

元の世界元の世に帰ることもできないので、ならばこちらこちらで思いっきり一生を過ごしたい。

もうしばらくこの町で過ごし、いつか旅に出ようと本気で考える。

そんな風に思考の海をぶかぶか浮かんでいた俺の意識はガタガタという音にサルベージされた。

音のしたほうを見ると、子供の手が梯子の上にかけられているのが見えた。

きつと好奇心旺盛なガキンチョが、興味本位で上ってきたのだろう。こちらの好奇心様は猫も殺さない程慈悲深いのだろうか？

まったくしょうがないなと腰を挙げ、こら危ないぞと口を開いた。が、その言葉を音として発することはできなかった。

うんしょんしょと屋根の上の上ってきた子供。

「うおー！たかーい！」

経験した事のない視点から見える町にはしゃぐその子の背中に、

禍々しい雰囲気を纏う骸骨の姿があったからだ。

なんだこいつはと息を呑む。

目が収まっていた部分にはただ深い空虚があった。体はズタズタのボロボロになった黒の布がかかっている。その周りに煙のように紫色のオーラが纏わりついていた。まるで、ゲームに出てくる死神の姿だ。

ヤバイ。こいつはヤバイ。何かは分からないが本能が告げていた。なぜこの子は気づかない。こんな奴が後ろにいるのに。

骸骨を背に置いて、その子は梯子が架けてある淵の逆側に向かって歩いていく。

その骸骨と俺の視線がぶつかった。いや、実際に奴がこちらを見ているのか、それ以前に何か見えているのかすら疑問だが。

だが、確かにそいつはこちらを見てニヤリと笑った。骸骨の表情なんて分かりはしないが、理屈とかそんな物抜きでそう感じた。

不安定な足場であることを気にせず、反射的に俺は子供に駆け寄る。やっぱり世界が遅くなる。が、銀黒狼ワイウルフの時のものとはまた別物の感覚。

ジリジリとしか縮まらない距離にイライラとしながらそれでも駆ける。ニヤニヤと笑うその骸骨に本能的に握り締めた拳をぶつける為。

だが、次の瞬間。

豪っ！と今までに無かった強風が俺とその子供を襲う。

その風でバランスを崩したその子が、ゆっくりと屋根の淵に仰け反っていく。

後退させた足が踏みしめるべき足場を失い、重心を崩していく。

間に合わない。その子の体は既に半分空中に投げ出されていた。

咄嗟に悪魔の腕を使い、服の端を掴む。

それを引き寄せて子供を抱きかかえるような格好になる。が、慣性の法則と追い風を受けた俺の体はそのまま空中へと飛び出した。

大丈夫だ。このくらいの高さなら、きちんと着地すれば問題ない。着地の為に、体を捻って回転させる。

だが、俺の視界が180度グルリと周り、上下が逆になった世界の中で、

もう一体の骸骨が俺の目に映った。

そいつを背負っていたのは、庭に出て居たミアさんだった。

一体なんなんだこいつは。もう訳が分からない。

骸骨が上を見上げる。それにつられて、俺も骸骨が見た方向、つまりミアさんの頭上を見る。

部屋の小さなベランダに飾られていた、重力エネルギーを従え、凶器と化した植木鉢が、彼女の頭蓋を叩き割らんと迫っていた。ま
ずい！

「ツツツツツタレがああああああ！」

咄嗟にポケットに突っ込んでいたハンマーを植木鉢目掛けてブン
投げる。

飛来する凶器が落下する凶器を殺し、その身を砕く。

その瞬間俺は、ミアさんの後ろに居た骸骨が一瞬で煙のように
消えたのを見た。

第10話 体へニクスキの要と書いて腰と読む。

まだ顔に残る熱を冷まそうと、ミリアママハティナは冷たいお茶を一口飲んで孤児院のキッチンにある椅子に腰をかけた。

隣では優しそうな笑みを浮かべたベックオーケルマンが、湯気の立つ紅茶を飲みながら座っている。

ミリアを散々からかった後、彼女の拳骨が頭上に落とされる前にパツと逃げていった子供達は、今は外で元気いっぱいに遊んでいた。

先ほどの子供達の言葉のせいか、さっきからミリアの頭に浮かぶのはユウマのことばかりだった。

確かに、と彼女は自分に前置きして、

「（彼は普通の冒険者と違って、私達受付の人にも誠意に接してくれるけれど……。でも彼が私をどう思っているのわからないし……。あれ？私は彼のことをどう思っているんだろう？）」

そこから思考がぐるぐるとループし、再び頭に熱が上るのを感じてコップに口をつけてお茶にブクブクと泡を作る。

「ミリア、君は彼のことが好きなのかい？」

ブハツつとお茶を吹きこぼしたのは、ベックのセリフに動揺したからではなく、息の吹き込み加減を間違えたからだと良く分からない言い訳を自分にして、ベックにまくし立てる。

「ち、違います！ユ、ユウマさんとは確かにギルドでよく会いますが、こ、恋人じゃありません！」

顔を真っ赤にして言っている時点でベックは彼女の気持ちに気づいており、同時に照れ隠しとはいえ全力で否定される彼をちよつと可哀そうに思うのだった。

「ふむ、私は彼としか言っていないんだが？それに恋人とも」

茶化されて、先生まで！と両手を振り回しながらベックに噛み付くミリアをどうどうとなだめる。

ベックは安心していた。

孤児院に居た頃の彼女は当初、引つ込み思案で周りにうまく溶け込めずに居たのだ。

暫く過ごしていくうちに他の孤児たちとも仲良くなって、笑顔を見せるようになっていったが、人見知りする性格はあまり直っては居なかった。

故に、彼女が孤児院を出て行く年齢になり、ギルドで働くと言ったときはひどく心配したものだった。

人見知りする彼女が果たしてうまく働いていけるのか、荒れくれ共の多い職場でやっていけるのか。

だが、今日の彼女の表情を見て、杞憂であったと安心し、同時に巣立つ雛鳥を見送る母鳥のような寂しさも感じているベックだった。

「はあ、もういいですよ……。ユウマさんにお茶、持っていてあげますね」

そう言っただけで席を立ち、慣れた手つきで紅茶を作っていく。直ぐに良い香りが辺りに漂う。

外のほうではカンカンとリズムよく釘を打つ音が聞こえてくる。

しかし彼はすごい。前半の仕事だけでも、息が切れておかしくないのに、涼しい顔してすぐに次の依頼を行えるなんてどんな体力をしているのだろうか、彼女は思う。

だが、彼はそれを決して驕らない。ギルドでチンピラ連中に絡まれたときでさえ、簡単に退けられただろうに彼はしなかった。されていても彼女の立場上の問題で、彼にペナルティを与えなければならなくなるが。

ああ、だからなんでさつきから、と思いつつながら思考を中断し、湯気立つ紅茶の乗ったお盆を持って外に出る。

「あら？」

庭で遊んでいた子供達の姿が無かった。裏のほうから声が聞こえるので、そちらにいるようだ。

案の定子供達は裏庭のほうにいたのだが、全員走り回ったりせず、

首を上に向けている。

彼女も彼らの視線の先に目を向けると、

「!?!」

一人の子供がユウマが屋根に上るために架けたはしごを上っていた。

「くら!!降りてきなさい!!」

「大丈夫だよお!!」

彼女の注意にも耳を貸さず、ついに屋根までたどり着いてしまう。子供達から歓声が上がった。

「やったー!!」「すげえ!!」「次、あたしが上る!!」

口々に叫ぶ子供達を怒鳴りつけ、慌てて三階に行く為に走り出す。

だが、庭のほうに出た瞬間突風が彼女を襲った。嫌な予感にとらわれて上に視線を向けると、

「あっ!!!!」

屋根に上った子供の体が半分屋根より外に出ているのが見えた。

落ちる!そう思った瞬間、ユウマが空中に飛び出し、一瞬現れた青白く光る何かで子供を引き寄せ、空中で抱きかかえるのを見た。

危ないと思ったがユウマは体をくるりと捻り、着地の姿勢に入ろうとしていた。

だが、落ちていくユウマが彼女の方を見た瞬間、彼は驚愕したように目を見開き、捻っていた体を無理やり元に戻す。

そして、

「ツツツツツタレがあああああああ！！」

上下逆さまの状態からこちらに向けてハンマーを投げてきた。

一瞬のでき事で体が反応しない。避けるよりもまず、何故？という疑問詞が真っ先に浮かんだ。

飛来するハンマーはしかしミアアではなく、ミアアの頭上へと飛んでいく。

そして、パカッ！と言う音に少し遅れて、バラバラと上から土が降ってきた。

だが、そんな事など気にならなかった。世界がゆっくりと動いていく。

二度姿勢を空中で立て直した彼は、腹を空に向けて落ちていく。

そして、

グシヤリ、とまるで肉を硬い地面に叩きつけたようなおぞましい音が、彼女の鼓膜を震わせた。

「あ……………」

ユウマによって衝撃を一切殺された子供は、何が起きたか分からずきよんとしている。

そして、その子を助けた彼はまったく動かない。

直後に響いたのは、

「きゃあああああああああ！！！！」

甲高い叫び声だった。

彼女の声にびくりと体を震わせたその子が、漠然と何か大変な事が起きたことを理解し、直ぐにその顔をぐしゃぐしゃに歪めて泣き出した。

彼女の叫び声を聞いて、子供達とベックさんが慌てて庭へとやってきた。

涙目になったユウマが飛び起きた。

その場に居た彼を除く全員がポカンとなる。

「ぐおおおおお！！！痛つてええ！！絶つっ対これアザになるって！！うぎいい！！！」

いや、普通アザじゃすまないだろうと全員が心の中で突っ込む。

ようやくシヨックから開放されたミアアが口を開く。

「あ、あの・・・大丈夫・・・なんですか？・・・」

「うん、全然大丈夫！ツじゃない！っけど大丈夫！っつか、ミアアさんこそ大丈夫！？」

セリフの途中でピクンと背中を仰け反らせるユウマ。子供達も目じりに涙が残ったまま呆然としている。

なぜ彼が自分を心配するのかが分からない彼女は、オロオロと何か言おうとするが、言葉が出てこない。

「いや、頭の上に植木鉢が落ちてきてたからさ。咄嗟にハンマー投げたけど無事だったのかなって」

見ると、さつき彼女が居たところには土と、赤茶色の破片が散らばっていた。四階に飾ってあった植木鉢が落ちてきたのだと判断した彼女は、もし彼があ瞬間ハンマーを投げていてくれなかったらどうなっていたかを想像し、ゾツとした。

同時に、あの一瞬でそんなことまで判断できた彼に驚く。

ユウマは彼女が無事であることを確認すると、自身が助けた子供のほうを向く。

腰をさすりつつ、この年で腰痛はねえよなと言いながら、ユウマは助けた子供に一步近づく。その途端、その子がビクリと体を強張らせた。

ゆっくりと上げられる右手を見た瞬間、怒られる！と思ったその子はぎゅっと目を硬く瞑る。

だが直後に頭に感じたのは、痛い拳骨ではなく、頭をなでる優しい感覚だった。

「大丈夫だったか？怪我してないか？」

そういう彼の顔は心底心配しているようで、自分が悪いのに悪くないと言われているようで。

「うっ……うええええええん！！！」

止まっていた涙が再び溢れ出し、ユウマに抱きついた。

よしよしとその子の頭を撫でて慰めながら怪我をしていないことを確認すると、

「うん、これなら大丈夫だな」

と言つて、

慰めていた子に拳骨を落とした。ガツンととても痛そうな音がなつた。

叩かれた子供は頭を抑えながら再び呆然とする。

ユウマはその子の肩に手を置き、

「来るなど言つただろうが！！ミリアさんの注意を破つて！みんなに心配かけさせて！今回は良かったけど、何かあってからじゃ遅いんだ！」

と、怒鳴りつけた。

慰めたり、急に怒ったりするユウマに困惑する子供達。それでもユウマは彼らを叱る。

ベックは、彼が本気で怒っていることを感じ取った。

自身の傷のことではなく、みんなに心配をかけたこと、言いつけを守らなかったことに対して。

子供達もそれが分かり、皆俯いて泣いていた。これでいい。泣いているミリアと子供達に反して、ベックは笑みを深くした。

叱り終えたところで、ユウマは再び一人一人の頭を撫でていく。怒鳴っていたときとは違う、やさしい笑みを浮かべながら。

あうう、痛い。心と体の両方が。したたかに打ち付けた腰は、アザなどは出来ていないようだ。それでも痛い。いや、普通に考えて4階から、しかも背中から落ちればまず死ぬ。痛いのは生きてる証拠。うん、十分分かったからそろそろ消えてよ。

そして、怒鳴ったせいでいまだにグジュグジュと泣いている子供達を見て、怒りすぎたかと焦る。誰かがしなけりゃならない事なのに何この罪悪感。もう止めて。俺のHPはゼロだ。

慰める為に、できるだけ無害そうな表情を作って、彼らをなだめるが、嗚咽や鼻を吸ったりする音は止まなかった。うう、気まずい。ベックさん。あんた外からニコニコ笑ってないで子供達叱るなり慰めるなりしなさいな。本来アンタの役目だろ。つかあんた院長でしようが。

まあ、子供達も反省したようだし良かっただろう。

黄緑色のワンピースを土で汚しているミアさんも目を涙でいっぱいにして俺に頭を下げる。うん、お礼いいから泣かないでなんだ

か俺がとっても悪いことしているみたいで精神衛生上とってもよろしくないのですがぁー!?

「本当に、あの子と、ミリアを助けてくれてありがとうございます」

そう言ってベックさんも頭を下げる。あれ、デジャブ？似たような光景をつい最近見たような。

・・・ん？デジャブ？

脳裏に子供とミリアさんの背に憑いていたあの骸骨と、ギルドで別れたエリシアの姿が重なる。

再び心臓が早鐘のようになる。何か忘れている。些細な、しかしとても大事な何かを。

「・・・・・・・・ツ!!!!」

思い出した。ギルドを出たときに見えたあれを。

ベックさんに慌てて言った。

「ベックさん。俺の剣を取ってきてください。今すぐに」

驚いた顔をしたベックさんだが、何かただ事では無いと感じ取ったのか、すぐにわかりましたと言って院内へと消えた。

次にミリアさんの方に向き直る。ビクリとされたが構ってられない。

「ミリアさん。狂黒狼クレイジーウルフがいる森って何処にある？」

「へ、え？な、何で狂黒狼クレイジーウルフの生息場所を？」

「いいから！」

思わず怒鳴りつけるように言っしまいました、またミリアさんが怯える。自分で思っているより焦っているようだ。

「えと、狂黒狼クレイジーウルフは銀黒狼が住んでいる森の更に奥深くに居るはずだ」

ちょうど剣をベックさんが持ってきた。今朝行った能力の確認のため、刃が潰れてなまくら同然だったが何も無いよりはマシだ。

さあ、場所は分かった。剣もある。あと準備するものはなんだ。考える俺。

「・・・ミリアさん、この近くで回復薬を扱っている店に案内してくれ」

回復薬。それはこちらの世界では一般的に使用される薬の呼称であり、元の世界では空想の中だけの代物で、実在したら医療界に力ルチャーシヨックを与えかねない薬。

傷口に塗りつけたり、直接摂取して体の傷を癒す薬だ。切り傷、骨折、火傷凍傷何でもOKな万能薬。赤色、青色、緑色の三種があり、後者ほど効果が大きく値段も高い。

現在の俺の所持金は、悲しいことに財布ひとつに収まりきる程度

なのだが、今回はそれが良かった。

「えっと、最初にここを出て左に」

「ゴメン、時間が無いんだ！」

「え、ちょ」

ミリアさんの手を引いて走り出す。彼女には悪いが、道順を教えてもらおうよりこちらのほうがいい。

彼女の指示を受けながら、俺は町を駆けた。いくつもの通りを、角を、通り過ぎていく。

すぐに目的の店へとたどり着いた。木造の雑貨屋だ。回復薬以外にも一般市民から冒険者が必要とするものまで取り揃えている店だ。息を切らしているミリアさんを申し訳なく思いつつも、その店のドアをぶち壊さんばかりの勢いで開き、カウンターに座っていた驚いた顔をしたおっさんに詰め寄る。

「おっさん、この店にある一番効果の高い回復薬を売ってくれ」

「う、ウチにあるのは緑の回復薬が一番だが・・・」

「いくらっ？」

「ぎ、銀貨3枚だ。だけど買えるのか？銀貨3枚なんて簡単に出售する金額じゃ」

おっさんの言葉を皆まで聞く前に、カウンターに銀貨を2枚と銅貨を50枚叩きつけるようにカウンターに出す。

「なんだ、アンタ。迷う事無くこれだけの金を出すなんて・・・」

「時間が無い。俺の恩人が危険なんだ」

おっさんは、真剣に訴える俺の顔をしばらく見つめると、神妙な顔をして、

「ちょっと待ってな」

と言ってカウンターの奥へと引っ込んでいった。

遅れてゼイゼイと息をするミアさんが店内に入ってきた。

「はあ、はあ、ユウマ、さん、何を、そんなに、はあ」

「・・・エリシアが危ないかもしれない」

ギルドを出る為に席を立ったときに見た、エリシアの肩。

そこに、ミアさんや子供の後ろにいたあの骸骨の手らしきものが見えていた。

あの骸骨を見た直後、あのヤンチャ坊主は風に煽られ屋根から落ち、ミリアさんの頭上には植木鉢が降ってきた。

どちらか俺が気づいていなかったら、良くて大怪我、最悪死んでいたであろう出来事だった。

つまり、あの骸骨は恐らく近々死ぬ人間に現れるのだ。

まったく本当に死神かよ。

エリシアの肩に見えたものが、ただの俺の気のせいであればいいが、思い出すほど記憶の中の彼女の肩に添えられていた骨の手の形がクリアになっていく。

子供とミリアさんの時は、見えた直後に死に直結する事が起きていたので既に手遅れかもしれない。だが、あのときは骸骨の全身が見えた。対して、エリシアの方は手しか見えていなかった。そこに僅かな希望があると信じたい。

しかし、考えてみれば砂蟲戦サンドワームの際、あの若奥様とその旦那にあの骸骨の姿は見えなかった。あれはどう考えても絶体絶命の状況だったろうに。

何か法則があるのかもしれないが、今はどうでもいい。とにかく彼女が危険である可能性がある以上、彼女の元へ行かなければなら

ない。

痺れを切らしかけた頃に、おっさんがカウンターの置くから現われた。

「大分奥に仕舞ってたんで探すのに手こずっちゃった」

ほら、といっておっさんが投げた金色の液体が入っている小さなピンをキャッチする。

「そいつは『秘薬』^{エクリサー}。死んでなきゃどんな傷でも治るってのが売り文句の薬だ。実際のどの程度の傷まで大丈夫なのかは知らねえけどよ・・・坊主、それ持っていきな」

「ありがたいが、俺には金が」

「金はいいから持っていけ。金は命と換えられねえだろうが。そのかわり、絶対そいつでオマエさんの恩人、助けるよ」

「・・・ありがとう」

おっさんの好意に甘んじることにする。これがいくらするかとは分からないが、いつかちゃんと働いて返さなきゃ。

店を出るとき、おっさんがニヒルな笑みを浮かべてサムズアップしていたのを見て、あれって異世界イナでも同じなんだと、そんなことを考えた。

第10話 体へニクスキの要と書いて腰と読む。(後書き)

一個目のフラグ建築です。

あと、いくつか伏線を置いたのですが、後で読み返してみると、本当に伏線になっているのか非常に不安です。

もっと文章力がほしい・・・orz

第11話 初心忘れるべからず

8畳ほどの広さの宿屋の一室。入り口から見て右端にベッドが備え付けられ、中央には来客用の小さな木のテーブルと椅子がある。明かりを取り込む窓から入り込んできた風が、流麗な装飾が施されたカーテンを揺らしていた。

周辺よりワンランク上の宿のこの部屋で、エリシア・アリルはモンスターとの戦闘の為に準備をしていた。

動きやすさを重視した服と皮鎧を着込み、弾力のあるベッドに沈んでいた二振りの細い剣を差す。銀色の鞘に納まる剣を腰に、もう一方の緋色の鞘の剣を背中に。

彼女は細剣レイピラの二刀流使いだ。男性には及ばない攻撃力を手数で補い、重い鎧や盾を持たないことで、防御力を機動力でカバーする。それらが彼女をBランクにたらしめる要因だ。

さらに腰についている複数のポーチに、赤色や青色の液体が入った薬ビンや、袋に包まれた小さなブロック状の携帯食料や干し肉、皮製の水筒を詰め込む。

人間は緊張状態の下では、生理現象の殆どを感じにくくなる。その為、敵を探している間に知らぬ間に空腹になり、いざと言うとき動けなくなる事もある。故にどんな近場であっても、食料の携行は忘れてはならないのだ。

宿を出て向かう先は町の門。門番に門を空けてもらい、町の外へ。

目的地は銀色狼フォーウルフの住む森だ。奴らは、集団で襲ってくるのは厄介だが、彼女の障害にはなりえない。

だが、今回の目的であるモンスター、クレイジーウルフ狂黒狼は生半可な敵ではない。

全長は4mほどもありながらも、俊敏。その牙と爪は剣のように鋭く、持ち前の顎の力と合わせれば鉄の鎧すら貫く。

また、クレイジーウルフ狂黒狼の生息域は森の奥地なので日が照っていても常に暗い。その為、漆黒の体毛が保護色となり発見も困難だ。周囲を警戒しなければ此方が先に見つかり、逆に狩られることもある。

しばらく歩き、森にたどり着いた。灰色の雲が青空を塗りつぶし始め、森の入り口のほうも僅かに薄暗い。

厄介だなとは思ったが、依頼を受けてから大分日数が経っているので、まだ目立つ被害は出ていないものの早急に倒したほうがいいと判断し、森の奥へと歩みを進める。

ところどころ木の根が地表に顔を出して足場は悪かったが、問題にはならなかった。周辺にもモンスターの気配は無い。

奥へ、奥へと進むうちに、エリシアは僅かに違和感を感じた。

モンスターの数が少なすぎるのだ。

モンスターは人に害するものばかりとは限らない。無害な、あるいは人間に利益をもたらすモンスターも存在する。

例えば馬ほどの大きさの亀、甲馬獣ラティスなどは草食のおとなしいモンスターで、人間に飼われて馬車を引いたりする。町の中でも時折荷車を引つ張っている姿が見られる。

竜ドラゴンはまず人前に現れる事が稀だが、もし会ったとしても基本的に此方が何か手を出さなければ無害なモンスターである。しかし彼の怒りに触れてしまえば、国を一つ潰してもお釣りが来るほど暴れ、怒り狂う。過去に竜の力を持ってして焦土とならなかった国は無かった。

また、妖精ピクシーなどの種族は比較的に人間に対して友好的だ。森で迷った人間を森の外へ案内してくれたりもする。(これは、彼らの領内で死なれると困る為に行うという説もある)

しかし現在、彼女の周りにはそのようなモンスターも、フランクEランククラスのモンスターすら居ない。

何かおかしいなとは思ったものの、逆に妨害が無いからいいかと思っ直して索敵を続ける。

だが、しばらく森の中を歩き回っても狂黒狼クレイジーウルフの姿は見つからなかった。

さらに彼女の鎧や木々を水滴が打ち始めた。

「これはさすがにダメか・・・」

そう呟き、ポーチから干し肉を一欠けら取り出し口に放り込む。口内にあふれ出す唾液と共に咀嚼し、飲み込んだ。

これで戻るときにモンスターに襲われても大丈夫だろう。少し肩を落として、森の出口に向かおうと思った時、

森の奥に、闇に溶け込む巨体を見つけた。

『それ』はまだ此方に気づいていないようで、動く気配がない。好機だ

高ぶる気持ちを押さえつけ、右手を顔の前に掲げ、体の中を流れる魔力を自身のイメージと混ぜ合わせる。

「火よ、矢と成して、汝を解き放たん！」

彼女の右手の先に紅く輝く魔方陣が現れる。そこから無数の矢の形をした炎が飛び出し、降り注ぐ水滴を一瞬で蒸発させながら闇の

中の巨体に向かって飛んでいく。

炎の光に照らされ、クレイジーウルフ狂黒狼の姿が一瞬だけ浮かび上がり、直後に炎の矢が爆発を起こした。

膨張した空気が強風となって木々を揺らし、彼女の頬を叩いた。

エリシアはBランクの冒険者だ。戦闘に関してはプロと云っている。自身の攻撃が敵に当たったのか、どの程度のダメージを負わせたのか、見えなくても手応えは感じる。

避けられたと判断した彼女は、すぐに背中に差した剣を右手で、腰に差した剣を左手で抜く。そして、左手の剣を胸の前に、右手の剣を前において半身に構える。

右手に持つ剣の刀身は、高熱を放っているかのように赤く輝いていた。

炎剣『アータル』　それがその剣の名だ。

この世界には特別な力が宿る武具、『霊装』がある。

基本的には魔術師が武器に『ルーン』と呼ばれる魔法的な力を持つ文字を刻むことで創られる。

しかし、ただ単に武器を削って武器を掘り込む訳ではない。これ

もまた世界に願いを届けるプロセスを通して行われる。

一般的な制作方法は、まずその武器に付加したい属性に沿った魔方陣を描き、その武器を魔方陣の中心に置く。そして、世界にその武器に力を与えることを願い、魔力を捧げることで完成する。

魔力が供物としての「料理」と例えるなら、魔方陣はさしずめ料理を引き立てる「器」といったところだ。

しかし魔方陣は非常に脆く、魔力の量が適切でなければいとも簡単に壊れる。そして、壊れた「器」からこぼれ出る魔力は勝手に暴れまわり、術者を殺してしまうこともある。武器への魔力の付加というのは強力ではあるが、その力は蜘蛛の糸で綱渡りするような繊細なバランスの上で成り立っているのだ。

故に霊装を創れるほど魔力の扱いに長けた魔術師は少なく、したがって霊装の数もまた少ない。

クレイジーウルフ
狂黒狼が、彼女の右から飛び出してきた。

エリシアはバックステップでそれをかわし、右手に握る『アータル』に魔力を捧げて剣を振るう。

炎の斬撃が切っ先から飛び出し、その巨体を焼き切ろうと迫る。
クレイジーウルフ
が、狂黒狼は初撃の勢いを緩めず突き進み、これを回避する。

地面に当たった炎の刃が爆発を起こし、地面を焦がした。今や大量に大地に降り注ぎ始めた雨が、すぐさま焦げた大地を冷やし始め

る。

魔力を込めることで魔法を放つ霊装は、少なくともはあるが存在する。しかし、彼女の持つ『アータル』のように、強力な爆発を起こすほどの魔法を発動させられるものは無い。

彼女の持つ『アータル』は、普通の霊装とは一線を画した、というよりも格の違いすぎるものだった。

『アータル』には、霊装に必ず存在する『ルーン』が何処にも刻まれていない。その必要が無い。

なぜなら、『アータル』は世界そのものでも言うべき『精霊』の力が宿っているからだ。

魔法は言霊思想に則って成り立ち、世界がその言葉に込められた魂の願いを事情として具現化する。

しかし世界という一つだけのシステムで、あらゆる所から届くあらゆる願いを処理するのは、無理ではないが非効率的だ。

そのために世界は、『精霊』という自身のシステムを縮小し、自我を持たせたもの、ある一種類のものに対する処理に特化した存在を創り出した。

パソコンで言えば並列処理だ。『計算専門』『画像処理専門』『音楽処理専門』といった具合に。

火に関する願いなら火の精霊が、水に関する願いなら水の精霊が、その願いを具現化させる。

魔法を生み出す力そのものが宿った武器の力の強さなど、言うまでも無い。が、もちろんそんな強力な武器が誰でも扱えるわけではない。

精霊自身が力を貸してくれるか、力でねじ伏せるかすれば可能だが、そんな人間はほんの一握りだけだ。

彼女の持つ霊装、炎剣『アータル』にはその名の通り、火の精霊が宿っている。しかし、火の精霊は世界に一体しか居ないというわけでは無いので、一体が霊装に宿ったとしても、世界は問題なく願いを処理していくのだ。

「ふっ！」

彼女は攻撃が外れたと分かったや否や、両手の剣を横に広げて狂^{クレ}黒狼に肉薄する。
イジウルラ

体重を乗せた右の袈裟斬りを放ち、続く左の剣を横に一闪。さらに右と連続で剣を振るう。

しかし、体毛の一本一本が丈夫で刃が通らない。『アータル』による攻撃のみが毛を僅かに焼ききり、浅い傷を作る。

さらに攻撃を加えようとしたエリシアはしかし、嫌な予感に襲われ横に飛ぶ。直後に片足を軸にした狂黒狼クレイジーウルフの体が回転する。ぶん殴られた空気が木々を薙ぎ、回転を止める足が地面に曲線を描いた。

「グルルル！」

強烈な殺意のこもった眼が彼女を射抜くが、この程度で怯みはしない。

「（なかなか厄介な相手だな・・・）」

攻撃はかわせる程度の速度だが、その攻撃は例外なく重い。長期戦になれば不利になるのは目に見えている。

短期決戦に持ち込みたいが、此方の攻撃は殆ど通じない。どうにか隙を作り出し、そこに自分の最大級の魔法を打ち込むしかない。

エリシアが戦闘方法を組みなおし、両手の剣をぐっと握り締める。

狂黒狼クレイジーウルフが叫び声と共に襲い掛かってきた。右前足を彼女に目掛けて振るう。

エリシアは再び後ろに跳んで避ける。攻撃対象を失った狂黒狼クレイジーウルフの腕は、轟音と共に地面にクレータを形成した。

続く左前足の攻撃を今度は横に飛んでかわし、伸びきった腕と体を素早く何度も両手の剣で斬る。

多少は効いたのか、或いはただ煩わしかったのか、狂黒狼クレイジーウルフはエリシアから一旦距離をとり、改めて攻撃を再開する。

彼女は、連続で襲ってくる攻撃を捌き、かわし、僅かな隙を縫って剣撃をその漆黒の体に叩き込む。

だがやはり大きなダメージにはならない。

しかし、同じ場所に何度も攻撃を加え続ければ、多少なりとも効くはずだ。塵も積もれば山となる。

エリシアは再びクレイジーウルフ狂黒狼との距離を詰めようと一歩踏み出す。

その時、クレイジーウルフ狂黒狼が後ろに跳び、彼女と大きく距離をとった。

おかしい。あれほど距離をとればあちらの攻撃は一つも当たらない。むしろこちらは魔法による遠距離攻撃ができるので、相手にとって是不利だ。

直後に一つの可能性が頭に浮かぶ。

「（っ！まさか周辺の木を吹き飛ばして攻撃する気か！）」

しかし、エリシアの予測に反し、クレイジーウルフ狂黒狼はただ前足を引っかくように思い切り振っただけだった。

完全に射程外の攻撃。エリシアがいぶかしんだ直後に、

バシツと音をたて、右腕の皮膚が裂けた。

「なっ！」

驚愕を隠せないエリシア。血の噴出に遅れて、彼女の右にたっていた木がミシミシと音を立てながら、大地に横たわる。

その幹には、まるで巨大な爪で引掻かれた様な跡があった。

何が起きたのか判断できていないエリシアに向けて、クレイジーウルフ狂黒狼が再び何も無い空間を引っ掻く。

直後に彼女を襲う衝撃。上半身に焼けるような痛みが走る。体が派手に吹き飛ばされ、地面をごろごろと転がる。

「ぐっっ！」

木にぶつかってようやく止まった。見ると、彼女の皮の胸当ては斜めに切り裂かれていた。その下の皮膚までも。

幸い、攻撃を喰らう瞬間に反射的に後ろに跳び、衝撃を半減させたため、傷はそう深くは無い。

だがこの雨のせい、血はとめどなく体の外へと逃げていく。

いよいよまず状況だ。こちらの技は効かないが、あちらの攻撃は効くという大変不利な状況になった。さらに流れ出る血を止めなければ出血多量に陥る。

今や、狩る側と狩られる側の立場は逆転したといっている。

自らの不利を悟り、その場から離脱する為に、思考を切り替える。

だが、そうはさせまいと、再びクレイジーウルフ狂黒狼が爪を振り下ろす。

発生する不可視の攻撃。だが、

「ッ！！」

彼女は紙一重でそれを避けた。

降り注ぐ雨が、その攻撃により動かされ、現れた僅かなズレが攻撃を認知させてくれた。

雨を切り裂いて飛ぶ攻撃は、進んだ先にあつた岩を深く抉つた。

思ったより射程が長い。背中を見せたら終わりだ。より一層逃亡が難しくなった。

その時だった。

《弱キ人間ヨ》

彼女とクレイジーウルフ狂黒狼しかいないはずの空間に、狂気を孕んだくぐもつた声が響いた。

突如聞こえたその声に、彼女は耳を疑った。

その声は、どう聞いても森の影に溶け込むクレイジーウルフ狂黒狼から発せられたものだったからだ。

轟く咆哮。

それに呼応するかのように、クレイジーウルフ狂黒狼の周りに突風が吹いた。

《ソノ血、ソノ肉、ソノ魂、全テ俺ニ差シ出スガイイ!》

雨は更にその勢いを増していく。

第12話 ストップ環境破壊(前書き)

PV70000、ユニーク100000アクセス突破。

……真剣に頬をつねっている作者がここにいます。

本当に唾然としました。

皆様、本当にありがとうございます。

何とかこれからも頑張っていけますのでよろしくお願いします。

……！おのれ課題……！

第12話 ストップ環境破壊

*

視界は雨のせいで非常に悪い。地平線に近づく太陽を、墨汁を垂らしたような雲が覆い、暗い森からさらに光を奪っている。

吐く息が荒い。油断すると剣が手のひらから滑り落ちそうになる。

汗と雨を吸った服や髪が、彼女の動きの邪魔をしている。

ポーチに入れてきた回復薬はとっくになくなっていった。

「はあ、はあ、げほっげほっ！」

エリシアの体はすでに傷だらけだ。皮膚は裂け、服の下には紫色になったアザがいくつもあるはずだ。動くだけで痛みが体を駆け巡り、しかしそれもだんだんと麻痺しだして何も感じなくなってきた。

完全に立場が逆転した戦場で、クレイジーウルフ 狂黒狼が吼えながら前足を振るう。

不可視の斬撃が雨のカーテンを切り裂きながらエリシアに迫る。

彼女は横に飛んで回避するが、疲れた体は動作を一瞬遅らせ、結果彼女の皮膚がまた裂けた。

にじみ出る血はすぐに雨に洗い出される。

もはや受身を取ることもできず、転んだように地面に倒れこむ。

それでも彼女は立ち上がった。

逃げたところで狼の速さに勝てるはずはない。勝つしか活路はないのだ。

そんな彼女の気持ちを嘲るようにクレイジーウルフ狂黒狼がその口から苛立ち混じりの言葉を発する。

《イイ加減諦メロ人間！大人シク我ニ喰ワレロ！》

同時に、その巨大な漆黒の体が、彼女に飛び掛ってきた。

何とか逃げるも、足が震えて転びそうだった。

泥だらけになった事も気にせずに彼女は剣を構える。

クレイジーウルフ狂黒狼は狂った笑い声を出しながら、エリシアに何度も襲い掛かる。完全にはかわしきれない。漆黒の腕が振るわれていくたびに、至る所に切り傷ができていく。

そして、

「ッ！？」

突然襲う無重力感。後退していて、足元にまで注意が行かず、地面に張り出した木の根に引っかかったのだ。

絶命の寸前に働く、人間の生存本能。それが脳に高速処理をさせ、

あらゆるものをゆっくりとしたスピードで認識させる。

私はここで死ぬのか？ぼんやりと自問自答する。

否！まだ死ぬわけにはいかない！

残った力を振り絞り、地面に倒れた勢いを利用し後転。地面に手がついた瞬間に腕に力をこめ、体を浮かす。

クレイジーウルフ 狂黒狼の攻撃ははずれ、泥を跳ね上げる。

イジーウルフ 腕力でジャンプした彼女は、背後にあった木の幹を踏み台に、クレ 狂黒狼へと跳ぶ。

狙うのは目玉。どんな化け物であっても、そこなら攻撃が通るはずだ。

思わぬ反撃に、慌てたようにクレイジーウルフ 狂黒狼が後ろへと跳ぶ。

しかし、一步遅かった。

エリシアの右手にあった、炎剣『アータル』が、巨大な狼の目玉を焼き斬った。

《ギャアアアアアアアアアア！！！！！》

クレイジーウルフ
狂黒狼の絶叫が轟き、突風が吹き荒れた。

エリシアは追撃をしかけようとしたが、ベシヤリと泥の中に入った。込んだ彼女は、立ち上がるのも苦労するほど疲弊していた。

《ヨクモ、我が目ヲオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！》

直後に、鈍器で思い切り殴られたような衝撃が彼女を襲った。

回転攻撃を食らった彼女の体は、地面を滑るように吹き飛び、何度も地面を転がった。勢いが止まっていたのは、エリシアが狂黒狼から20メートルほど離れた所だった。

「ぐっ！！！！！！！！げっ！！ぎっ、ひっ！！」

胃の中のものが逆流しそうになり、しかしそれすらも押し留められる。肺に溜まっていた空気はひゅーひゅーと細い呼吸音とともに勝手に吐き出されていく。自分の意思では、空気を吐くことも吸うこともできない。

《アアアアアアアアアア！！！！》

クレイジーウルフ
狂黒狼がその顎をバカリと大きく開く。剣のような牙が並んだ口

内が見え、その奥に、何か得体の知れない塊が渦巻いていた。

狂黒狼クレイジーウルフが纏う突風が一層強くなった瞬間、

ゴッ！という音ともに、狼の口から風の吐息フレスが放たれた。

真横に傾けた竜巻のようなそれは、あらゆるものを巻き込みながら森を貫いていった。

片目を潰されたせいなのか、狙いが僅かに外れ、エリシアは風の吐息フレスにかすっただけだった。

それでも彼女の体はボロクズのように吹き飛ばされる。

悲鳴と怒声の混じったような叫びが響く。狂ったように振り回される狂黒狼の腕からいくつもの風の刃が、エリシア目掛けて飛んでいく。

それらも全て掠るだけ。

これでは逆になぶり殺しだ。

彼女の体は己を傷つけるいくつもの刃に身を委ねるように何度も

吹き飛ばされた。

あたりの木々や泥も削られ、切り裂かれ、粉碎されていく。多くの生き物が住処を失う事になった。

クレイジーウルフ
狂黒狼の攻撃が止んだとき、エリシアは木に寄りかかるようにしてその身を投げ出していた。

指の一本すら動かない。力を込めてみようにも、その本が絶たれてしまっているようだ。まるで、糸の切れた操り人形マリオネットのように。

右足を常に金槌で叩かれているような感覚を覚え、そちらに目をやると、足はおかしな方向に曲がっていた。胸にも似たような感覚がある。恐らく肋骨も折れているのだろう。

霞む視界の中、クレイジーウルフ
狂黒狼がゆっくりとこちらに向かってきているのが分かった。

その瞳は怒りの色一色に染められていた。

もうどうしようもない。逃げ出そうにも、体が自分のものではないかのように動かないのだ。

彼女は笑みを浮かべる。それは自嘲の笑みだった。

結局、自分の慢心が招いた結果じゃないか。

雨が降り、視界も悪くなるというのに、焦りと油断から戦闘を行った。どこかで敵じゃないと思っていた。

その結果がこれだ。自身の責務すら果たせず、今まさに死に生かすとしてる。

そもそも、エリシアはこの町とは違う町からきた冒険者だった。

約一ヶ月前に、彼女が拠点とする町のギルドにあった依頼があった。

内容はクレイジーウルフ狂黒狼の討伐。その依頼用紙は、だいぶ長い事依頼掲示板に貼られていた。

なぜ誰もこの依頼を受理しなかったといえ、理由は簡単。報酬が安すぎたのだ。

Bランク程のモンスターの討伐依頼となると、一般的な報酬は金貨3、4枚といったところだ。それに対し、この依頼の報酬は金貨たった1枚。

あまりに割が合わない。だが、彼女はその依頼を受けた。

私がやっていることは所詮偽善だ。この依頼を受けた理由など、挙げようと思えばいくらでも挙げられる。僅かな金を出してでも何とかしたいと思った依頼者の為、そこに住む何の罪も無い人々の為、ギルドの為。

しかし、結局は自己満足。

この依頼を受けている間にも、もっと苦しめられている人たちがいる。この依頼を解決したところで、全体から見れば些細な事に過ぎない。

大量の米から、ほんの数粒の腐ったモノを取り除いていくようなものだ。

エリシアが命を救ったユウマの顔が頭に浮かぶ。

彼を助けた事もそうだ。モンスターだと疑った事に対する罪滅ぼし。

結局は自分のためではない。

何処までも、何処までも、残酷で身勝手な人間なのだ、私は。

クレイジーウルフ
狂黒狼が、その巨大な口を開いて、彼女めがけて飛び掛る。

人間など簡単に噛み碎けるであろう威力をもった一撃に、彼女は目を逸らそうとはしなかった。

自分の命を絶とうとするものから、自らのプライドに賭けて、決して逃げないと覚悟を決めて。せめて最後は立派な心で在ろうと。

その結果として、彼女は見る事ができた。

クレイジーウルフ
飛び掛ってきた狂黒狼が、右方から飛んできた何かによって吹き飛ばされたという現実を。

デビルプリンガー
悪魔の腕で掴んで投げた岩は、クレイジーウルフ狂黒狼のわき腹にヒットし、そのまま吹き飛んでいった。

まさに間一髪だった。

町を出る頃には、小雨が豪雨になっており、俺の服はびしょびしょになった。

それを無視し、森を駆け抜け、あの骸骨の姿を目印に、エリシアを探した。

視界は雨のせいですこぶる悪く、地面はぬかるんでるわ、木の根が邪魔だわで、何度か転んで泥まみれになってしまった。

しかも、かなり当てずっぽう、というか勘で突き進んでいたの、何度か森の入り口に戻る事もあった。

そのときのおせり具合といたら無い。「後10分です」といわれた段階で、テスト用紙が真っ白な状況にも勝る。いや失礼、人命とテスト用紙を天秤に乗せるべきではなかった。

そして、息を切らしながら走っていると、遠くから木々がなぎ倒される音が聞こえ、パプロフの犬よろしく反応してそちらに向かったところ、全身を露にした骸骨を背負ったエリシアと、今まさに飛び掛らんとするクレイジーウルフ狂黒狼を発見したのだ。

その後は、最初の通り、すぐ近くにあった何かをデビルプリンガー悪魔の腕で引つ

つかんで、クレイジーウルフ 狂黒狼目掛けて投げた。投げた後に岩だと気づいた事から、そのときの切迫した状況を分かって頂きたい。

木々ごと吹き飛ばしていったため、すぐに動き出す事はないだろう。

すぐさまエリシアのもとへと駆け寄る。

「ユ、ユウマ……どうしてここに？……」

驚愕に目を見開くエリシアは、泥だらけの傷だらけで酷い有様だった。雨のせいで血が流れっぱなしだったのか、顔色も悪い。右足もおかしな方向に曲がっている。

「聞きたい事はいろいろあるだろうし、こちらもいろいろ聞きたい事とか言いたい事とかあるけど、とりあえず全部後回しな」

再び口を開こうとするエリシアをまくし立てて、ポーチから『秘薬』リサーを引っ張り出そうとする。

が、直後に復活したクレイジーウルフ 狂黒狼がこちらに突っ込んでくるのを視界の隅に確認した。

すぐにそちらに向き直り、両腕をクロスさせてガードする。が、やつはデカイクセに速かった。体重とスピードの乗った一撃に耐え切れずに、木々を折りながら吹き飛ばされる。あれ？今のポキッて音は何となく自分の腰から聞こえたような。

とりあえず色々は無視して起き上がる。結構な距離を吹き飛ばされたようで、一人と一匹の姿は見えなかった。しかし、皮肉にも死

を呼ぶあの骸骨だけははつきり見えていた。

自分の体で折った木の幹を手で直接掴み、そちらに目掛けて跳ぶ。
クレイジーウルフ
狂黒狼の姿を確認した瞬間、自分の速度に乗せた木を、ミサイルの
ように放った。再び吹き飛ぶ黒毛玉。ざまあ。

《我ノ邪魔ヲスルナアアアアアアアアアアアア！！》

おおこいつ喋れたのかさすが異世界とか考えている間に、
ファンタジー
狂黒狼
は追撃してくる。

吹き飛ばすと色んなものを投げつけられると理解したのか、攻撃
方法を変えて、その鋭そうな爪で切り裂こうとしてくる。

エリシアの周りにあった倒木を、槍や鉾のように扱いながら、そ
の攻撃を或いは受け止め、或いはいなす。

エリシアが狙われたりするといけないので、彼女からつかず離れ
ずな位置取りで戦う。

しかし、どんな戦いしてたのよエリシアさん。環境破壊促進し
ぎでしょ。

いや、状況から省みるにこれをやったのは目の前の大きなワンチ
やんか。

……あれ？でもこいつの爪だけで、こんなに倒木を生産
できるんだらうか？

疑問に思った直後に、
クレイジーウルフ
狂黒狼が完全な攻撃範囲外の位置から爪を

振るい、その軌跡から飛び出したかのように、雨を切り裂く斬撃が襲い掛かってきた。

ゾツとして横に避けると、後ろにあった木が抉り切られた。なるほど、ゲームにありがちな真空刃と言ったところか。

だが雨のお陰で目視できるので、難なく避ける。そして、こちらからも石やら泥やら木やらを投げて、反撃する。

幾度かの攻防の後、クレイジーウルフ狂黒狼は俺には勝てないと思ったのか、一声悔しそうな遠吠えをあげると、身を翻して森の奥へと消えていった。

ホツとして、再びエリシアのもとへ。今度はポーチからあらかじめ『エクシサー秘薬』を出しておく。

「ほら。これ飲んで」

「な！これは『エクシサー秘薬』じゃ

」

「はいはい、つべこべ言わずに飲む」

半ば無理やり飲ませる事に。と言っても口をこじ開けて注ぎ込んだりしたのではなく、握りこませて離さないように彼女の手を包みただけだ。

空になったピンを投げ捨てた数秒後に、傷口が塞がっていき、所々にあった痣も消えた。もとの世界の医者あちひがみたらボタンキューするなこれ。

「………すまない。ありがとう」

体を木に寄りかからせたまま、エリシアが言った。どうやら体力までは回復しないようだ。血をいっばい出していたからな。でもレバー食えば大丈夫さ。貧血にお悩みの方はぜひ鉄分の多い食べ物を。

彼女の背後にいた骸骨もいつの間にもやら消えていた。とりあえず、これで大丈夫だろう。足はまだ曲がったままだが、病院に行つて治療してもらえば問題ないだろう。とにかくこれで一件落着。そう思った。

だが、そんなに甘くなかった。

まるで俺をあざ笑うかのように再び、それも一瞬で先ほどの骸骨が彼女の背後に姿を表したのだ。

第12話 ストップ環境破壊（後書き）

第1〜3くらいまで手直ししようかな〜とか考えてみたりしています。

第13話 不意打ちも立派な戦術（前書き）

今回は短めになってしまいました；

実は部活動で右手を怪我してしまい、非常にタイピングがしづらいかつたりします；

なので、更新速度がさらに遅くなったり、1話1話が短くなってしまいかも知れませんが、どうかよろしく願います。

最後に。

今回の話で、読者様の何人かの期待を悪い意味で裏切る事になるかもしれません；

第13話 不意打ちも立派な戦術

エリシアはかつてこれ程までに、自分の目を疑った事はなかった。目の前で一抱え程もある倒木を、槍や鉾よろしく振り回している人間を見れば、そう考える事も仕方ない事だと言える。

技術など介入しない純粹な力。あまりに圧倒的な力。

ただ迫りくる力を、それを超える力を以てねじ伏せる。

ギルドで両手大剣を片手で持ち上げた時から、只者ではないと思っていたが、それ以上の力の持ち主であったことを認識した。

振り下ろされる豪腕を倒木で払いのけ、飛び交う斬撃は最小限の動きで避け、時には木を盾に使い、また新たな木を持ち上げる。

クレイジーウルフ
狂黒狼は勝てないと悟ったのか、遠吠えを一つ残して森の奥へと消えた。

ユウマはしばらく辺りを警戒し、再び襲い掛かってこない事を確認した後、ポーチから小瓶を一つ取り出しながら、彼女の近くにしやがんだ。

「ほら。これ飲んで」

差し出された小瓶を満たしていたのは琥珀色の液体。

彼女も数度しか見た事のない、『秘薬』^{エクリサー}に間違いなかった。

一般的な回復薬と一線を画す程の効果を持つ薬。古の技術を用いて作られている為、これを作れる者はほとんどいない。材料も高価なので、値段も相当なものだ。

驚き、そんな高価な薬は受け取れないと言おうとしたが、

「はいはい、つべこべ言わずに飲む」

彼女の言葉に被せるようにユウマが言った。

ユウマはエリシアに小瓶を握らせ、それを彼自身の手で包んだ。

雨で冷えた手のひらに、暖かさが伝わる。ひどく心地よかった。

顔を見て、言っても聞かないだろうと諦め、彼女は小瓶の中身を飲み干した。

空になった瓶を捨てると、すぐに体中の傷に熱を感じ、痛みが引いていくのが分かった。

だが『秘薬』^{エクリサー}がどんなに優れた薬であっても、基本は回復薬。流れ出した血や、体力までは元には戻らない。

また、骨折などの大きな怪我也、効果はあるが完治することは出来ない。だが、とにかく一命は取り留めた。

「……すまない。ありがとう」

幾分か軽くなった頭を持ち上げ、ユウマを見ながら感謝の言葉を伝えた。

だが、安堵したようなユウマの背後に見た。

クレイジーウルフ
狂黒狼がこちらに向けて大きく顎を開いているのを。

「ッ!!」

放たれる竜巻。標的を挽肉へと変える一撃。

それがこちらに向けて放たれた。

声を出す暇も無かった。

だが、彼女と向き合っていたユウマが突如目を見開き、弾けるように振り返って立ち上がった。

まるで、エリシアを守るかのように両腕を広げて。

そして、

ドグシャー！！と肉を引き裂き、押し潰す音が響いた。

直後に、バシャリと液体を被るエリシア。

酷く熱く、鉄臭い液体。その色は赤。

彼女の盾となったユウマの血だ。

地面と水平に伸びる腕から、雨と共に赤い液体がボタボタと地面に落ちていくのを、彼女は呆然と眺めていた。

《ギイヒアハハハハハハ！！》

クレイジーウルフ
狂黒狼の狂った笑い声が酷く不愉快だった。

流れていく血が、地面を赤く染めていく。しかし、ユウマは倒れなかった。いまだエリシアを守るように立ちはだかっていた。

「あ……」

ユウマに近づこうとしたが、彼女の体はその意志に従わない。

彼女の頬を、雨とは違う水が伝っていった。

4日前に会った人物が、たった一度だけ助けた彼が、命がけで彼女を救ってくれたのに。彼女はただそれを見る事しか出来なかった。

何故、何故、何故。

噛み締めた口の中に、鉄の味が広がった。

無力な自分が悔しかった。何もできない自分が悲しかった。

クレイジーウルフ
狂黒狼が再び、顎を大きく開く。蠢きだす力。

「や……や、めろおお……！！！」

振り絞って出した声は、雨音にかき消されるほど小さなものだった。

動かそうとした体は痙攣する程度にしか動かなかった。

もう逃げてほしかった。いくらなんでも、もう一撃あの攻撃を受けたら死んでしまうことは明らかだ。

どうして、どうして、どうして。

そんなエリシアの思考と、
クレイジーウルフ
狂黒狼の攻撃を中断させたのはユウマ
だった。

そうさせたのは力ではなく、技ではなく、魔法ではなく、

「アハハハ……」

乾いた笑い声だった。

痛い、痛い、痛い痛い痛い痛い痛い痛い。

まるで、体中を焼けた鉄の棒で滅多打ちにされたみたいだ。

体からあふれ出す血がどうしようもなく不愉快だ。

だが今何よりも俺の心を覆っているのは、たった一つの感情だけ。

恐怖。

ワイウルフ
銀黒狼の時に感じたものとは比べ物にならない恐怖。自分でも何に怖がっているのかわからない。何故か、痛みや死ぬことに対して

じゃないのだけは分かる。

ただ、怖い。怖い。怖い、怖い、怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い。

だけど、

逃げ出せない。

俺の後ろにはエリシアがいる。

あの骸骨が消えたのか、それともまだしたり顔で彼女の後ろにいるかはわからない。

けれど、今俺が退けば間違いなく死ぬだろう。

それは絶対に嫌だ。そんな光景は見たくない。

……あれ？ 待て。

今の俺には力がある。目の前のモンスターを殺す力が、この状況から自分もエリシアも救うだけの力が。

なのに、

……どうして俺はこんなに恐怖を感じているんだ？

考えて、そしてその答えはすぐに出た。

「アハハハ……」

あまりに簡単な解に、思わず笑いが漏れた。

俺が怖がっていたのは、死ぬことじゃなかった。

今俺が助けようとしている人から、怖がられるのを怖がっているんだ。

例えばあなたの前で、凶暴なトラやライオンがたつた一人の、それも子供くらいの人間が、銃など使わず素手で殺した場面を見たとき、あなたはその人物になんと声をかけるだろうか。

きっとこう言うだろう。

『化け物』と。

思えばこちらに来てからそうだった。

能力を誰かに見られる事を、酷く嫌だと感じ、能力を確認するときも人目の無い早朝に行った。

サンドフォーム
砂蟲との戦いの時も、本当に命の危機が迫るまで自分の意思で能力を使おうとしなかった。

自分の中で無意識的に、自己防衛していたのかもしれない。

子供を助けたときは意識的に使用したが、子供がこちらを見ていなかったので、使えた。ひよっとしたら、あの時下にいたミアさんに見られたかもしれないが、それは分からない事だし、今となつてはどうでもいい。

だが今回は使用すれば、間違いなく能力を見られる。

そして、彼女を助けられたとしても、彼女から『化け物』を見る目で見られるのが、たまらなく怖い。

だが、この力は何のために使うと決めたんだ？

自分を、そして誰かを護るためだったはずだ。

「甘いんだよなあ、俺は……」

なんだかんだと言っておきながら、いざとなると力を振るうのを恐れるウドの大木。

「どうにかなる……。そう思ってたんだけどなあ」

だけど、ここでそれを恐れ、彼女を死なせてしまったら、俺はきっと、後で死にたくなる。

だから俺は、

ここで力を振るおう。見られる事を恐れないと誓おう。

でも、見せたエリシアには恐怖を与えてしまう。だから、

「じめん、エリシア」

先に謝っておこう。どうか許してほしいな。

なあ、さくじやない。

第13話 不意打ちも立派な戦術（後書き）

作者の中二病フルスロットルな話でした；

そして次回、ユウマ君が本気で戦います。

力をあまりさらけ出さないのが良いという感想を頂いていたのですが、ここにきて力を使ってしまう；

しかし、そうそう使うものではないので、どうか安心して頂けると幸いです。

第14話 悪あがきは大体死亡フラグ（前書き）

一ヶ月ぶりの更新です・長らくお待たせして申し訳ございませんでした；

今後の物語をどうするかも考えていたので、そこに矛盾が出ないようにするために、時間が多くかかったしまいました；

今後とも、よろしく願います。

第14話 悪あがきは大体死亡フラグ

雨音にかき消されてしまいそうなほど小さなその笑い声は、なぜかひどくエリシアの耳に響いた。

クレイジーウルフ
狂黒狼も、大きな傷を負ったまま笑うユウマをいぶかしんで攻撃を止めている。

「甘いんだよなあ、俺は……」

赤き命の水を流し続ける彼のその声には、自嘲の響きがあった。

何故彼が自分をあざけるのか、彼女には理解できなかった。

《気デモ狂ツタカ人間。フン。無闇二首ヲ突ツ込ムカラソウナル
ノダ》

鼻で笑う狂黒狼を、クレイジーウルフ エリシアはキツ！と睨みつける。

黙れと怒鳴りつけたかったが、荒く息を通す喉からは満足に言葉がでなかった。

「どっぴかなる……。そう思ったんだけどなあ……」

ユウマのつぶやきは続く。

《今カラデモ尻尾ヲ巻イテ逃ゲ出シテミルカ？逃ガス気ハナイガ
ナ》

ニタリと口角を吊り上げた狂黒狼が、森の闇の中再び口を開く。
口内の奥で渦巻く力は、すでにいつ解き放たれてもおかしくない状
態だ。

エリシアが、力の限り叫ぶ。

喉が裂けてもかまうものかと言わんばかりに。

「ユウマー！！逃げろお！！」

足の折れた自分でも、ほんの僅かな間なら足止めできる。その隙
に逃げ出してくれれば。

その後自分がどうなるか。そんな事は考える余裕がなかった。

命がけで自分を助けてくれた人間がいてくれたという事実だけで、
十分だった。

だから、これ以上を望むのは傲慢だ。

だが、彼はエリシアを裏切る。

「じめん、エリシア」

ユウマはその場から動かなかった。

そして次の瞬間、

ドツ！という音を従え、強大な衝撃が襲い掛かってきた。

大気を吹き飛ばしながら迫る、横向きの竜巻。

それが的確にユウマの体へと吸い込まれ、

バキィーン！と、まるで剣と剣を打ち合ったような金属音が発生した。

《ナニツ！？》

「効かねえよ」

いつの間にか腕を体の前で交差させていたユウマが呟く。

彼女が見たのは、交差されている、異形の形となったユウマの両腕だった。

指は根元まで青白く輝く爪になり、肘まで手甲のような硬質感を持った茶色の腕には、爪と同じ輝きを放つひび割れのような模様があった。

あまりに禍々しい、青の光。

その腕は、正に『化け物』のそれだった。

ユウマの周りの空気が、まるで凍り付いてしまったように感じる。

致命傷レベルの傷を負った人間のはずなのに、弱った感じは一切なかった。

寧ろ、もし今彼と剣を交えたら、自身が万全の状態であっても勝てる気がしないと、エリシアは感じた。

刹那に、ユウマの姿がフツと赤い光を残して消える。

そして、驚きに動きを止めていた狂黒狼クレイジーウルフの頭上数センチの空中に現われ、その頭蓋に握り締めた拳コブシを叩き込んだ

漆黒の体が、泥まみれの地面に沈んだ。

《グオオアアアアアア！？》

足を地に着けると、即座に背中に背負う大剣を抜き、腕を大きく回しながら、地面ごとクレイジーウルフ狂黒狼を切上げる。

全長4メートルの巨体が宙を舞った。

ユウマの振るう大剣は、現在ただの鉄の板と呼んで差し支えないほど痛んでいるので、クレイジーウルフ狂黒狼の体に斬撃を刻むことはできなかった。

しかし、単純な打撃となれば、剛毛で邪魔されても問題ない。

ユウマも上に吹き飛ばしたクレイジーウルフ狂黒狼を追う様に跳ぶ。

ぬかるんだ地面が、あまりの脚力に爆ぜる様に吹き飛んだ。

飛び上がった勢いを利用し、逆袈裟に剣を振るう。

空中にいるため、地面に足を踏ん張って剣を振るうことはできないため、剣の自重と遠心力を十二分に利用して、回転しながら剣を何度も振るう。

瞬きするほどの間での出来事だった。

ほぼ一瞬であらゆる方向にぶつけられた力が相殺し合い、クレイジーウルフ狂黒狼を吹き飛ばすことなく空中に留めた。

最後にコマのように縦に回転し、十分な威力を持った一撃を振り下ろす。

ベキゴキボキ！と骨が折れる音が聞こえた。

クレイジーウルフ
狂黒狼を殴った反作用の力がユウマに働き、彼の体を浮かせる。

同時に、あまりにも規格外の力で扱われた大剣が、根元から砕けた。

だが、ユウマは焦ることなく柄だけになった大剣を捨て、地面に叩き落した狂黒狼に腕を伸ばした。

クレイジーウルフ
すると、その腕に重なるように半透明の青い腕が出現し、それが狂黒狼の体をがちりと掴んだ。

青い腕に引つ張られ、再び空中へ持つていかれる狂黒狼と反対に、ユウマは地面へと急降下する。

「おおおおおおお！！！」

落下エネルギーを存分に乘せて、青い腕が地面に振り下ろされる。

クレイジーウルフ
たたきつけた衝撃が大きすぎて、狂黒狼の体がボールのようにバウンドした。

その体に、眼と鼻の先まで接近したユウマが姿勢を落とし、拳を突き出す。

クレイジーウルフ
動きをシンクロさせた二つの右拳が狂黒狼を木々を薙ぎながら20メートルほど吹き飛ばしていった。

エリシアの体は無意識のうちに震えていた。

雨で体が冷えたせいではない。

それは恐怖からくるものだった。

果たして今自分が見ているものは本当に現実の出来事なのか。

それほどまでに非常識な現実^{リアル}

人間の形をしながら、人外の力を操る彼を、どんな化け物^{モンスター}よりも、『化け物』であると感じていた。

《グアアアッ！！調子に乗るなよ人間風情がア！！》

怒声と共に、森の奥から大きく口を開いて飛び掛ってくる。

ナイフのような歯がかみ合ってガチンと音を鳴らす。噛み千切ったのは空気だけだった。

再び赤い残光を残して消えたユウマは、次は狂黒狼^{クレイジーウルフ}の真横に現わ

れ、その脇腹に拳をめり込ませた。

《ゴハツ！》

血を吐いて地面を転がるクレイジーウルフ狂黒狼。

ユウマが追い討ちをかけようとすると、苦しげながらも飛び退き、幾度も爪を振るう。

イジーウルフ飛来する真空刃の隙間を縫うようにスルスルと避け、ユウマはクレ狂黒狼と距離を詰めた。

しかし、ユウマが拳を振るう前にクレイジーウルフ狂黒狼の前足が振り下ろされた。真空刃を生み出すためでなく、目の前の脅威を直接破壊するために。

それすらもユウマは腕一本で受け止め、即座に蹴りを放つ。吹き飛ばされるクレイジーウルフ狂黒狼はしかし、身を震わせながらも立ち上がる。

だが、

《貴様ツツアア阿亜鳴亜A a g h i l o ア a b v c ! ! ! ! ! 》

突如、クレイジーウルフ狂黒狼の言葉がおかしくなった。

うまく聞き取れなかったというより、言葉として認識できないといった感じだ。意味の無い音の羅列の様であり、全く知らない言語のようにも聞き取れる。

《y t e m o 愚 l o ; w q l b m z / 尾 g h u a k j n b l a @
 / 止 z x / j ; a g g h a j l r l e ; a ; 》

さらには、どう風を扱ったのか、まるでハンマーで殴ったような跡が幾つかの幹にできていた。

《グアア s a f g a アオオ m i ; ; 》オオオオオ i ; ; o r e
y i オオオオ i 》 / , a g h j k ; a s d オオオオオオオ
オ！！！！》

エリシアが目の前の光景を呆然と見てみると、ユウマがこちらに駆け出しているのが見えた。

その直後に、エリシアは倒れた木の一本が自分の方へ飛んでくるのを視界に捕らえた。

だが、彼女に直撃するはずだったその木はユウマに殴られて軌道を変え、彼女のすぐ横の地面に刺さった。

「いい加減にしるよ、この野郎……！！」

絶対零度の怒声と共に、ユウマの周りに、無数の浅葱色に輝く剣が出現した。

魔力そのものに近い、しかし絶対的に違う何か。

その得体の知れない剣がクレイジーウルフ狂黒狼へと飛び、その体に深々と突き刺さる。

そして、その剣はガラスのように砕け散り、刺さっていた場所から鮮血が噴出した。

満身創痍の黒い体がドサリと地面に投げ出される。吹いていた風が一気に弱まった。

「エボニー……」

ユウマが聞いたことの無い単語を発する。すると、彼の右手に黒い光沢を持つ小さな何かが現れた。

荒い呼吸をする獣ケモノの額に、ユウマは右手のそれを押し当てる。

《我八km……!!wq我0eajmアアxm3/bvnz:
「euis・アアアア!!!!》

直後に、火薬の爆ぜる音が一度だけ、森の中に響いた。その音と共に黒い体がビクリと跳ね、そしてそれっきり動くことは無かった。

第14話 悪あがきは大体死亡フラグ（後書き）

というわけで、四の五の言わずにぶちのめしました

今後は、変化したユウマの腕、謎の死神などの無計画に乱立させたフラグを回収してきます。

あと、それをした一ヶ月前の自分を殴ってきますb

第15話 女性お助けキャラは大体美人（前書き）

気づけば二カ月もの間が……。

本当にすいませんでした；

それでも見放さずに見ていただける方がいらっしやると幸いです。

第15話 女性お助けキャラは大体美人

*

雨はいつの間にか止んでいた。

どうやら、クレイジーウルフ狂黒狼が生み出した風で、雨雲が吹き飛ばされたようだ。

煌々と輝く青白い月が、世界を白と黒に染めていた。モノクロ

ただの肉塊となった獣を見下ろすユウマの表情は、深い影に隠されて分からなかった。

彼が持っていた黒い武器が光の粒となって消え、腕も人のそれと同じ姿に戻る。

そして、彼はゆっくりとした動作でこちらにふりむいた。

笑っているような、泣いているような、そんな顔をしていた。

「ユウ……ユウ、マ……」

見たことも無い魔法や武器を扱い、化け物の腕を抱える人間。

お前は、一体何者なんだ。

覚悟していたつもりだったが、実際にその現実を目の当たりにするのはやはり辛かった。

彼女の瞳に浮かぶ恐怖の色が、暗闇でも解るほど見て取れた。

だけど、とにかく救えた。もうあの死神の姿は見えない。

後はもう一度、彼女に謝るだけだ。

俺が言葉を紡ごうと口を開いたその時、

俺の背後から強い光が発せられた。

咄嗟に飛びのき、エリシアの前に立って身構える。

光源は、クレイジーウルフ狂黒狼の亡骸の上に浮かんでいる、ドッジボールほどの大きさの光球だった。

警戒するが、それからはモンスターと対峙した時に感じた敵意や殺意と言ったものが感じられなかった。

光の球はその輝きを増し、形を変えていく。

そして一際強く輝き、光が収まるとそこには、一人の女性の姿があった。

腰まである、ウェーブの掛かった若草色の髪に、絵画や協会のステンドグラスに描かれている女人のような美しい顔立ち。

大きな布を体に絡ませたような服装が、彼女の神秘性を際立たせていた。

深い緑色の瞳が俺とエリシアを捕らえる。

《この者を……クレイジーウルフ狂黒狼を倒していただき、本当にありがとうございます》

第一声に、空中に漂う彼女はそう言った。

鈴の音のような、心地よい声だった。

「あなたは……？」

《私は風の精霊、『エテジアン』にございます》

「精……霊……？なぜ精霊が人前に姿を……？」

エリシアが苦しげに言う。秘薬を飲ませたとはいえ、痛みはまだ残っているのだろう。

しかし、精霊か。

元の世界では、御伽噺やファンタジーに欠かせない存在。

大体が女性で実態の無いものとして描かれ、人を助けたり、逆に人に害なすこともある。

目の前の精霊は雰囲気からして、前者のようだ。

《私は、この狂黒狼クレイジーウルフに取り込まれ、力を奪われていたのです。理由はわかりません。気づいたら、彼の中に居ました》

「精霊の力を？そっか…だから、こいつはあんな魔法のような攻撃ができたのだな」

ギルドで見た図鑑に載っていた情報に、狂黒狼クレイジーウルフが真空刃や風のブレスを使うなどという記述は無かった。

妙だと思っていたが、そう言う事だったのか。

《私の力を取り込んだことで、この者は知識と力を得ました。しかし、精霊の力は強大です。故にこの者はその力を抑えられず暴走しました。あなた方が倒してくれたおかげでこの者も……苦しみから解放されたでしょう》

「…そっか」

しかし、自身が抑えられないほどの力を持った精霊を、どうやってこの狼は取り込んだのだろうか。

俺が思案していると、少し風の精霊から発せられていた光が弱まった。

《……やはり、長い間力を奪われすぎたようです。今の私はまもなく消えてしまうでしょう》

見ると、光が弱まっただけでなく体全体が透き通って見える。

《ですが、私は私の力で引き起こしてしまったことに対して、償いをしなければなりません。どうか、私の力を使っただけではありませんか？》

「いいのか？その力を悪用するかも知れんぞ？」

《あなた方に、悪意は感じられません。きっとこの力を正しく扱っていただけと信じています》

言い終わると、風の精霊が一際強く輝き、視界を真っ白に染め上げた。

世界に黒色が戻ってくると、そこに精霊の姿は無かった。

《どうか、お願いします……》

そんな言葉が聞こえた。

俺の後ろに居るエリシアが握っていた剣から。

その剣は、最初に見たときと姿形が変わっていた。

レイピアであることには変わりはないが、刀身が淡く緑色に輝き、ナックルガードも風の流れを連想させるデザインになっていた。

「……は？な、なぜ私の剣に？」

《私と私の力を扱うには、器が必要なのでございます。それに、この者を倒したのはあなたでございましょう？》

「違うぞ。あの狂黒狼クレイジーウルフを倒したのはユウマだ。その黒髪の「えっ！？ともものすごい慌てた様子の声が聞こえた。

《そ、そうなのでございしましたか？すみません、早とちりを……。あの者の中に居る間は、夢現ゆめげんな状態でしたから……》

……精霊せいれいって意外に天然さんだったようだ。

「だったら、ユウマ。お前がこの剣を使ってくれ」

そう言っただけで俺に風の精霊の宿った剣を差し出すエリシア。

「いや、エリシアの剣なんだから、そのまま使って」

ゲームの影響からか、あまり突きが主流の西洋剣は使いたくないと思えない。刀や大剣のように、ぶった切る剣の方がいい。

それに、どちらにしろ俺の剣は折れてたから無理だったろうし。かと言って、俺に直接入ってこられても困る。クレイシーウルラあんな風になるのは勘弁だ。

「しかし……」

「いいから。それに、さっきから無理しているんだろう？」

さっきからエリシアの体は僅かに痙攣している。きっと骨折の痛みをなんとか表に出すまいとしているのだろう。

その原因の半分は恐怖からくるものかもしれないが。それでも骨が折れてりゃ痛いだろう。俺だったらわめきながらのた打ち回るぞ。

《あなた……いえ、ユウマ様も……無理をなさっているように見えますよ》

俺が？あ、そういうえば最初に胸に一撃食らってたっけ。血はまだ少し流れてるけど、痛みは無い。

……これがダンテの再生能力のせいであって、決してアドレナリ

んのせいで痛覚が鈍っているとは思いたくない。アドレナリンが切れたときに恐ろしい。

《ユウマ様は、自覚しておいでで……？》

精霊の言葉にちょっと心配になって胸に視線を向けてみる。

ってひどいなこれ。

「…ああ、してる」

とうにかせざるを得ない。

これは、俺もエリシアも早いところ町に戻って治療を受けた方がよさそうだ。

俺は踵を返し、倒れた木々の中から彼女の足を固定する添え木になりそうな木を探し始めた。

《どうか、お願いします……》

光と共に消えた風の精霊の音が、私が握る剣から聞こえた。

見ると、剣の形がだいぶ変わっている。

「……は？な、なぜ私の剣に？」

会話の流れから、ユウマに精霊の力を与えると思っていたのに。

《私と私の力を扱うには、器が必要なのでございます。それに、この者を倒したのはあなたでございましょう？》

そうではない。奴を倒したのは実質ユウマだ。私がやったことといえば、せいぜい奴の目を潰した程度だ。

その事を伝えると、風の精霊はひどく驚いた。

どうやら勘違いしたらしい。

なんとということだ。命まで助けてもらった上に、精霊の宿る霊装まで得ては彼に申し訳が立たない。

後で風の聖霊に、彼の武器に移り変わってもら

《失礼ながら、主殿》

頭の中に直接響く声。

これは、私の炎剣に宿る精霊、『アータル』の声だ。

普段は滅多に喋る事など無いのに。

《器を乗り換えることは、精霊に大きな負担がかかります。ましてやこの風の精霊の力は十分にございませぬ。移し変えると同時に消滅してしまうかもしれませぬ。故に、それは難しいかと》

そうなのか……。では、

「だったら、ユウマ。お前がこの剣を使ってくれ」

剣を彼に差し出す。元々この剣は一般的な武器屋に売られているものだ。惜しくは無い。

だが、彼は苦笑しつつ受け取ることを拒否した。

それでも、彼の恩に報いたいと思い食い下がろうとしたが、

「しかし……」

「いいから。それに、さっきから無理してるんだろっ?」

心臓が跳ねた。

彼の姿を見ている間、ずっと体が震えていた。

恐怖からの震え。

ユウマは見抜いていたのだ。私が彼に恐れを抱いている事を。

《あなた…いえ、ユウマ様も……無理をなさっているように見えますよ?》

風の聖霊が声をかける。彼の心情を理解しているような言葉。

ユウマは、弱弱しく微笑んだだけだった。まるで、そんな事は慣れっこだと言わんばかりに。

《ユウマ様は、自覚しておいでで……?》

彼は、少し俯いて口を開く。

「…ああ、している」

そして、ユウマは背を向けると周辺をあさり始めた。

彼の言葉が去来する。

『少し色々あってね。故郷を追われたんだ』

その言葉の意味が解ったような気がした。

強大すぎる力、異質すぎる力に対して、人は羨望より恐れを抱く。
今の自分のように。

その力が仮によい方向に使われていたとしても、人々はその力が
いつか自分たちに向くのではないかと危惧する。

そして、最終的には数の力でそれを排斥する。

彼が『故郷を追われた』理由も恐らくそこにあるのだろう。

彼が進んで討伐系の依頼を請けようとしなかったり、ギルドで恐
喝された時に彼が何もしなかったのは、きっとその力を使いたくな
かったからだっただけだ。

「エリシア、足出して」

いつの間にか目の前にいたユウマが声を掛けた。

手には板状の木がある。何をしようというのだろうか？

「足、折れてるんだろう？コレを添え木にするから」

そう言って、私の足にその板をあてがった。

痛めないように気遣っているのが分かるほど、そっと。

彼は一瞬困ったような素振りを見せた後、おもむろに自らの衣服を引き裂き、それを私の足に巻きつける。

クレイジーウルフ
狂黒狼に付けられた傷跡が頭あたまになる。見ている方が痛々しい傷。
しかし彼は気に止める様子もなく、処置を施していく。

最後に引き裂いた衣服を固く結ばれたときには流石に痛みが走り、声が漏れた。ユウマの手が一瞬止まるが、すぐに処置を再開し、足はしっかりと固定されていた。

「おし。それじゃあ、街へ帰ろう。病院でちゃんと治療しなきゃ」

彼は私の前に背を向けてしゃがみ込み、両手を腰の後ろへ回した。乗れ、と言っことなのだろうか。

「辛いかも知れないけど、我慢して」

それは私の足を心配しての言葉だったのか。あるいは、私の彼に対する恐怖心を察しての言葉だったのか。

「……すまない」

震える腕を彼の肩に掛け、もたれかかる。

ユウマは立ち上がって私をおぶり直し、葉の間から挿し込む月明かりのカーテンを押し分けるように森の中を歩き出した。

第15話 女性お助けキャラは大体美人（後書き）

エリシアが持つ風と火の剣は、DMC3に出てきた『アグニ&ルドラ』が元ネタです。

アグニとルドラは共にインド神話に登場する火と風の神様の名前です。

アータルはゾロアスター教に登場する火の神様で、エテジアンはギリシャ・トルコのエーゲ海沿岸地域で吹く北風の名前です。

風の神様、いい名前の居なかつたんです……。

第16話 重要そうなヒントは役に立たない(前書き)

最初がちょっと変ですが、投稿する話を間違っているわけではないので、どうかよろしくお願いします。

第16話 重要そうなのプリントは役に立たない

そして気づくと、俺の視界は全て白で塗り上げられていた。

以前に見たのと同じ、果ての果てまで白一色の世界。

はい絶叫。

いやいやいやいや待て待て待て待て！何だこのオチ！？

異世界に転生したと思ったら四日で死亡とかありえなさ過ぎる！
現実はそのまんだったって？認めてたまるか！

さあ、さつくりと思い返してみようか。エリシアを助けた後どう
なったのかを。

*

草に滴る雨露が、一歩進むごとに月光を反射してはじけ飛ぶ。

急ぎながらも、背負っているエリシアにあまり振動を伝えられないよ
うに気をつけて走る。

秘薬で傷は治っているが、血を結構流していたし、長時間雨に濡れっぱなしだったこともよろしくない。

ここまできて死なれても困る。街に灯る火の光を目指して無言で進む。

街の入口の門は固く閉ざされていた。街の門は、夜間のモンスターへの襲撃に備え、決められた時刻に閉門される事になっていると聞いていた。

とは言え、緊急事態なので門が開く明け方までのんびり待っているわけにはいかない。ちよつと近所迷惑だがしょうがない。

俺は大きく息を吸い込んだ。

「誰か！ 門を開けてくれ！ ケガ人がいるんだ！」

しばらくすると、門の脇に建っている見張り塔から、鉄兜をかぶった兵士が顔を出し、こちらに向かって叫んだ。

「冒険者か！？」

「そうだ！銀黒狼ワイウルフの森で怪我をした人を連れてきた！出血と雨で体力を奪われている！すぐに開けてくれ！」

俺の言葉を聞いた兵士が党の中へと引っ込んですぐに、重低音と共に門が開いた。

二、三人の軽装の兵士が、担架を持ってこちらへと駆け寄ってく

る。

「ケガ人は!？」

「この人だ。頼む!」

背負っていたエリシアを、担架に乗せる。わずかに呻き声を漏らし、俺の方を見るエリシア。

「ユ……ユウマ、お前の怪我は……?」

「おい! 君もひどい怪我をしているじゃないか!」

「それより、早く彼女を!」

二人の兵士がエリシアを乗せた担架を持ち上げた。

こちらを心配そうに見ているエリシアに、大丈夫だという意味合いの表情を向けた。

はあ、とにかくこれで大丈夫だろう。

「さあ、君も急いで、……おい!……君……大……」

あれ? おかしいな? 兵士の声が遠のいていく。

ついでになんだかフラつくし、視界もだんだん狭くなって……。

……。

＊

……つて最後オオオオ！！！！

俺の記憶はそこでプツンしているから、恐らく決定的。

なんだか頭がふらふらすると思ったら、体の重心がずれてそのまま石畳とキスをしたのを明確に思い出した。

なんてこつたい、しっかり死んでるじゃん。貧血か？死因は出血多量による貧血か？

嗚呼、お父様お母様。二度も死んだ息子をどうかお許しください。

「落ち着け、お前はまだ死んでないから」

俺があちらにいる両親に、涙と共に謝罪の言葉を零していると、後ろからあまり聞きたくない声が聞こえた。

嫌々ながら振り向くと、そこには予想通り、白髪ロン毛の神様が呆れ顔で立っていた。

不貞腐れながら口を開く。

「なんだよこの糞野郎」

「なんと辛辣な挨拶。もうちょっと再開を喜んでくれないんでない？ ついでにもうちよっと私のこと敬っても良くない？」

「こっちは二度と会いたくなかったよタコ助。後、お前を敬うと何か北方神話の神々に失礼な気がする」

主にオーディンとかツールとかフレイに。

「言いたい放題だなおい。コチトラせっかく耳寄りな情報を教えてやろうと、わざわざ魂だけこっちに引っ張ってきたのに」

「あ、死んじやったわけじゃないのね……って、それってほとんど人殺しじゃねえか!？」

「権利とお金は使ったためにある!」

「職権乱用反対!!!」

息を荒げて神様に拳を振り下ろす。が、振るった拳はム力つくくらしい楽しそうに笑っているその顔を、スルリとすり抜けた。

「まあ落ち着け。前回来た時とは違うから私を殴ったりはできないよ残念でしたー」

ブッコロスゾ。

「さて冗談はさておき、だ。耳寄りな情報ってのは本当のことだからまあ聞いておきなさいな」

「わかったからとつとと言ってくれ……」

この短いやりとりだけで、俺の胃は可及的速やかに対応する必要があるレベルのダメージを受けているんだ。

まずは二つ目、と指を一本だけ立てて俺の前に持ってくる神様。

「お前さんはまだ死んでいなかったって事。まあ、これはどうでもいいよね割と」

堪忍袋の緒がギリギリと音を立てている。大人になれ俺。

「そんで二つ目。近々お前さんは誰かと一緒に別の町に行くことになるだろう。その誰かの目的地についたら、その武器屋を覗いてみるといい」

「なんだ？いい武器でもあるの？」

「続きはつえぶで！」

「……ごめん、聞いた俺が間違いだったホント」

もうこいつからさっさと離れたいよ。

「ん〜。伝えたい事は伝えたからさっさとあっちにお帰りなさいな、つか早く帰れ恩知らず」

とりあえず帰ったら何かモンスターを大量に潰してこようかな。断じて八つ当たりなどではない。

神様がピツと指を虚空に向けて付きだすと、その先に見覚えのある扉が開いた。

世界を超える扉。コレをくぐれば帰れる。

ああよかったと安堵しながら扉の敷居を跨いだ足が不意に止まった。

「……おい、神……バカ。二つだけ質問」

「なんで言い換えた！？そのまま言えばよかったじゃん！とことん敬ってないなコンチクショウ」

地味にイジケだした神様を無視して、俺は質問をぶつける。

「あなた、俺の顔になんか細工した？」

そう、あちらに行つてからやたら実年齢より上に見られることが多い気がするのだ。ちなみに言つておくが、俺は元の世界で周りより老けた顔をしていたわけではない。

人の顔と言うものは年を経ていく中で変わつていくものであるが、それだけでなくその人の経験してきたことにも左右される。

辛いことや悲しいこと、あるいは修羅場と呼べる場面を乗り越えた人ほど、顔が大人びて見えるものだ。

俺とて十七年の人生の中にくつもの辛い事や悲しいことを乗り越えてきたが、俺の経験程度は元の世界の人々もしているはずだ。

むしろ、あちらの世界の方がそういった経験が多いと思う。

モンスターが闊歩している世界で命の保証などある訳がなく、悲劇の数などそれこそ星と同じくらいあるだろう。

文明レベルも中世時代であれば、貧困層や奴隷制度の問題もあるかもしれない。まだ見たことはないが。

そんな場所で、生きている人々が、今までぬくぬくと育ってきた俺を年上にみる理由がわからないのだ。

「ん？お前さんの顔はあちらの世界と同じものだぞ。……あ、言つておくが当然グシャグシャになる前、つまり事故に遭う前の顔だからな」

それは当たり前だ。どこのホラーやスプラッター映画だ。そんな顔だったらエリシアも問答無用で切り捨てていただろう。

「多分原因は、お前さんが死んだことと、あの扉を潜ったことだ」
「どういう事だ？」

「さっきお前さんが考えていたとおりだよ。人の顔は経験の積み重ねで大人びてくる。だったら、『死』なんて言う大きな経験を乗り越えたのだったら当然と言えるだろう」

確かに生きている間に『死』を経験した奴なんて居ないだろう。居たとしたらそいつは大嘘つきか、臨死体験者だ。

「原因の第二に、あの扉を潜った時に君は全く覚えていないだろうが、お前さんが『真理』と呼んでいる物も垣間見ているんだよ」

曰く、『真理』とは生命の原書、世の理、じよ宇宙の起源、さらには生物無生物森羅万象が辿った歴史や経験、知恵などが記録されている、超巨大なデータベースだそうだ。

これは全ての生き物の精神の奥の奥、意識・無意識の壁すら飛び越えた、言うなれば『魂』によって、コンピューターネットワークのように繋がっているらしい。

コンピューターネットワークと例えたように、全ての生き物はそのデータベースにアクセス、内部の情報が閲覧できる。

しかし、一生命のキャパシティに対してそのデータはあまりにも高次元かつ莫大な為、末端の末端のそのまた末端のデータでさえ、まともに見てしまえば頭がパンとなるらしい。

誤って『真理』にアクセスしてしまい、廃人となってしまうた名もなき哲学者が居るとか居ないとか。

それはさておき。

とにかく俺は『真理』の中にあつた、ありとあらゆる物が積み重ねてきた経験やら知識やらを見た、というか疑似体験してしまった所為で、そういう風に見られているらしい。

俺が『真理』を見ても大丈夫だったのは、死んでいたおかげでキヤパシテイの限界が一時的に無くなっていたからだそうだ。

故に全く覚えていないのだが。

「不本意だけど納得した。そんじゃ二つ目に、俺が見たあれは何だ？」

「あれって？」

「すつとぼけんなよ、あの骸骨だよ」

やや語気を強めているが、神様は本当に知らないと言っても言つようにキョトンとしている。

「いやいや、私が行ったのは君の望む能力を与えることだけなのだけれども。……一応、その骸骨とやらの事について教えてくれ」

俺がその骸骨の特徴、いつ見たか、それによって何が起きたかを伝えると、なにやら似合わない顔で考え始める神様。余談だが、

イケメンがどんな顔をしても様になるこの世の理をぶち壊す方法をどなたか知らないだろうか？

認めたくはないが、この場に画家がいればすぐさま筆を取りそうなほど絵になっている。ああ忌々しい。

「そうか、わかった。全くおまえさんもよく数奇な運命を背負ってるもんだね」

「……異世界転生した件に関しては九割九分九厘お前に責任があると思うんだが」

「お前さんの見た骸骨だけどね」

サラッと流しやがったコイツ。

「たぶんそれ、死神……いや、『死』そのものだろうね」

「どう違うんだ？」

「君は死を経験したことで、『死』が可視できる体質になってしまったんだろっ」

「『死』が見える？……靈感みたいなもんか？」

「認識としては間違っていないけど、仕組みが違う。人間の眼を、カメラに置き換えて考えてみるといい。カメラにはファインダー越しに映る風景を、モノクロやセピアに見えるようにする機能や、暗闇を写す赤外線カメラなんてのもある。要するに、お前さんが見たその骸骨も、眼の持つ一つの機能によるものだ」

「カメラの特殊効果エフェクトって事か。だけど、見える奴見えない奴がいるってのはおかしくないか？」

「お前さんは電気製品を使うとき説明書を熟読するタイプかい？
使いながら操作を覚えていくのもいいけど、説明書を見ないとわからない操作もあるよね？ それと一緒に、誰もそんな機能があるなんて知らないし、使い方もわからないんだよ」

「んで、その機能を知ってしまった俺は『死』が見えるようになったと……。厄介ごとの匂いしかなかったな」

誰彼構わずその人の『死』が見えてしまったら、俺の心労は耐えなさそうだ。全部助けるのは無理があるし、見捨てるのも精神衛生上、大変よろしくない。

「ああ、それに関しては問題ない。ピントがちゃんと合わない、以前見えた人であっても見えないから。まあそれでも見えちゃったら、それもまた運命ってことで」

「俺の運命はかなりあんたに引つ掻き回されているんだけど？」

「さあ！ 夜更かしはお肌の天敵！ というわけでとっとと帰って寝る」

言うや否や、神様は俺を扉の中へと蹴りこんだ。

白より輝く白が視界を染め上げてゆき、神様の姿も見えなくなつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2175n/>

If You Over The World ?

2011年4月19日23時19分発行